

文部科学省 地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)



稚内北星学園大学
Wakkanai Hokusei Gakuen University



文部科学省

地(知)の拠点

平成 26 年度

「地域の教育力向上とまちづくりで協働する
地(知)の拠点整備」

事業実施報告書

目 次

ごあいさつ	稚内北星学園大学 学長 斉藤 吉広	1
1. 事業概要（申請書抜粋）		3
2. 推進組織		15
3. 平成26年度事業成果総括		17
4. 自己評価		19
5. 外部評価		25
6. 地域志向教育研究経費		33
7. 分野別（各支援室・各ラボ運営会議）事業成果		39
8. 活動レポート		51
9. 地域活動報告会		73
10. COC推進連絡会議		91
11. 活動記録一覧		99
12. 規程集（平成27年3月31日現在）		121

ごあいさつ

稚内北星学園大学

学長 齊藤 吉広



稚内北星学園は、1987（昭和62）年に稚内北星学園短期大学として誕生しました。そこに至る過程で先人の多大な努力がありましたが、その設立認可申請文書には次のような一節があります。本学園はその出発当初から、いわば「地（知）の拠点」としての役割を期待されてきたということになります。

教育、文化機能の中核としての高等教育機関を整備することは、魅力ある地域社会を形成し、地域開発を促し、安定した生活と豊かな地域社会の創造を目指す本市の発展にとって極めて重要な意義をもつものである。

2000（平成12）年に四年制大学として新たな出発を果たした際には、「最北端は最先端」のローガンの下で＜JAVA、C言語、ネットワーク＞を中心に先進的なIT教育を実践しました。情報社会の高度化と複雑化に対応できる能力を備えた有為な人材を数多く輩出するとともに、レーザー光を用いたインターネット回線システムを地域に構築するなどの貢献も果たしました。

そのうえで、2007（平成19）年、佐々木政憲学長の下で、改めて“建学の精神”に則った組織やカリキュラムの再構築が行われ、「地域に貢献する人材の育成」という使命を果たすための改革を進めることとなります。学ぶ内容として地域が抱える課題を対象とするというだけでなく、学ぶ方法として＜街を教室＞にしたアクティブ・ラーニングに取り組むという面でも、地域志向が強化されていきました。

同時に、地域の行政・経済界・各種団体・市民との地道な関係構築を重ね、稚内・宗谷地域との日常的な連携が深まっています。そしてそれは、地域の皆さんにとって“大学”が少しずつ身近な存在になっていったプロセスでもあったと思います。

2014（平成26）年度の「地（知）の拠点」（COC事業、5年間）としての採択を受けることができたのは、そうした佐々木学長路線の一つの結実でした。どんなに魅力的な事業計画であったとしても、実績に基づかない構想は実現可能だとはみなされないからです。

この報告書は、当該期間の本学 COC 事業の成果と問題点を網羅的に記録し、学内外で共有できるようにすること、そして次のステップに踏み出すうえでの教訓を得るための基礎資料とする目的で作成されました。

予算が付いたのが26年度の10月であったため、その点ではごく短期間の事業成果ということになりますが、従前からの本学の地域連携活動をも含めた活動紹介として受け止めていただければ幸いです。

1. 事業概要 (申請書より抜粋)

地域課題解決型のアクティブ・ラーニングの機会を広げることによって、学生が社会との関わりを実感しながらチーム力及びマネジメント能力を高められるようカリキュラムを改善し、地域社会に貢献する能力と意欲を持った人材を育成する。とりわけ、以下の課題に取り組む。

- ① 小・中・高の生徒に対する地域の教育力を高める活動に大学が積極的に関わり、放課後学習への支援、授業における ICT 利用の支援、情報モラル教育などを履修科目と結び付けて展開する。
- ② インターネットを活用した地域の観光資源の発掘及び観光情報の発信、また観光ガイドアプリの制作やプロジェクションマッピングなど地域との共同事業に学生が主体的に参加していける仕組みをつくる。
- ③ 中心市街地活性化のために、空き店舗を利用した「まちなかメディアラボ」を設置・運営し、学生のボランティアやイベント参加などの地域活動や交流・学習教育・情報発信の拠点として整備する。

I. 大学の目的・目標を踏まえた「地域志向」

(1) 建学の精神における地域志向

本学は、寄附行為第3条及び学則第1条において、大学の目的を以下のように規定している。本学は、教育基本法及び学校教育法に基づく大学の教育をおこない、地域社会に貢献し、キリスト教精神の根底にある人間の自由と尊厳を重んじ平和を愛する人材を育成することを目的とする。

本学は、このように地域社会に貢献する人材の育成を建学の精神として掲げながら、昭和62(1987)年に稚内北星学園短期大学として設立され、平成12(2000)年に四年制の稚内北星学園大学に改組されて今日に至っている。建学の精神がこのように打ち立てられたのは、稚内市が宗谷圏域全体の発展を遂げるための不可欠な柱として高等教育機関の設立を位置づけたからである。すなわち、「宗谷の地に高等教育機関を」という地域社会の要請が本学の出発点であった。そのため、用地・校舎・施設等、大学設置にかかわる費用はすべて稚内市及び地元企業が負担しており、北海道で最初の公設民営大学となった。

(2) 本学の地域志向の内容

第一に、大学の教育と研究の成果を地域に還元し、地域づくりに活かしていくことを重視している。本学は短大開学時から、情報メディアの最新の動向を研究し、高度情報化に適應できる人材育成と教育に携わってきた。さらに四年制となって「情報メディア学部」を設けた際には、情

報メディア技術の修得に加え、その社会的意味を十全に把握すること（社会科学的理解）及び効果的に表現すること（コンテンツ制作・アート表現）も含めた幅広いスキルと知見を獲得できるようカリキュラムを構成した。

本学はこれらの教育と研究の成果を公開講座や講演会及び事業受託などの形で地域に伝え・活かし、地域の知的資産として共有し、地域の発展に貢献してきた。また本学は稚内市を中心に中学校・高等学校の教員や自治体職員を輩出しており、稚内市役所及び地元産業界では本学出身者が多く活躍している。このように情報メディアの教育と研究の成果を地域の教育・行政・産業活動に活かすとともに、それらの活動を支える人材を育成することが本学の目指す第一の大学像である。

第二に、地域社会とともに生き、地域文化をともにつくりあげる大学になることを目指している。本学の教育活動には前稚内市長や前教育長、さらには地元教育界や産業界やまちづくり団体のリーダー、自治体職員や地元在住の学識経験者などの協力を得ており、地域の文化を継承し創造する拠点となっている。

また「街を教室に」というコンセプトの下で、例えば、映像による地域情報発信を内容とした授業からは数多くのコンテスト受賞作品を生み出し、その活動を母体としたNPO法人の設立という成果も生んだ。地元のバス乗り換え案内アプリの制作や地域デジタルアーカイブの構築などの形でも、教育研究を地域社会に結びつけている。利尻島・礼文島における地域観光資源の開拓を目的とした域学連携事業にも演習科目の一環として参画し、参加した学生たちの地域課題への目覚めと深い達成感をもたらす貴重な経験となった。さらに、課外活動を通じて学生が小中学生の放課後学習支援などの実績を積み、地域からの信頼を獲得している。

現在、社会人の生涯学習に応えられる昼夜開講制としている。情報メディアの教育と研究の成果がここで学ぶ社会人によって地域の医療や防災やビジネスの現場で活かされるとともに、彼らの日々の暮らしをより知的で豊かなものにしており、大学の人材育成及び地域貢献として大きな成果を上げつつあると言える。

II. 「地域」の設定

1. 「地域」の図



2. 「地域」の課題等

(1) 「地域」に含まれる各自治体の人口と財政力の現状

都道府県・市区町村	H22 国勢調査人口	財政力指数 (21~23 平均)
稚内市	39,565 人	0.381

(2) 「地域」の課題

稚内市は、昭和 52(1977)年の 200 カイリ規制によって主力の水産業の衰退と人口減少が著しく、新たな産業振興・まちづくり及び人材育成が課題となっている。今回の申請に係っては、本学がこれまで地域において培ってきた教育・研究・社会貢献の実績を基礎に、① 地域の教育力向上、② 観光まちづくり、③ 中心市街地活性化の側面から課題解決に取り組む。

①地域の教育力は、児童・生徒に対する学校教育及び社会教育の両分野における環境や人材によって構成されるが、現在稚内市及び利尻町ではとりわけ“学力向上”が課題となっている。稚内市教育委員会によれば、稚内市は児童の全国学力テストの結果で全国水準を下回り、特に市街地の小学校では、3年生の算数でつまづくことなどを機に学力の伸び悩む子どもが多くなるが、家庭の事情による放課後学習の不足が背景にある。また授業における ICT 利用が遅れており、コンテンツの整備や教員のスキル向上が求められている。

②観光産業は稚内市における新たな基幹産業の一つになりつつあるが、入込数は漸減傾向にあり、平成 22 (2010) 年の観光振興計画では「再生」が必要だとされ、特に「行きたいと思う観光地としてのイメージづくり」を改革方向の第一として掲げ、本年度より本計画の見直しが計画されている。さらに、平成 27 (2015) 年度の北海道新幹線開業によって北海道観光の道南・道央へのシフトは避けられず、道北の観光経済は大きな打撃を受けると言われている。そうした中稚内市観

光交流課は、インターネットを活用した情報発信の工夫やスピード感及び宿泊施設や飲食店におけるホスピタリティ向上に課題が多いとしている。

③稚内市は従来の「水産だけのまち」からの脱皮を目指して、稚内駅周辺を中心に「みなと」と中心市街地との一体的な再開発を実施したが、中心市街地への再開発効果が未だ芳しくない。他方、高齢者用住宅の入居者や市立病院への通院者をはじめとして中央地区における高齢者の人の流れは多く、また共働き世帯率が高いにもかかわらず子ども向けの放課後の居場所及び学習支援を行う施設が少ない。空き店舗の利用などによって高齢者や子どもが安心して楽しく過ごし、かつ異世代が交流できるような場の創出が求められている。

3. 当該「地域」を対象とする理由

稚内市は760 km²あり、東京23区を合わせた面積(621 km²)よりも広い。9つの町村を合わせた宗谷総合振興局管内では4,600 km²に達し、京都府とほぼ同じ規模であるから、都府県と並べると30位程度の広さである。また本学から最も近い高等教育機関は上川総合振興局管内の名寄市立大学であるが、直線距離で120km以上あり、東京駅からの距離で言えば富士宮や甲府や日光よりも遠い。この地に唯一の高等教育機関として存在する本学は、この地域が独自に抱える課題に教育・研究・社会貢献の全般にわたって取り組まなければならない。とりわけ本学の設立母体となった稚内市のニーズに応じて人材を育成し、まちづくりに参画することは大学としての使命である。

稚内市の平成26(2013)年～30(2018)年の基本計画として策定された「第4次稚内市総合計画 後期基本計画」には次のように記されており、本学との包括連携協定を取り結ぶ運びにもなっている。

大学と綿密な連携を保持しながら、市民に身近な教育機関となるよう、市民に対して生涯学習の機会を提供するとともに、大学が持つ教育設備等を地域へ開放・還元します。また、地域の人材と知識を集積する〈知(地)の拠点〉としての大学の姿を確立し、地域産業との結びつきを強めることで、地域振興・地域活性化につなげます。

利尻町とは主に教育委員会との協議を行い、学生による小中学生への学習支援を入口としたさまざまな連携への期待が高いことから、対象とする。

これまでの連携の実績としては、「I. 大学の目的・目標を踏まえた「地域志向」」の項で述べたこと以外に、以下のような活動を挙げることができる。

稚内市は「稚内観光マイスター」を認定するための試験を実施しているが、現在本学がその試験問題の作成と採点を受託している。夏季観光では稚内市の「南中ソーラン祭」「稚内みなと南極まつり」での司会や出演に、冬季観光では「稚内みなとまちづくり懇談会」のメンバーとして「彩

北わっキャナイト」の企画実行に参加している。また、稚内青年会議所との連携も緊密で、平成 22 (2010) 年には本学学生と共同で市民議会を立ち上げ「学生寺子屋」を提案し、平成 24 (2012) 年は電気自動車による列島縦断「稚内情熱キャラバン隊」に参加するなど、多方面で活動を続けている。さらに、市内の NPO 法人「街にいき隊」と共に中心市街地活性化に向けた活動を行った。また、「稚内新エネルギー研究会」との連携では風力発電+燃料電池という世界で最初かつ唯一の再生可能エネルギーシステムの構築や大規模太陽光発電施設の誘致を行った。

稚内市の事業では「稚内市まちなか居住ポータルサイト」作成、「稚内市地域公共交通活性化再生総合事業」、「稚内スマートコミュニティ」事業等多くの事業を受託している。また、平成 22 (2010) 年度から稚内市の広報誌「広報わっかない」の編集・作成を行い、市民に好評である。また地元産業界との関係においては、稚内商工会議所の「地域力連携拠点事業」(経産省)に IT 講座の担当としてパートナー参加する他、函館税関稚内支署等のロシア語講座や日本電信電話ユーザー協会のパソコン講習等を毎年実施している。

なお、稚内市及び宗谷総合振興局管内の 9 つの町村は「宗谷定住自立圏」を構成し、生活基盤や経済基盤を相互協力関係の下で整備しようとしている。そしてその実現のために中心市稚内と個々の町村とが結んだ協定書にはすべて、「稚内北星学園大学の活用を推進する」との一文が添えられている。本申請における連携自治体として利尻町以外の名を記載できる段階には至っていないが、現在、豊富町の観光情報発信への協力を平成 26 (2014) 年度の「社会教育計画」における演習課題とすることが決まっており、また、猿払村の小中学生の放課後学習を本学学生が通信によって支援する構想の準備を始めている。宗谷唯一の高等教育機関である本学への期待に応じて大いに「活用」してもらえるよう、本学から働きかけながら、徐々に連携する自治体を広げていく。

Ⅲ. 地域を志向した教育・研究・社会貢献の現状と達成目標及び具体的取組

1. 全体

(1) 地域の事情に適合的な年間日程へ

寒冷地特有の問題であるが、これまでは、本学の夏休みが始まると間もなく小中高校の 2 学期が始まるという設定となっていた。学生が街に出て地域の教育力向上に寄与するためには、両者の夏休み期間の重なりを大きくすることが望ましい。他大学教員による集中講義の実施に齟齬をきたさないようにするなどカリキュラムの遂行上支障の生じない限りにおいて、年間日程の変更を平成 27 (2015) 年度から実施できるよう準備する。

(2) コース制の導入

平成 27 (2015) 年度から 1 学科 (情報メディア学科) 5 コース制 (情報テクノロジーコース、地域デザインコース、メディア表現コース、ビジネス観光コース、数学教育コース) に移行することを決めているが、これは地域の進路志向に対応した選択肢を分かりやすい形で提供しようとするものである。また専門教育については教員ごとの個別の指導ではなく、コースごとの教員集団による指導によって学習効果を高めるという目的を持っており、学生の側からすれば、相互のコミュニケーションを図りながら問題解決に向かうことで、より高度な能力を発揮できるようになる。さらには次に述べるアクティブ・ラーニング拠点の整備によって、コースの枠を超えて異なる専門性を持ち寄って地域の課題に取り組む、プロジェクト型実践の機会も積極的に設けていく。

(3) アクティブ・ラーニングの拠点整備

アクティブ・ラーニング、とりわけ地域課題の発見・解決のための〈街を教室に〉をコンセプトとした科目を豊富化させる。またこのアクティブ・ラーニングないしラーニング・コモンズの拠点として学内に「わくほくメディアラボ」を設け、学生の能動的かつ共同的な学習を支援する。さらに教職員と学生が直に地域の人や課題にアクセスし、交流、協働することができるよう、中央商店街の空き店舗に「まちなかメディアラボ」を設ける。

学生にとっては、必要な場面で、文脈に即して情報メディアを活用するという実践的な学習が何よりも効果的である。課題解決に向けたプロセスの中でコミュニケーション力やチーム力を高め、世の中の仕組みを知り、学ぶことと社会とのつながりを実感し、そして何よりも自己肯定感を深めることができる。地域課題取り組んだ学生が主体となって行う半期ごとの「地域活動報告会」を、経験交流の場として活かしながら活動を推進する。

(4) 地域志向科目の豊富化

カリキュラムについては、全学生が地域志向活動に触れる機会を増加させることとし、地域イベントへの参加などこれまで個人的でボランティアであった活動も、可能なものは授業の一環として有機的に組み込んで学問的な裏付けを伴った活動として位置付けていく。共通科目で地域志向の基盤的な視点を学び、専門科目で学科ごと (平成 27 (2015) 年度入学生からはコースごと) の専門性に応じた地域課題対応の演習・実習を行えるようカリキュラムを整備するとともに、地域志向科目としての科目間のつながりを学生に明示する。

また、講義・演習への地元人材の招聘もより拡大し、地域の歴史・文化や産業についての知見を、現場で携わってきた市民から生き生きとした形で学ぶ機会とするとともに、そこで生まれた交流が学生のキャリア形成や人間的成長に資するよう工夫していく。

(5) 地域連携の強化と拡大

地域連携に関しては、本申請で採択されない場合でも、継続的に地域連携を深める組織体制とカリキュラムの構築を目指すという立場から、まず、これまで結んでいなかった稚内市との包括連携協定の締結に向けて稚内市政策調整部との協議を始めた。そしてその協定を実質的に機能させるために、大学と稚内市相互の継続的な議論の場を設定する必要性についても確認した。今後、地域の課題それぞれにおいて稚内市、関連機関・団体及び市民との交流を続け、PDCA サイクルに則った実践を積み重ねていく。

一方、「Ⅱ3」で述べたようにこの地域は広大であり、しかも交通システムが脆弱である。学生の移動などに（特に冬期間は）困難が大きいため、そうした条件を無視した形で連携を拡大することはできないが、宗谷の他の町村も含め連携関係を築いていけるよう準備を進める。

(6) 地域の再生・活性化プラン

- ・「Ⅱ2(2)」で上げた地域の課題①地域の教育力向上については、稚内市内4つの小学校で実施されている放課後学習支援「グングン塾」に本学学生を学力向上指導助手として派遣する。学内に地域教育支援室を設置し、参加する学生の登録や反省交流会を運営するとともに、稚内市教育委員会及び当該小学校との連絡・調整を行う。利尻町で夏休みの3日間行われる「小中合同学習会」への学生派遣にも、この支援室が中心となって取り組む。
- ・また小規模・複式校の実態と願いを汲み取った上で、ICT利用教育がどのようなシステムとコンテンツを備えるべきか検討し、とりわけ「調べ学習」による学力向上という観点から、全体のデザインを支援する。同時に、情報リテラシー・情報モラルに関する教員の指導力を高めるための講座を実施する。
- ・各種社会教育事業への学生ボランティア派遣の充実を図り、必要なものは有償化していく。
- ・同じく② 観光まちづくりについては、特にインターネットを活用したより効果的な情報発信を支援する。特に学生による、幅広い視野に立った新たな観光資源の発掘やリアルタイムでのPR活動を組織する。

- ・観光スポットや店舗・宿泊施設・特産品の情報、マップとナビゲーション、訪問予定のカレンダー登録、過去の映像資料などを連動させて適切な情報を手軽に利用できる“稚内観光ガイドアプリ”の開発を行う。
- ・稚内市で取り組まれているボランティアガイド事業強化への支援にも取り組み、また市内の宿泊施設や飲食店におけるホスピタリティ向上に資するための調査や研究を行う。
- ・③ 中心市街地活性化の課題に対しては、「まちなかメディアラボ」を学生のボランティアやイベント参加など地域活動の出発拠点として機能させるとともに、子どもたちへの放課後学習支援を行う場ともする。またスキルを持った人物を雇用し、常駐に近い形でPC・インターネット入門、メディア表現、プログラミングなどの指導を行う。スタジオ機能を持たせて情報発信の拠点としても整備し、同時に夜間主クラス授業を遠隔受講するサテライト教室としても利用する。アート作品の展示・上映会も行う。
- ・商店街の店が講師となってプロならではの専門的な知識やコツを無料で伝える“まちゼミ”を中央商店街で実施できるよう、コーディネートと宣伝を担う。
- ・課題を抱えたそれぞれの現場では、「とにかく若い人に来てもらいたい、学生の力がほしい」という声が強い。新たな賑いの種をそこにまくことで、中央商店街及び中央地区の活性化を図る。

2. 教育

(1) 基盤としての情報メディア力

本学における全学生対象の共通科目カリキュラムは、オフィスソフトの操作をはじめカメラやビデオの撮影と加工・編集、インターネットの活用などのスキルや、効果的なコンテンツを制作する工夫、そして情報社会への社会科学的な理解が身に付く構成となっている。そうした情報メディアへの能力を強みとして活かせる地域活動の場面は非常に多い。学生たちが地域の抱える課題に創造的・実践的・協働的に取り組んでいけるよう授業や課外活動を充実させることによって、チーム力並びにマネジメント力を備えた人材を育成する。

またそのための環境整備として「わくほくメディアラボ」(レポート・論文執筆などの学習支援を行う学習コンシェルジュを配置)及び「まちなかメディアラボ」を設置し、ICTを活用しつつ、課題発見や交流・議論・調査及び協働・情報発信するための拠点とする。

(2) 地域志向／地域課題への取組

本学ではすでに全学共通科目として「地域学」及び「地域文化論」を必修科目としている。「地域学」は稚内・宗谷・北海道の地域課題を本学教員がオムニバスで理論的かつ多角的に俯瞰する

内容となっているが、平成 27 (2015) 年度よりこれを「地域学Ⅰ」として「地域学Ⅱ」を新設し、同様に必修とする。この科目では、稚内ないし宗谷地域の産業や文化を担った、あるいは現役として担っている方々から現場の実態や問題点を語ってもらい、その場で学生とコーディネート役の教員を交えてディスカッションを行い、地域課題への認識を育むとともにその課題に実践的に取り組もうとする意欲を持った人材を育成する。

全学共通科目の選択科目として平成 26 (2014) 年度より「地域と金融」を新設し、経営学・金融論的な観点からの地域づくりを考察する機会とし、開設予定のビジネス観光コース専門科目「起業論」での起業シミュレーションなど実践的な学習につなげる。また平成 27 (2015) 年度より「観光メディア論」「観光英語」を同コース科目として設置する。

(3) アクティブ・ラーニング

<街を教室に>というコンセプトは<地域課題に取り組むアクティブ・ラーニング>を想定したものであるが、上述した新設する「観光メディア論」も、観光産業をめぐって地域が抱える現実の問題を解決するために、街に出て市民や観光客と交流することから始まり、効果的な観光情報発信を実現しようとするものである。教員間の交流やFD活動を通じて、既存の科目においても学生の自発性を引き出す工夫を凝らしていく。

また教員を目指す学生たちが、地域の子どもや教師や保護者に学びながら教育経験を積む機会をさらに増やす。「グングン塾」や利尻町での「小中合同学習会」支援はまさしくそのような機会であり、さらに稚内高校の定時制の数学授業の一部を学生が担当する試行事業が始まっているが、本格実施に向かう。

これまで実施してきたボランティア報告会、教育実習報告会、インターンシップ報告会などの実績からすれば、「地域活動報告会」における発表・交流・議論自体が高度なアクティブ・ラーニングとなる。加えて、こうした学修を通じて、地域課題に取り組む各種の研究会・イベント実行団体等への学生の参加も促す。

3. 研究等

(1) 地域課題を対象とした研究

本申請に係る地域課題との対応関係では、「実践力を育成する道德教育授業の展開—地域連携で創る『道德教育論』2」(本学紀要、以下同) など①地域の教育力向上の課題に対応した研究成果が多く、ほか「無線環境を用いた過疎地域におけるデジタルデバイドの解消—大学知を地域にどのように反映させるのか」「地域連携で創る図書館授業の展開」「地方中小都市のインフラを活かし

た電気自動車の開発構想」「協働型ユーザーによる地域スポーツ施設の運営管理モデル」など地域研究は教員の専門性に応じて多彩に展開されてきた。しかし、② 観光まちづくり、③ 中心市街地活性化についてはシンポジウム等での講演・報告及び稚内市からの諮問に応えた報告書などの形での成果に限られている。

今後、地域志向教育研究経費も活用しながら、地域課題に応える研究活動を全学的に強めていく。平成 26 (2014) 年度中に学内公募の要綱を作成し、27 年度より経費補助を開始する。研究の成果は論文等の形においてのみならず、稚内市が主催し、年に 20 回前後実施される「稚内学」での講座を担当することによって広く市民に公開することとする。

「わくはくメディアラボ」の開設に備え、「ラーニング・コモンズ」として同種の施設を開設している大学への訪問を行う。単なる大学図書館の拡張だけではなく、ライティングなどの学習支援の活動を積極的に行っている千葉大学・国際基督教大学・同志社大学を参考にする。

課題に応じた研究や実践の先進地域への視察訪問も積極的に行う。課題① 地域の教育力向上における ICT 利用教育への支援に関しては「1 人 1 台タブレット」「反転授業」などの試みで全国的に知られた佐賀県武雄市、課題② 観光まちづくりの稚内観光アプリ開発については業者丸投げでなく市民参加でコンテンツを充実させている福岡市、また街歩きのボランティアガイドを全国でも先駆的に事業化している弘前市及び盛岡市が参考になる。課題③ 中心市街地活性化の“まちゼミ”コーディネートに関しては全国のリーダー的役割を果たしている愛知県岡崎市に学ぶのは必須である。

(2) 広域的な研究連携

名寄市立大学の「道北地域研究所」及び「道北の地域振興を考える研究会」との交流・協力関係を築いていきながら、気候や地理的条件、産業構造などに共通点の多い道北一帯を研究対象としてとらえた取り組みを進めていく。

また稚内市は愛知県江南市と「地域資源の広域連携による災害に強い地域の価値向上」をテーマにした連携を始めようとしている。両市が同時に大規模災害に遭うことはなく、したがってどちらか一方が被災した時には他方から人的・物的支援を行おうというものだが、平常時から“顔の見える関係”を徐々に築いていくために、エネルギーや観光・物産等の交流に加えて教育分野でも協力関係を模索しようとしており、本学に対して江南市唯一の高等教育機関である江南短期大学との連携が提案されている。

4. 社会貢献

(1) 地域の教育力向上

稚内市「グングン塾」、利尻町「小中合同学習会」や各種イベントへの学生の派遣については、「地域教育支援室」及び「学生ボランティア支援室」が主導しつつ、それらが単なるアルバイトとならないよう留意して運営し、「地域活動報告会」の場で地域との間で成果を確かめ合いながら事業を進める。

学校教育現場における ICT 利用については、それが自己目的とならないよう、また教師の授業準備や自らの ICT スキルへの不安に寄り添いながら提案を行っていく。

(2) 観光まちづくり

「観光メディア論」「ソフトウェア制作演習」などと連動させた“稚内観光ガイドアプリ”のコンテンツデザインやシステム開発など効果的な観光情報の発信や、ホスピタリティの向上、ボランティアガイドの事業強化、広域的な連携による観光プランの開発への支援など、自治体及び関連団体と連携しながら観光振興に多角的に取り組む。これらの活動への学生の参加については、後述する「地域観光支援室」がマネジメントする。

(3) 中心市街地活性化

稚内中央商店街の「まちなかメディアラボ」予定施設は商店街の事情により平成 27 (2015) 年度以降の本格運用にならざるを得ないが、施設の一部を活用して放課後学習支援や展示・上映会の会場として利用を始める。後述する「まちなか振興支援室」が学生の発想を活かしながら運営を担う。

“まちゼミ”については先進地での経験に学びつつ徐々に実施店舗を広げていく。その際、学生がコーディネーターとして積極的な役割を果たせるよう事業を進める。

(4) 生涯学習拠点として

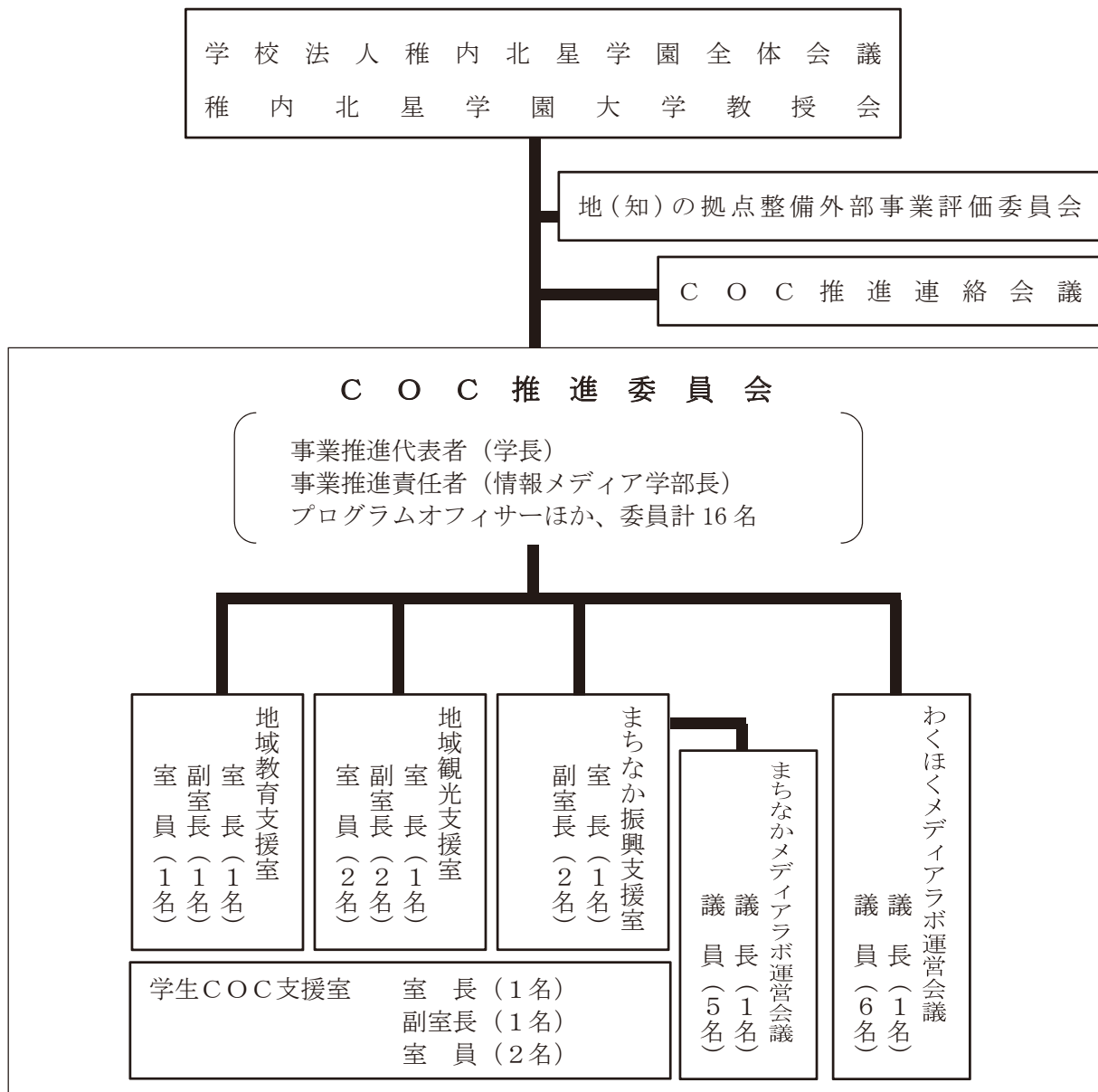
夜間主クラスで学ぶ学生を増やすために、スキルアップをめざす現役の公務員や会社員、教養を深めたい退職者等、対象者となる市民のニーズを把握して開設科目を工夫すると同時に広報活動を強める。

生涯学習の支援活動としては、教員の研究における地域志向を強めていくことによって「稚内学」での講座担当を徐々に拡大させていく。語学・ICT 関連などは大学主催の公開講座として引き続き行う。

2. 推進組織

C O C 推進機構図

平成 27 年 3 月 31 日現在



COC 推進委員会委員名簿

平成 27 年 3 月 31 日現在

規程第 3 条	所属・役職	氏 名
1 号委員	学 長「事業推進代表者」	佐々木政憲
2 号委員	学 部 長「事業推進責任者」	斉藤 吉広
3 号委員	地域教育支援室長	米津 直希
4 号委員	地域観光支援室長	黒木 宏一
5 号委員	まちなか振興支援室長	若原 幸範
6 号委員	学生 COC 支援室長	侘美 俊輔
7 号委員	理 事	佐賀 孝博
8 号委員	図書館長	安藤 友晴
9 号委員	プログラムオフィサー	手島 孝通
11 号委員	大学事務局長	佐々木 匠
12 号委員	大学事務局次長	工藤 紳吉
13 号委員	大学総務課長	長根 弘司
14 号委員	メディア表現指導員	中野 窓香
15 号委員	教務部長	遠藤 孝夫
15 号委員	国際交流センター長	岩本 和久
15 号委員	地域教育支援室副室長	坪内 晃

3. 平成 26 年度事業成果総括

平成 26 年度総合自己評価

(事業全体への総体的な評価)

「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」のタイトルの下、「地域の教育力向上」「観光まちづくり」「中心市街地活性化」という三つの地域課題を柱とし、それぞれの課題に対応した支援室を設け、全学的な取組として積極的に事業を進めた。

アクティブ・ラーニングの拠点として学内に「わくほくメディアラボ」、中心市街地に「まちなかメディアラボ」を設置するなど、学生が主体的に事業活動に参加する環境整備も整いつつある。

自治体や関連団体との連携・協力関係も進展し、市民への事業への認知と期待も高まっている。全体として概ね計画通りの達成状況となった。

(大学の組織化・一体化への評価)

「COC 推進委員会」を 16 人の教職員で構成し、申請準備に 11 回、採択後に 19 回の計 30 回の会議を開催した。この委員会を中心に、申請および実施に関わる必要な検討を行うとともに、学内への周知を図り、活動や議論への参加を促した。

「地域志向教育研究経費」は 27 年度分の 4 件の採択枠に対して応募が 8 件あり、専任教員 22 名中 16 名からの積極的な参加があった。専門分野によっては直接に事業に関わる糸口の見えにくい場合もあるが、徐々に参加の間口は広まりつつある。

(学生の参加と意識改革への評価)

地域志向科目での学習を通じて地域課題への認識が高まったが、平成 27 年度に向けてはさらに地域志向科目を再編・豊富化(16 科目から 21 科目)したカリキュラム改革を行った。実践的にも、「グングン塾」などの放課後学習への支援、映像制作や Web による地域情報の発信、まちづくりイベントへの参加などの形で学生による主体的な地域活動が展開された。また「学生ボランティア支援室」を「学生 COC 支援室」に改組することで学生の地域活動が円滑に進むよう調整を行っている。

「まちなかメディアラボ」の設置と常勤職員の配置によって中心市街地での学生の活動が促進された。また「わくほくメディアラボ」への常勤教員の採用を決定し、当該施設の本格活用への準備を進めた。

(学外、地域、市民との連携協働への評価)

申請準備の段階から、連携自治体および関連団体との協議を重ね、地域のかかえる課題（ニーズ）と本学の研究・教育の専門性（シーズ）のマッチングを行った。その結果、事業開始からスムーズに地域との連携協働を進めることができた。年度末には「COC 推進連絡会議」を実施して地域からのアイデアや激励を得た。

市民に対しては、プレスリリース（新聞記事としては40本以上、ほかNHKテレビ・地域FMで紹介された）、折込チラシ、インターネットなどを通じて積極的に広報活動を行い、事業の目的や個別の活動の周知を図った。また委員会あるいは支援室ごとの活動レポートを適宜発行し、記録と公開に努めた。

4. 自己評価

事業項目別実績評価概要

平成 26 年度の COC 事業実績について、(1) 教育分野、(2) 研究分野、(3) 社会貢献分野の項目別に評価の概要を示す。

(1) 教育分野

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
①地域志向科目の豊富化とカリキュラム改革	27 年度の学科コース制への移行に伴い、地域志向科目の豊富化を盛り込んだカリキュラム改革の内容を確定する。	従来の「地域学」を「地域学Ⅰ」と「地域学Ⅱ」に分割し、ⅠとⅡの中で「地域文化論」も併用しながら、「地域文化の発見、発信」と「まちづくりへの課題を学ぶワークショップ」を取り入れるなど、全学で大学と地域の係わりと地域に貢献できる人材の育成を見通したカリキュラム改革を行った。 地域志向科目として「観光メディア論」「地域デザイン入門Ⅰ・Ⅱ」「観光英語」を新規開講し地域志向を明示した。	当初の目標よりも多くの地域志向科目が設定でき、カリキュラム編成も整合性を取れた。当初計画を上回った事業達成である。
②学習コンシェルジュの選任配置	ラーニング・コモンズの拠点である「わくほくメディアラボ」に配置する「学習コンシェルジュ」の必要用件を確定し公募を実施する。	公募を行い、中国語、英語、日本語のできる人材 1 名の採用を決定した。 27 年 4 月から特任助教として学内で相談や学習指導をする。	当初の計画通りに経験豊富な適任者を採用できた。
③「わくほくメディアラボ」の施設整備	「わくほくメディアラボ」の施設整備を完了し、利用の準備を整える。	学生玄関のあるエントランスホールを小改修し「わくほくメディアラボ」の施設整備を完了した。 PC等の情報機器を除く備品の設置を終え3月から仮オープンし供用を開始した。	学内にアクティブ・ラーニングを効果的に支援できるラーニング・コモンズ施設を整備することがき、目標を達成。

(2) 研究分野

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
①学生による観光情報発信事業への参加取り組み	観光情報発信について、学生がどのように取り組んでいるか観光協会などの関係機関と協議を進め、効果的な学習、実践を行えるよう工夫する。	稚内観光協会と大学のコラボによる新しい観光の提案として解説した「稚内ツーリズムラボ」にCOCのロゴマークを標記したほか、観光協会や関係機関と観光情報発信についての様々な意見交換や協議を進めることができた。	当初目標としていた27年度からの本格的な取り組みを開始するための素地が構築でき、計画内容を十分達成。
②稚内観光ガイドアプリの基本設計と素材収集	27年度に新規開講する「観光メディア論」で実施する稚内観光ガイドアプリ開発のための基本設計及び素材収集を開始する。	来年度の科目設置に向け、研究会を開催するとともに、コンテンツデザインやシステム開発のための基本設計の検討を行った。素材収集も含め検討を継続中。	27年度からの本格的開発取り組みに向けての種々の課題解決への素地ができた。目標を十分達成。
③まちゼミ実践先進都市への視察研修	「まちゼミ」先進都市である愛知県岡崎市を訪問、「まちなかメディアラボ」活動充実のための知見を深める。	「まちゼミ」実践都市である岡崎市を訪問、「まちゼミ」の第一人者である松井洋一郎氏の他、岡崎市商工会議所にて意見交換と調査を実施した。さらに、各地の商店街で「まちゼミ」の現状等やノウハウについて視察研修。 岡崎市の中心市街地活性化に取り組む、「岡崎まち育てセンター」を訪問し、関係者から市街地活性化への大学や学生の係わり方支援組織のあり方などを学ぶ。(教育職員2名、事務職員1名視察参加)	当初の目的であるまちゼミの意義とノウハウを知ることができたことと中心市街地活性化に関する調査ができたことは確かな知見となり、今後の事業への取り組みに活かされると思われる。 当初の計画を十分達成した。
④ラーニング・コモンズ先進校への視察研修	ラーニング・コモンズ先進校である関東・関西の大学を視察訪問し、「わくほくメディアラボ」の活動充実のための知見を深める。	ラーニング・コモンズを設置している筑波大学中央図書館を視察調査。教員2名事務職1名ラーニング・コモンズを利用させる仕掛けづくりや運営、指導員の役割、授業との連携など様々な知見を得ることができた。	視察において多くの知見を得たことであり、コモンズの運営に活かされる。十分に達成。
⑤地域志向教育研究経費の採択基準の策定と公募	地域志向教育研究経費の採択基準と公募の作業を開始する。	公募実施要領を発表し学内公募を行った。8件の申請あり。採択基準により審査の結果、4件を採択。研究経費1件20万円、27年度事業にて実施。	採択基準を策定し公募の結果多くの申請があり、4件を採用。目標を十分達成。

(3) 社会貢献分野

3-1 地域の教育力向上

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
①放課後学習活動支援への指導助手としての学生の派遣	稚内市が実施している市内小学校での放課後学習支援「グングン塾」に、学生を指導助手として派遣する。	派遣学校数 市内大規模校4校 派遣人数等 10名1校3名 週1回1時間 派遣期間 5月～10月 学生にとって学校での指導実践が大きな経験となるとともに、「子どもたちの学習力が向上してきている」とのことで学校や市教委から継続実施を望む声がある。	実施機関からは大きな評価をいただきました。学生の実践的能力の向上に大変良い結果を生み出した。しかし、今後の学生の確保や派遣頻度などに課題が残る。
②遠隔学習支援のシステム構築と試行実施	猿払村の小学生への遠隔学習支援のシステムを構築し、試行実施する。	9月、10月の土曜日の4日間1日2時間遠隔授業を実施。実施校 猿払村浅茅野小学校学生と子どもたちにとって、画面を通して大変感動的な交流学习ができた。次年度も実施の要請あり。	試行実施という点では大きな成果があったが、システム構築には今後さらに研究を続けてより良いのにする。
③アクティブ・ラーニング施設としての「まちなかメディアラボ」の施設整備	アクティブ・ラーニングの学外拠点であり、中心市街地活性化に向けた本学のサテライトでもある「まちなかメディアラボ」の施設整備を開始する。	稚内市中央商店街の空き店舗を借上げ、内部を小改修して「まちなかメディアラボ」を整備。27年度事業で購入するPC関係備品を除き、必要な整備完了。メディア表現指導員の採用が早まったこともあり、市民への周知広報も兼ねて12月にプレオープン、2月から試行オープンを実施した。学生の活動利用や市民の利用が日々増加している。	「まちラボ」施設は当初計画のとおり整備することができ、27年4月の運用開始を3か月早めて12月から仮オープンできたのは大きな成果である。
④ICT利用教育の研修講座実施	稚内市内の小中学校教員を対象にしたICT利用教育の研修講座を実施する。	26年7月及び27年1月の2回市内の小中学校教員を対象に研修講座を実施。ICT利用教育に関して初級者が多く、初歩的基礎的な研修講座となったので、今後も継続して開催する必要がある。	当初の目標どおり研修講座を2回実施しており今後、カリキュラム整備を行う。
⑤情報リテラシー情報モラルの教員向け研修講座のテキスト開発着手	情報リテラシー・情報モラルの教員・指導者向け講座のテキスト開発を開始する。	情報部門担当の教員2名が技術的側面と社会的側面の両面について、必要な内容、資料及びテキストの形態等についての検討を開始した。	複数の教員が講習や研修などの経験を踏まえ、指導者向けテキストの開発に着手した。

3-2 観光まちづくり

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
⑥プロジェクションマッピングのコンテンツ試作と試行上映	プロジェクションマッピングのコンテンツを試作したうえで、北防波堤ドームにおいて試行上映を実施する。	学生が「マルチメディア表現実習」において制作したクリスマスアートを試行上映。 一方、「広告制作論」の学生が制作したプロジェクション・アート2作品を北防ドームで投影。	コンテンツ試作と試行上映と言う当初目標を上回り、学生たちが授業の中で作成した作品を市民に上映するという状態にまで達成できた。 計画を大きく上回った。

3-3 中心市街地活性化

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
⑦「まちなかメディアラボ」担当のメディア表現指導員の選任・配置	「まちなかメディアラボ」担当のメディア表現指導員の公募を行う。	公募の結果、求めていた能力を備え、かつ、中央商店街とも関係が深い人材を採用出来た。	まちラボを運営する能力を十分備えた人材を採用できた。

3-4 全 体

事業項目	事業実施計画内容	事業実績・実施成果	学内自己評価
①事業周知広報活動用ポスター、チラシの作成配布	本学COC事業の内容を広く市民に広報するためのポスター・チラシを作成し配布する。	広報部門の選任部署として学内に「COCデザイン堂」を設置。 広報用ポスターを市内各所に張り出すと共に、チラシを数種類作成し市内全戸に配布した。 その他、大学発行の広報紙やフェイスブック等も活用し、宣伝啓発活動を組織的、計画的に進めることができた。	これまでにない大量かつ広範にわたる広報活動でCOC事業の目的や大学の目指しているものが、市民に分かりやすく伝えられている。計画を上回っている。
②学生移動用車両の稼働開始	学生移動用車両の稼働を開始し、「まちなかメディアラボ」他地域活動拠点への移動に供する。	12月に10人乗りワゴン車をリース契約し、学生の活動地域への移動に活用開始。 商店街や他の地域でのイベントなどでの学生の様々な取組や実践学習に効果的に利用出来た。	おおむね当初計画どおりに移動用車両の稼働を開始できた。
③既に実績のある活動について適時に活動報告会を開催する	「グングン塾」「利尻町小中合同学習会」など、既に実績のある活動につ	第1回地域活動報告会を9月に開催し、第2回活動報告会を27年2月に開催した。 学生の活動実績について、学生のほか地域の関係者、関係する機関団体の職員など多数の参加	26年9月、27年2月の2回報告会を実施した。実施目標は達成したが、学生

	き、「地域活動報告会」を実施する。	を得て非常に有意義な交流が行われた。	や市民の参加が少し少なく、課題と考えている。
④COC 事業報告のためのwebページの作成	COC 事業報告のためのwebページを作成する。	COC 事業報告のほか、広報活動の機能を備えたwebページを4月から運用開始。これに先立ち2月からはCOC事業に関するFacebook ページを運用開始した。	当初計画どおり2月にフェイスブック、3月末にホームページを開設し広報、啓発を行っている。
⑤「COC 事業推進連絡会議」を策定し、本年度COC事業への総括を行う	「COC 事業推進連絡会議」を開催し、26年度のCOC事業への総括を行う。	27年3月に連携自治体、関係機関・団体から12名の参加を得て「COC推進連絡会議」を開催様々な意見交換が出来た。	関係する機関団体の方々と意見交流ができて、今後の活動の組み立てに大きなインパクトがあった。
⑥「COC 外部評価委員会」の構成員を選任する	「COC 外部評価委員会」の構成員・機関を決定する。	宗谷総合振興局地域政策課、名寄市立大学道北地域研究所及び市内有識者に外部評価委員への就任を要請し了解をいただいた。	3名の方に委員の委嘱をいただくと共に、評価要領を策定した。
⑦事業全体の進行管理や渉外調整にあたるプログラムオフィサーの選任	事業全体のスケジュール管理及び連絡調整を担うプログラムオフィサーの配置。	2月に稚内市の前教育長にP.O.に就任してもらい、会議の出席等を通じて様々な助言や指摘をいただいている。	行政経験が長く、補助事業に精通している人材を選任できた。

5. 外部評価

実施概要

地(知)の拠点整備外部事業評価委員会(第1回)

日時 平成27年7月10日(金) 14:00~16:00

場所 稚内北星学園大学本館1階会議室

議事次第

1. 開 会
2. 委員委嘱状の交付
3. 外部事業評価委員会の位置づけ、役割等について
4. 委員長の選出
5. 諮問書の交付
6. 委員長挨拶
7. 諸般報告並びに説明員紹介
8. 議 事
 - 事業実績等報告
 - 個別評価の質疑
 - 全体評価の質疑
9. 議事の終結
10. 今後の作業について
11. 閉 会

- [配布資料]
- 資料1. 事業実績報告書・事業評価報告書(ファイル1冊:事前配布)
 - 資料2. 委員名簿・説明員名簿
 - 資料3. 配席図
 - 資料4. 平成26年度補助事業実施計画項目一覧
 - 資料5. 稚内北星学園大学COC推進委員会規程
 - 資料6. 稚内北星学園大学COC推進連絡会議規程
 - 資料7. COC推進機構図

外部事業評価委員名簿

所属・役職	要綱第4条第1項	氏名
名寄市立大学 道北地域研究所所長・教授	1号委員	松倉 聡史
北海道宗谷総合振興局 地域政策部地域政策課長	2号委員	黒田 研一
株式会社富田組 常務取締役	3号委員	佐々木良徳

※ 委員の互選により、松倉 聡史委員が委員長となった。

説明員名簿

役職	氏名
情報メディア学部長・事業推進責任者	斉藤 吉広
プログラムオフィサー	手島 孝通
地域教育支援室副室長	坪内 晃
地域観光支援室長	藤崎 達也
まちなか振興支援室長 (兼) まちなかメディアラボ運営会議議長	若原 幸範
学生COC支援室長	侘美 俊輔
学習コンシェルジュ (わくほくメディアラボ運営会議議員)	高 澍
事業推進室長	黒木 宏一
事業推進室室員	三浦 猛

稚星大第29号
平成27年7月10日

地(知)の拠点整備外部事業評価委員会
委員長 松倉 聡史 殿

稚内北星学園大学
学長 佐々木 政憲

諮問書
(平成26年事業評価について)

稚内北星学園大学地(知)の拠点整備事業外部評価に関する要綱第3条に基づき、本学の実施する大学COC事業における平成26年度事業実績について、「地(知)の拠点整備事業」に関する自己点検評価及び外部評価委員会による評価の実施要領(平成27年4月20日)による貴会の評価及び意見を求めます。

平成 27 年 8 月 18 日

稚内北星学園大学
学長 佐々木 政憲 殿

地(知)の拠点整備事業外部評価委員会
委員長 松倉 聡史
(公印省略)

平成 26 年度事業評価に係る答申について

平成 27 年 7 月 10 日付け稚星大第 29 号にて諮問のあった大学 COC 事業における平成 26 年度事業実績・成果について、慎重な審議の結果、別紙のとおり外部事業評価委員会の評価及び意見を付して答申いたします。

なお、貴学におかれましては、今後とも大学 COC 事業の総合的かつ計画的な推進を着実に遂行され、目標が達成できるよう最善の努力を尽くされることを期待します。

答 申 書

1. 答申に当たって

貴学は、平成 26 年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」を主題として応募し採択を受けられました。

事業の実施に際し、全学を挙げてこの事業に取り組むことを表明し、稚内市や関係機関並びに圏域の自治体とも緊密な連携を構築して、教育・研究・社会貢献の分野において、地域のニーズ(課題)と大学のシーズ(知識)のマッチングを通じて、地域の発展・活性化への展望を拓いています。

平成 26 年度の事業実績・成果に関して、貴学の「自己評価」と学外の「外部評価」による評価体制を整備し、内部、外部からのチェックにより、適切で確実な事業の進捗と課題の改善、客観的・多角的な評価の検証を担保するため、当外部事業評価委員会に対して諮問をされました。

当委員会では、平成 27 年 7 月 10 日外部事業評価委員会を開催し、年度計画及び年度事業評価結果等の事項について、貴学 COC 推進委員会作成の「平成 26 年度事業実績表及び学内自己評価書」に基づき、COC 推進委員会の自己評価の検証、当委員会としての評価及び、事業全体を通しての総合的評価等について慎重に審議を行い、本答申を行うものです。

2. 事業評価委員会総評

平成 26 年度事業実績としては、事業計画に記載された事業実施項目がいずれも計画通り達成できており、項目別評価及び全体評価からなる貴学の自己評価についても、いずれも妥当なものとする。

評価基準に用いた 5 段階評価は、おおむね理解はできるが、事業の補助申請についての達成度が優先されているような気がしないでもない。もっと事業の深い中身についても判断し得るような要素もあっても良いと思う。他大学の評価基準を参考にしつつ、不断の検証を怠らないでほしい。

定員 50 人の小規模校でありながら、相当な PDCA を実施しており、補助決定が 10 月末ということを考えれば、正味 5 ヶ月間で実施体制の整備や「まちを教室」としての事業全体の進行管理など、様々な困難や障害をまとめ上げての事業成果は、それだけ貴学の地域志向の強さを表しているものと言える。

特に、「年度計画を上回って実施している」との評価が多数見受けられるのは、全学が一致・協力してCOC事業が進められたことの証であると推量する。

一見、シンプルな事業内容でありながら具体的であり、民間等との継続的な連絡・協働も見られるなど、今後とも多方面にわたる連携の広がりを期待できる。

ただ、多くの事業を計画していること並びに、この事業が5年間にわたることを考えれば、教職員と学生の数にも限りがあるので、教職員間や学生間の負担の公平性や過度の負担について注意を払いつつ、この事業のメリットを生かし、学内ガバナンスの強化と一層の活性化を図りたい。

また、中心市街地の活性化を意識し、商店街の空き店舗を活用して「まちなかメディアラボ」を開設し、アクティブラーニングやまちゼミの場として活用するという試みは、大いに興味を示されるものであるので、今後の利活用の高まりが商店街の活性化という地域貢献に繋がることを願うものである。

しかし、全国で数多くの商店街が衰退の道をたどっている今日、往時の賑やかさを取り戻すために各地で様々な工夫や取組みを行っているところであるが、なかなか成功例を聞かないことを考えれば、常に商店街や自治体との緊密な連携・協働による街全体を巻き込んだ取組みが必要ではないかと思料する。

貴学COC事業は、地域に根ざし地域で活躍できる人材の育成を主目的に掲げているものであり、この事業を通じ貴学の特徴である情報メディア学を活かした多様な人材育成が図られるとともに、貴学が真にこの地域の「地(知)の拠点」となれることを当委員会として心から願うものである。

3.各分野別事業についての個別の評価と意見

(教育分野)

- 当初の予定より多くの地域志向科目の増加が図られたことは貴学の質的な強みにもなるので大いに評価できる。
- 学習コンシェルジュとして3ヶ国語をマスターする人材を確保できたのは評価できる。今後の活躍に期待したい。
- 「わくほくメディアラボ」の施設ができたのだから、これからは施設の効果的活用を図りたい。

(研究)

- 観光情報発信事業について、関係機関とのより一層の連携と協働で、より良い観光発信ができることを期待する。
- 観光ガイドアプリ開発も、授業の中で学生が学生の目線で地域を売り出すものを作り上げていくことを大事にしてほしい。
- 「まちゼミ先進都市」を視察して得た知見を是非この事業に生かしてほしい。
- ラーニングcommons先進校の視察が当初計画2箇所より後退縮小した理由は分かるが、計画の段階でもっと精査して取組むべきである。また、視察で得た知見を事業にしっかりと生かしてほしい。
- 地域志向教育研究経費を受ける研究について、ぜひ学内外に公開し、さらなる研究の高まりに繋げるべきである。

(社会貢献)

- 放課後学習支援活動「グングン塾」は優れた実践教育にも繋がるものであり、今後も続けられることを願う。ただし、教職課程の学生が数多くないこともあり、過度の負担にならないよう配慮が必要である。
- 遠隔学習支援の実施については、なお一層の機材や条件整備が必要であり、今後実施校を増やす計画になっているので、その点について配慮が必要であると思料する。
- 「まちなかメディアラボ」の施設整備がおおむね完了したので、これからが本当に効果があるかどうか問われるものである。メディア表現指導員の効果的活用により、施設の利活用増が図られるように最大限の努力をすべき。
- これからの教育に大きく関わってくるICT機器の活用は、どこの自治体も研修や講習に力を入れており、地域の小中学校教員の質的なスキルアップにつなげていただきたい。
- プロジェクトマップの試行実施ということだが、大規模なマップング投影をやる考えは無いのか。論点を整理しつつ検討すべきである。

(全体)

- 新聞やチラシの配布は分かるが、なかなか読んでもらえ無い。もう少し市民にこの事業が分かるように広報宣伝に工夫を凝らす必要がある。
- 地域活動報告会には文字通り地域の人々もたくさん参加をしていただくよう一層の努力が必要である。
- COC推進連絡会議は各関係機関団体の人で構成されており、こうした会議の機会を通じ、COC事業への理解と協力、そして協働の体制を築いていただきたい。

6. 地域志向教育研究経費

平成 27 年度より「稚内北星学園大学地域志向教育研究経費」の運用が開始される。平成 26 年度は、それに先立ち C0C 推進委員会において要領の制定、審査委員会の設置について検討の上決定され、審査委員会において学内公募、審査が行われ、採択課題が決定された。

平成 27 年度 稚内北星学園大学地域志向教育研究経費 応募要領

平成 26 年 1 月 20 日 制定

I 地域志向教育研究の目的と領域

1. 目的

地域志向教育研究経費は、平成 26 年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」(以下「本事業」という。)を推進するにあたり、研究の成果を通じて地域に新たな活力を与え、地(知)の拠点として地域に貢献することを目的とする。

2. 研究課題(事業)の領域

- ① 地域の教育力向上に関する研究
- ② 観光まちづくりに関する研究
- ③ 中心市街地活性化に関する研究
- ④ その他、本事業を推進する上で学長が必要と認める研究

II 申請要領

1. 申請数と申請上限額

1 人の申請者(個人研究または共同研究代表者)としての応募は 1 つの研究課題(事業)とし、申請上限額は 20 万円とする。

2. 選定件数

選定件数は 4 件以内とする。

3. 研究期間

研究期間は単年度(平成 27 年 4 月 1 日～平成 28 年 3 月 31 日)とする。ただし、今年度採択された申請者が同一の研究課題(事業)によって次年度以降に再申請することを妨げない。

4. 申請者の範囲

当研究経費の申請者は、教育・研究・社会貢献を地域志向に改革しようとする本学の常勤教員（特任教員を含む）でなければならない。なお、他から類似の経費の助成を受けている者は除く。

5. 対象経費について

研究実施にあたっては、パソコン、カメラ、器具など本学既存の備品等を極力活用することとし、備品購入は学長がやむを得ないと認める場合に限る。

学会参加のための旅費については、申請した研究に係る成果発表として1回分のみを対象とする。

6. 申請方法と申請期限

① 応募方法

「地域志向教育研究経費申請書」（様式1）により、具体的な活動計画を記載の上、COC推進委員会へ提出する。

② 申請期限

平成27年2月27日（金）までに提出する。

III 選考方法及び採択

地域志向教育研究経費審査委員会において選考し、学長が最終決定する。採択結果は、申請者（共同研究の場合は研究代表者）に通知する。

IV 研究成果の報告と公表

すべての研究成果については、下記の形式により報告・公表しなければならない。

① 平成28年3月31日までにCOC推進委員会へ「地域志向教育研究経費成果報告書」（様式2）を提出する。

② 平成28年度中に開催される「地域活動報告会」にて発表する。ただし、研究過程において公表可能な成果がある場合には、平成27年度中に開催される「地域活動報告会」にて発表することが望ましい。

③ 本学紀要または学会誌等において、掲載可能な論文形式で発表する。

V その他

この要領に定めるもののほか、地域志向教育研究経費に関し必要な事項は別に定める。

様式1及び様式2 省 略

稚内北星学園大学 COC 事業

平成 27 年度「地域志向教育研究経費」の選考について

平成 27 年 3 月 31 日

地域志向教育研究経費審査委員会

事業推進代表者：佐々木政憲

事業推進責任者：齊藤吉広

プログラムオフィサー：手島孝通

(選考結果)

次の 4 件を採択とする。

- ・ 「地域内在型物語の制作・蓄積・提供手法の構築」
- ・ 「インバウンドを意識した観光施設づくり—本学のシーズを活かした地域連携の試行—」
- ・ 「「南中ソーラン」の今日的意義と課題の検証」
- ・ 「稚内市の ICT 利用教育：実態の把握と教員向け研修カリキュラム」

(選考経過)

本学 COC 事業計画に基づいて、平成 27 年 1 月 27 日に「平成 27 年度 稚内北星学園大学地域志向教育研究経費 応募要領」を学内に公表し、応募を 2 月 27 日に締め切った。応募は 8 件あり、以下の通りである。

タイトル	申請区分	研究代表者	共同研究者
省 略			

これらの応募を受け、3 月 25 日に地域志向教育研究経費審査委員会を開催し、選考基準の検討および個々の研究計画に対する評価を行った。

(選考基準)

「応募要領」にある通り、地域志向教育研究経費は、平成 26 年度文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」を推進するにあたり、研究の成果を通じて地域に新たな活力を与え、地(知)の拠点として地域に貢献することを目的としている。

審査委員会は、この目的に適った研究計画を選考するべく、以下の基準を設けた。

- (1) 課題設定が、地域のニーズに適ったものであるか、そしてそのニーズの解決に向かうことに寄与するか
- (2) 波及効果として、その研究が個人的な成果にとどまらずに大学全体の地域志向の向上に役立ち、地域における大学の存在意義を高めるものであるか
- (3) 研究過程が、学生の育成を伴うものか、また、学外との連携のもとに進められるものであるか
- (4) 経費使用が適切か

(選考理由)

・ 「**地域内在型物語の制作・蓄積・提供手法の構築**」

収集したデータを活かして新しいアウトプットの形を提供し、「観光まちづくり」の課題に応えようとするもので、実践的な課題解決にも寄与すると期待できる。また地域住民や観光客を巻き込みながらコンテンツを更新していくという仕組みは発展的な構想として評価できる。

なお、観光協会等が行っている関連事業とも十分連携をとり、有機的な取組となるよう工夫されたい。

・ 「**インバウンドを意識した観光施設づくり—本学のシーズを活かした地域連携の試行—**」

「観光まちづくり」のニーズに適切に対応しており、大学の地域貢献としても目に見える実践的な効果が期待できるとともに、研究成果を後に拡大・充実させる方向に活かしていける可能性を持っている。また留学生の活躍の場を提供するという点でも有意義であると認められる。

・ 「**「南中ソーラン」の今日的意義と課題の検証**」

「南中ソーラン」の教育的意味を歴史的に検証しようとするものであり、その今後の展開・発展を見通すための基礎研究として意義深い。「地域の教育力向上」の課題に地域特性を活かして貢献しようとするものであり、また学生や地域との共同で研究が進められる点も評価できる。

・ 「**稚内市の ICT 利用教育：実態の把握と教員向け研修カリキュラム**」

ICT 利用教育への支援という面での「地域の教育力向上」課題に応えようとする際、とりわけ学校現場の実態把握・意識把握を行うことは必要性が高い。本学の特性を十分活かそうとするものであると同時に、研修カリキュラムの作成は先進的な取組として成果の波及効果が高いと期待できる。



(総評)

8 件の応募には 16 人の教員が参画しており、多くの教員が地域志向研究に積極的に取り組む姿勢を示したことは高く評価されるべきである。内容についても、それぞれの専門性を活かしながら地域課題に臨もうとしており、「地(知)の拠点」としての研究面での本学のポテンシャルが示されたという意味でも意義深い公募となった。

採択された研究計画については、着実な実行と成果報告がなされることが求められるが、残念ながら採択されなかった応募についても、可能な範囲で研究が進められていくことを期待する。

今回の選考における研究計画のプレゼンテーションは、教員相互の研究交流の場となったと同時に、それを通して稚内・宗谷地域の抱える課題について共有するよい機会となった。次年度以降はさらに幅広く公開することも検討したい。

なお、平成 28 年度は、金額および件数を拡充した内容で文科省に補助金調書を提出する予定である。



7. 分野別（各支援室・各ラボ運営会議）事業成果

7-1. 地域教育支援室

総 括

本年度は、「放課後学力グングン塾」、「利尻全小中学生夏休み勉強会」、「猿払一大学間テレビ学習(遠隔学習)」の学習支援事業を予定通り終了し、概ね目標を達成した。当初に留意した、① 計画・実行・評価のサイクルを教育関係者と共同ですすめる、② 教育実践力を鍛える責任ある機会とし、学生の主体的参加ですすめる、③ 地域に貢献できる自信と感謝の意識を育てるボランティア活動としてすすめることが、事業の進展につれ学生自身、地域の教育関係者、私たち担当教員の共通理解が大きく進んだ。

こうした活動は、ゼミ通信「教たま」の市内全小中学校への配布、市役所と市立図書館の掲示を通じて知らせることができた。

1. 各事業の到達状況

(1) 「放課後学力グングン塾」(主催：稚内市教育委員会)

《目標》 資料(①「放課後学力グングン塾」への大学生指導助手の活動について)参照。

《成果》 資料(②「グングン塾助手の1学期の様子」、③「グングン塾アンケート結果と分析」、④地域教育支援室活動レポートNo.2)参照。

(2) 「利尻全小中学生夏休み学習会」(主催：利尻町教育委員会)

《目標》 資料(⑤「利尻学習会の(学内に向けた)お願い」、⑥「教たま8号」、⑦「利尻遠征と猿払遠隔授業(特別版『教たま』)」)参照。

《成果》 従来から行われている学習会に、大学生が支援に入ることによって児童生徒の意欲が高まった。初のゼミ旅行も兼ねたので可能な限り学生に任せるところは任せたことで、臨機応変な対応や子どもの心情の理解、チームワークなど、地域支援活動のすすめ方と意欲が育った。

(3) 「猿払一大学間テレビ学習(遠隔学習)」(主催：猿払村教育委員会)

《目標》 資料(⑧地域教育支援室活動レポートNo.1)、⑨遠隔学習-学生紹介。

《成果》 上に同じ。

2. その他

(1) 本事業に対する「共同テーブル」の創造

3つの事業に共通する成果は、全サイクルを通じて関係者間の共通理解を重視したことだ。初めに大学側から「何ができるのか」と教育関係者側から「こんなことができないか」を相談し、実践途中で意見交換し必要な改善を行い、最後に「何ができたのか」(何が課題なのか)を整理できた。地域教育支援事業の鍵は、共通理解にあり、具体的な相談機会の尊重にある。新年度事業では、全サイクルを通じ、学生が組織的に参加できるように努め、成果を拡大したい。

(2) 広報活動の役割

COC選定前から、教職ゼミ通信等により「開かれた学び」を目指してきたが、稚内市民や近隣市町村に対する大学・学生の活動紹介は極めて重要であり、新年度も計画的にすすめていきたい。

7-2. 地域観光支援室

総 括

本年度の本支援室所管事業は、「観光情報発信」(研究)、「ガイドアプリ」(研究)及び「プロジェクトマップ」(社会貢献)であり、それぞれ概ね当初の計画通りの成果目標を達成した。また、本支援室所管事業の推進のため、研究会2回、外部講師による講義1回を実施し、知識の習得と共有を図った。

以上については、随時「活動レポート」に取りまとめるとともに、「地域観光支援」に関わる本学教員の取り組みについても活動レポートを活用し、広く社会に公表した。活動レポートは、本年度合計で9本発表した。

1. 観光情報発信事業

《目標》 ツイッター・フェイスブック等での観光情報発信について、学生がどのように取り組んでいけるか稚内観光協会などの関係機関と協議を進め、効果的な学習及び実践を行えるよう工夫する。

《成果》 本年度は、一般社団法人稚内観光協会×稚内北星学園大学コラボによる宗谷地方の新しい観光の提案として開設されている「稚内ツールズムラボ」(URL :

<http://tourismlab.jp/guide> に地(知)の拠点事業のロゴを標記するとともに、観光情報発信について学生がどのように取り組んでいけるか稚内観光協会等の関係機関と協議を進めている。

2. 稚内観光ガイドアプリ開発

≪目標≫ 「観光メディア論」「ソフトウェア制作演習」において実施予定の「稚内観光ガイドアプリ」のコンテンツデザインやシステム開発のための基本設計に向けて検討を進め、効果的な学習及び実践を行えるよう工夫する。

≪成果≫ 来年度の科目設置に向け、コンテンツデザインやシステム開発のための基本設計の検討を継続している。

3. プロジェクションマッピング試行実施

≪目標≫ 観光資源としてプロジェクションマッピングを提供することで、本学及び学生の企画実施力やコンテンツ制作力を高める。

≪成果≫ ア. アートイベント「クリスマスプロジェクション・アート」

稚内北星学園大学の学生が制作したクリスマス・ビデオアートをアトリウム天井に投影イ. 彩北わっキャナイト 2015

「広告制作論」にて制作のプロジェクション・アート2作品を上映

「北海道観光経済論」の学生とともに、当該イベントに加わり、イベントにおける作品上映の意義や効果について合わせて学習し、企画実施力やコンテンツ制作力を高めた。

4. その他

(1) 研究会等の実施

- 1) 第1回地域観光研究会の開催(「活動レポートNo.9」参照)
- 2) 稚内市北防波堤ドーム関係者出張講義の開催(「活動レポートNo.5」参照)
- 3) 第2回地域観光研究会の開催(「活動レポートNo.6」参照)

(2) 活動レポートの発行

- | | |
|------------------|-----------------------------|
| No.1 (2014.9.19) | 2015～16年シーズンスノーパーク運営会議が始動 |
| No.2 (2014.9.19) | プロジェクションマッピング事業が始動 |
| No.3 (2014.10.1) | 2015～16年シーズンスノーパーク第2回運営会議開催 |

- No. 4 (2014. 10. 8) 稚内市北防波堤ドームプロジェクションマッピング事業始動！
- No. 5 (2014. 11. 27) 稚内市北防波堤ドーム関係者出張講義の開催
- No. 6 (2015. 1. 19) 第2回 地域観光研究会開催要旨 稚内観光ARへの期待—宗谷地域魅力UP事業ワークショップ—
- No. 7 (2015. 2. 23) Christmas Exhibition (株) まちづくり稚内と稚内北星学園大学のコラボレーション企画
- No. 8 (2015. 2. 23) 「彩北わっキャナイト 2015」に参画 プロジェクション・メディアアート2作品他を制作・上映プロジェクションマッピング事業が始動
- No. 9 (2015. 3. 2) 第1回地域観光研究会開催要旨 再生環境に注目した地域情報資源デジタルアーカイブシステム—地域振興コンテンツの基盤として—

7-3. まちなか振興支援室・まちラボ運営会議

総 括

本年度の本支援室所管事業は、「まちゼミ」先進地である愛知県岡崎市の視察訪問（研究）、「まちなかメディアラボ（まちラボ）」の施設整備の開始（社会貢献）、「まちラボ」担当メディア表現指導員の公募（社会貢献）であり、それぞれ当初の目標を概ね達成した。

他に、事業を進めるに当たっての本支援室の活動方針・目標を具体化させた。また、「まちラボ」については施設整備完了に先立って、学生・市民への周知およびニーズ調査を目的にプレ・オープンイベントの開催や期間を限定した試行オープンを実施した。

以上については「まちなか振興支援室活動レポート」を発行して公表した。

1. 「まちゼミ」先進地視察

《目標》 「まちラボ」を拠点とした一つの活動として「まちゼミ」のコーディネートを学生が担うことを見通しながら、実践例に学ぶ。

《成果》 「まちゼミ」先進地である愛知県岡崎市を視察し、「まちゼミ」による商店街活性化のポイントや「まちゼミ」ほか中心市街地活性化への学生の参画のあり方等について多くの示唆を得た。

2. 「まちラボ」の施設整備の開始

≪目標≫ 中心市街地活性化のための本学のサテライトを当該地域に置き、メディア表現指導員を配置することによって、カメラやビデオの操作及びビジネスソフトやアート系ソフトの使用について市民が気軽に問い合わせることができる窓口とすると同時に、学生のメディア表現活動の拠点として位置づける。子どもたちへの放課後学習支援も行い、教員が出向いて講座を開いたり、大学から双方向的な授業を行う「まちなか教室」として機能させる。また学生による「まちゼミ」コーディネート等の地域活性化活動の拠点ともしていき、高齢者や子どもが安心して楽しく過ごし、かつ異世代が交流できる場の創出を目指す。

≪成果≫ 稚内市中央商店街の空き店舗（中央3丁目9-12）に「まちラボ」を設置し、平成27年度予算で購入する物品を除き、今年度予定していた施設整備を完了した。また、必要最低限の施設整備とメディア表現指導員の採用が早期に実現したため、学生・市民への周知を目的とした「プレ・オープンイベント」（12月）と事前のニーズ把握を目的とした「試行オープン」（2～3月）を実施した。



まちラボのオープンスペース



プレ・オープンイベントの一コマ
 小谷准教授によるクリスマスオーナメント講座



プレ・オープンイベントの一コマ
 細田司書と学生による絵本の読み聞かせ



プレ・オープンイベントの一コマ
 安東講師と学生による教学パズル

3. 「まちラボ」担当メディア表現指導員の公募

《目標》 カメラ・ビデオの操作並びにビジネスソフト・アート系ソフトの使用法全体に通じた人材を登用することで、「まちなかメディアラボ」を効果的に機能させることができる。

《成果》 求めていた能力を備えていると同時に、「まちラボ」を設置した稚内市中央商店街とも関係の深い人材を採用した。

4. その他

本支援室の活動方針を確定した。（「まちなか振興支援室活動レポート No. 1」参照）

7-4. 学生 COC 支援室

総 括

本支援室は、12月からCOC会議メンバーとして参画し、本格的な活動を開始している。そのため、他の支援室と比較し、成果目標、その他の整備においてやや遅れている。現在4月からの本格稼働をめざし、その体制を早急に整備しつつ活動を進めているところである。現時点で、① 学生COC支援室への名称の変更、② 活動方針の決定、③ COCイベントにおける学生の募集、④ 学生コアメンバー設立への仕掛け、⑤ 「かまくらレストラン」イベントの支援（学生自主企画）、⑥ 学生COC掲示板の設置の6点を行った。また、「学生発の企画」を整備するため調書、申請書との整合性を考えながら条件整備を模索している。

① 当支援室名称、機構変更

- ・従来のCOC申請書とは異なる機構に変更され、12月からCOC会議のメンバーとなる。
- ・「学生ボランティア」という名称による誤解、活動内容との整合性から、「学生COC支援室」へと名称を変更した。

② 当支援室の4本柱

- i) 「地域志向科目」の把握（授業間のバッティングの回避）
- ii) 「学生COC支援室ニュース」の執筆依頼
- iii) 「学生」から「学生COC支援室」への相談窓口（援助、助言）
- iv) 「学生COC支援室」から「学生」への仕掛け

③ COC イベントにおける学生の募集

- ・ 12月：「まちラボ」プレ・オープンイベント（まちなか振興支援室との連携）
- ・ 2月：第2回地域活動報告会に向けた事前準備
- ・ 2月：わっきゃナイトにおける学生のボランティア募集（地域観光支援室への承認）

④ 学生コアメンバー設立に向けた仕掛け

- ・ 学生会との整合性を図りながら、学生の立場から COC 推進に向けたコアメンバーを募集し、会議を実施。その後下記「かまくらレストラン」の実施。

⑤ 「かまくらレストラン」イベントの支援

- ・ 2015年2月14日「まちラボ」前において、スノーキャンドル&かまくらを製作したいとの学生からの要求を承認、学生による実施。

⑥ 学生 COC 掲示板の設置

- ・ 学内に4か所、学生 COC、COC 活動のイベントなどを周知するための専用掲示板を用意した。

7-5. わくほくメディアラボ運営会議

総 括

わくほくメディアラボは、学生のアクティブ・ラーニングをサポートするための空間で、学生のグループが議論をおこない、調査をおこない、資料をまとめることができる場所を用意するとともに、学生の個別指導をおこなう「学習コンシェルジュ」によるサポートを実施する。

来年度から予定されているわくほくメディアラボの試行運用に備え、本年度はわくほくメディアラボの環境整備・学習コンシェルジュの選定・先進地視察などの事業をおこなった。

1. わくほくメディアラボの環境整備

《目標》 2015年(平成27年)度からのわくほくメディアラボの開設準備のため、学内における設置場所を検討し、必要な備品の整備をおこなう。

《成果》 本館1階学生玄関前のキャリア支援室横のロビーにわくほくメディアラボを設置することとし、パーティション・机・椅子・パソコン・プロジェクタ・書架などの必要な備品を購入し、設置をおこなった。



新入生ガイダンスの様子①



新入生ガイダンスの様子②

2 学習コンシェルジュの選定

《目標》 わくほくメディアラボにおけるアクティブ・ラーニングの指導をおこなう「学習コンシェルジュ」を選定する。

《成果》 学習コンシェルジュの公募をおこない、適任者を選定することができた。2015(平成 27)年 4 月より着任予定となる。

3 「ラーニング・コモンズ」先進地視察

《目標》 「わくほくメディアラボ」と同様にアクティブ・ラーニングの支援をおこなっている、ラーニング・コモンズなどの先行事例について視察する。

《成果》 筑波大学中央図書館を視察し、施設や人による学習支援のあり方について多くの示唆を得た。

4. 来年度に向けて

わくほくメディアラボは 2015(平成 27)年度より試行運用がはじまる。来年度は各授業とわくほくメディアラボの連携を密におこない、学生のアクティブ・ラーニングの質を向上させるためのノウハウを蓄積していく。

<活動の様子>

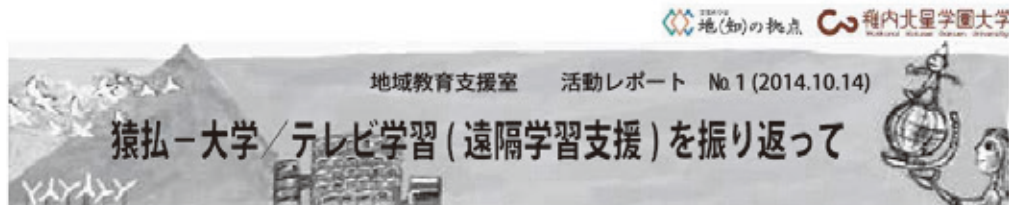






8. 活動レポート

8-1. 地域教育支援室活動レポート



はじめに

この事業は、①本学の「情報」と「教育」を使い、僻地児童の学習支援のあり方を創造することを目的に、②9月27日～10月4日の土曜4回、9時～11時まで、パソコン画面を使って浅茅野小学校(猿払)の3年生以上7名に国語と算数の学習支援を、③教員養成ゼミの3年生以上7人が交代で支援した。大学側は佐賀、坪内、米津、猿払側は大石教育長、教育委員会が役割を担い、本学の古川先生、浅茅野小の館野校長先生、斎藤教頭先生にお世話になった。

大きな成果づくり、来年度も実施

10月9日(木)に、関係者が集まり、今回の事業の総括会議。結論は、①子どもの意欲が高まり積極的に楽しく学習できた、②今後3年間、実験研究を継続する、③猿払側で対象児童・生徒、テキストや学習ツール、支援内容を検討する、④大学側でもハード面、支援のあり方を考えていくことに。

01010

全員の意見が一致したのは、浅茅野小児童の素直さと積極性、人学生の臨機応変な指導力。「安心して見ていられた」という声。グングン塾や利尻学習支援活動が力になっているようだ。それに、「子どもが好きだ」という学生の意識も大きい。最後の日に、浅茅野小の子どもたちと学生との反省交流会が行われた。学生が色紙に寄せ書きして子どもたちにプレゼントし、学校付属ピザ釜で焼いたピザをいたがながら交流したが両者に感動が生まれ、それが今回の教育的な成果を物語っていた。

01010

この活動は、グングン塾、利尻遠征(全小中学生対象夏休み学習会)とはひと味違う可能性を秘めている。他町村からも注目されるのは間違いないがこれ以上の規模では教員養成ゼミだけでは限界があり検討が必要だ。



学生の感想から

…目の前に実際の児童がいない授業を経験した。予想以上に難しく、あまりうまく進められなかったが、一般に支援した6人の中間は危機感をおぼしめた。何よりも、浅茅野小の児童たちの勉強に対する意欲と素直さに驚き続けた。未知な気にも戸惑ってついてきてくれ何とかが無事に終えることができた…不安が先行したが、今では、自分にとってとても有意義のある学習活動だったと思っている…【特別版「教たま」(3年) 石田裕哉「利尻遠征と猿払遠征支援」から】

児童の感想から

●楽しかった。テレビ電話みたいで面白かった。(大学生の教え方は)わかりやすかった。バグが起きないようにしてほしい。またやってほしい●ほかのところの人と話が出来てよかった●

遠くの人にしっかり教えてもらうことができたのですといふことと喜びました。今後の時は授業を縮小して欲しい●やりやすいしわかりやすい。またやりたい●ふだんとちがう勉強ができてとても楽しかったです。違う教科も教えて欲しい。

地域教育支援室 活動レポート No.2 (2015,1,21)

本学と稚内市教委の懇談内容について

—— 昨秋に続く3回目、年度末総括の議事録(要点) ——



大きな成果を土台に、連携2年目はより豊かな活動へ

議題1 「放課後学カグン塾」の今後について

- 市教委から、成果は前回懇談で確認済み、児童と指導員からとても信頼される活動だった。
 - 大学から、貴重な実習機会。地域貢献の自覚と感謝の心(有償ボランティア含)育っている。
- 【今後の方向】
- 引き続き前期(4~10月予定)、週1回(火曜の児童放課後)、有償ボランティアの継続。
 - 春期休業中開催「グン塾」に対する協力要請(3月末~4月初旬予定)
 - 学生の自発的参加で無料塾等の開催(有償ボランティアと対になる無償の地域貢献活動)

議題2 ICT利用教育の推進について

- 年間3回の研修(各2時間、各30名の教員参加)で、ICTを使った授業の基礎基本を学び授業に生かす機会だった。市として潮見小中のICT実践モデル校(学校授業改善)指定。
 - 大学と学校現場が、独自の課題解決を相互の連携で解決できる可能性を意識できた。
- 【今後の方向】
- 引き続き、ICT教育についての研修講座の開催。
 - 学校ニーズに応えるICT教育振興のため、現状と課題を市教育研究所と共同調査したい。

議題3 大学の「まちらボ」の連携依頼に対する市教委の意見

※大学から、「まちらボ」の4月スタートにあたって、稚市教委の管轄部分で連携・協力を依頼したい内容を口頭で説明し、自由に懇談を行った。以下、市教委の見解。

①市立図書館との連携・協力で、「大学図書館の分室」を作りたいのだが

▲現時点では、市立図書館の分室として貸出・返却は困難。但し、月間200冊貸出し分を室内で読むのは可能▲北地区に学生が集う健全な場所設置を歓迎。「読み聞かせ」等、可能なところから協力したい▲大学から、市立図書館のワークショップや実習、読み聞かせ大学情報の掲示、大学教員の図書紹介コーナー設置等に感謝の言葉。

②「無料塾」開設で、市教委の意見を聞きたいのだが

▲北地区にそうした場所が作られるのを歓迎する▲大学から、「○○グン塾」(大学側の要請「北星グン塾」、「大学生が力になるグン塾」)の名称要請は検討させて欲しいとの意見▲大学から、4月までに日程や内容を学生たちに考えさせ、市教委や学校に説明できるようにし、5月にはオープンしたい旨話した。

③その他

▲大学から、今年度から学校司書の全学校配置の努力義務が法的に位置づけされた。現在の図書支援員配置は高く評価しているが、是非とも司書の正式採用を図って欲しい。本学が司書、司書教諭資格課程の設置大学として役割を果たしたい▲こうした懇談がとても大事なことを両者は確認する。

1月15日(木)大学会議室で、大
学へ斎藤、安藤、米津、坪内)と稚
内市教育委員会
(遠藤)学校教育課
長、田澤図書館長、福崎図書司書、
高井教育研究所長、江川研究所員)

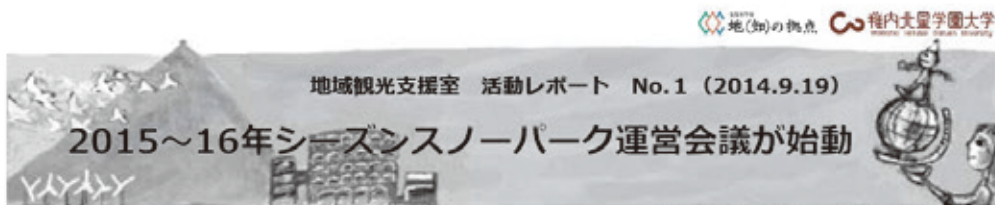
「1000」を連携のテーブル作りに

業に対する総括的内容に。事業の成
果とともに「両者の努力で共同テ

ブルが設置された」ことの大きな
意義を確認。全体として、今年度
事業を大きな
成果とし、新
年度の継続と発展を約束する内容
になりました。(文責/坪内)



8-2. 地域観光支援室活動レポート



稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

藤崎達也本学講師（地域観光支援室副室長）は、2015～16年シーズンスノーパーク運営会議に参画しており、その第1回運営会議が開催された。

夏期のオフトレーニングとして本学体育館にてトランポリンを使っでの空中姿勢の練習など、通年での活動環境を提供している。

このことは、技術向上のみならず、コミュニティのつながりを助ける上で有効と考えられる。

これまでの活動経緯と成果

雪国で大切な観光施設であるスキー場経営は、スキー客の減少や自治体の財政難をうけて厳しい状態が続いている。一方で、北国の冬の健康増進や青少年の健全育成の観点から、スポーツ環境の充実が求められている。

昨年度、藤崎本学講師は地元の有志のボランティアをコーディネートして、こまどりスキー場にスノーボードパークを設置した。

工事に必要な重機などはスノーボードをする子供の親達が操縦し、本来であれば数百万円かかる工事を、わずか30万円ほどで行った。

このように、地方のスポーツ観光施設は協働型ユーザー（参考文献[1]）と呼ぶべき利用者と施設管理者等とのコラボで運営するモデルを模索する時期に来ている。

稚内市では、市教育委員会、指定管理者、そしてスノーボード愛好家がこれまでの、管理者—利用者の枠を超えたスキー場運営を始めた。本学は、施設運営のみならず、コミュニティ育成に寄与している。



会議の概要

今回の会議は、今年度の運営にかかる内容を議論する目的で、下記の通り行われた。

1. 日 時 9月18日（木）10:30～11:30
2. 場 所 （株）稚内振興公社
3. 参加者 佐々木課長（稚内振興公社）
横澤輝樹
木村亘（seamore）
藤崎講師（稚内北星学園大学）
4. 内 容
 - 1) 2015～16年シーズンスノーパーク運営について
 - 2) 昨年度の総括
 - 3) パークの改修について
昨年危険箇所、整備がしにくい箇所などを中心に
 - 4) 安全管理者（ディガー）の確保確認
 - 5) 財政
工事の実費をクラウドファンディングにて募集
 - 6) その他
スキー協会等との事前打ち合わせの必要性など

今後の展望

本事業には、引き続き藤崎本学講師がコーディネーターとして参画する。今後は、本学の進めている「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」との連携を図り、本学の教育力向上にも結び付けられることが期待できる。

<参考文献>

- [1] 藤崎達也（2014）「協働型ユーザーによる地域スポーツ施設の運営管理モデル」『稚内北星学園大学紀要』第14号。

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 藤崎達也 (2014.10.7)
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)@wakhok.ac.jp
URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に変換してください



稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

地域観光支援室が推進するプロジェクションマッピング事業に関する関係者による打ち合わせを行い、今年度の事業スケジュールを協議した。

今回の打ち合わせでは、黒木本学講師よりCOC事業の全体像を説明し、続いて、地域観光支援室関係プロジェクトの業務工程とプロジェクションマッピング事業の推進について提案した。

打ち合わせの概要

1. 日時 9月18日(木) 16時15分～17時15分
2. 場所 本学本館役員室
3. 参加者
 横澤輝樹(稚内市議会議員・稚内みなとまちづくり懇談会)
 佐々木学長(稚内北星学園大学)
 小谷准教授(同上)
 藤崎講師(同上・稚内みなとまちづくり懇談会)
 黒木講師(稚内北星学園大学)
4. 内容
 - 1) COC事業の全体像
 - 2) 地域観光支援室関係プロジェクト業務工程
 - 3) プロジェクトマッピング事業の推進

協議内容の要旨

協議では、上映の仕方について、他の催し物やイベントの持つ世界観、構造物の持つイメージとの統一感について、上映場所について等について意見交換がなされた。

また、本事業が持つ人材育成としての側面について意見交換がなされた。5年後の事業完了時に、地域で活躍する知識と経験を兼ね備えた人材の育成に取り組んでほしいとの地域の声もあった。

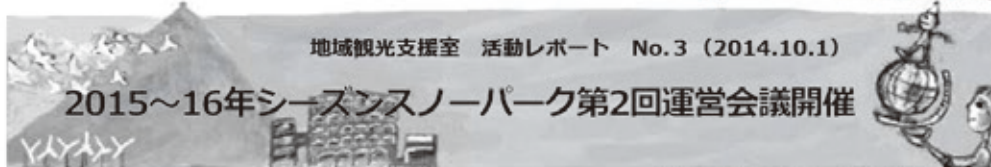
今後の展望

今後は、本年度の事業推進のため、稚内みなとまちづくり懇談会幹事に大学が出席し、本事業について説明の上、関係機関の連携を図ることになった。



工 程	種 別	担 当	2014年9月		2014年10月		2014年11月		2014年12月		2015年1月		2015年2月		2015年3月	
			18	25	1	8	15	22	29	5	12	19	26	2	9	16
観光情報誌 高千穂特別号	発行	黒木														
	発行準備	黒木														
制作	制作費	黒木														
	発行費	黒木														
PR/メディア	広告費	黒木														
	PR/メディア費	黒木														
PR/メディア	制作費	黒木														
	制作準備	黒木														
PR/メディア	制作費	黒木														
	制作準備	黒木														
PR/メディア	制作費	黒木														
	制作準備	黒木														

お問い合わせ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2014.10.7)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)@wakhok.ac.jp
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に交換してください



稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

藤崎達也本学講師(地域観光支援室副室長)は、2015～16年シーズンスノーパーク運営会議に参画しており、その第2回運営会議が開催された。

今年度は、昨年度の危険箇所などの手直しが必要となっている。昨年度は北海道開発技術センター(DEC)よりの研究助成金があったが、今年は予算措置がない。そのため、クラウドファンディングなどを活用した資金集めが課題である。

これまでの活動経緯と成果

雪国で大切な観光施設であるスキー場経営は、スキー客の減少や自治体の財政難をうけて厳しい状態が続いている。一方で、北国の冬の健康増進や青少年の健全育成の観点から、スポーツ環境の充実が求められている。

昨年度、藤崎本学講師は地元の有志のボランティアをコーディネートして、こまどりスキー場にスノーボードパークを設置した。

工事に必要な重機などはスノーボードをする子供の親達が操縦し、本来であれば数百万円かかる工事を、わずか30万円ほどで行った。

このように、地方のスポーツ観光施設は協働型ユーザー(参考文献[1])と呼ぶべき利用者と施設管理者等とのコラボで運営するモデルを模索する時期に来ている。

稚内市では、市教育委員会、指定管理者、そしてスノーボード愛好家がこれまでの、管理者—利用者の枠を超えたスキー場運営を始めた。本学は、施設運営のみならず、コミュニティ育成に寄与している。



会議の概要

今回の会議は、今年度の運営にかかる内容を議論する目的で、下記の通り行われた。

1. 日 時 9月30日(火) 10:30～11:30
2. 場 所 (株)稚内振興公社
3. 参加者 佐々木課長(稚内振興公社)
木村亘(seamore)
藤崎講師(稚内北星学園大学)
4. 内 容

- 1) 2015～16年シーズンスノーパーク運営にかかるファンドレイズについて
- 2) クラウドファンディングサイト立ち上げにかかる打ち合わせ
・寄付者への記念品等の検討、打診
- 6) その他
スキー協会等との事前打ち合わせの必要性など
今後のスケジュール確認

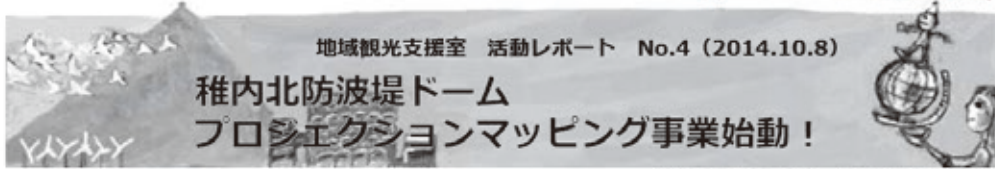
今後の展望

本事業には、引き続き藤崎本学講師がコーディネーターとして参画する。今後は、本学の進めている「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」との連携を図り、本学の教育力向上にも結び付けられることが期待できる。

<参考文献>

- [1] 藤崎達也(2014)「協働型ユーザーによる地域スポーツ施設の運営管理モデル」『稚内北星学園大学紀要』第14号。

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 藤崎達也 (2014.10.7)
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E mail info(フット)@wakhok.ac.jp
URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に交換してください



地域観光支援室 活動レポート No.4 (2014.10.8)

稚内北防波堤ドーム プロジェクションマッピング事業始動!

稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

稚内北星学園大学では文部科学省「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に採択され、さまざまな活動を行っている。地域の観光支援として本学のメディア関連、観光関連、地域振興の担当教員が共同で、稚内の観光名所「北防波堤ドーム」にてプロジェクションマッピングを使ったイベントを計画している。

これまでの活動経緯と成果

稚内港には昭和11年に完成した北防波堤ドームが「北海道遺産」として残され、今なお観光客などの人気スポットである。稚内港は戦前からの稚泊航路(稚内～サハリンを結んだ交易)の要衝として機能していたが、船舶との荷役作業等の効率化などのために鉄道の駅が現在の北防波堤に位置していた。海からの強風や塩水などから荷物や乗客を守るために建築されたドームは、稚内の歴史を物語る貴重なランドマークとして親しまれている。(写真-1)

観光振興のみならず、地域の誇りとしても北防波堤ドームに光を当てていくことは重要であると考え、本学のメディア制作や観光学での実地調査等から、歴史遺産の特徴を表現したプロジェクションマッピングによるアート作品の発表によって地域貢献ができると考えた。

多くの関係機関が関与する北防波堤ドームにおいて、協議を重ねながら最適な効果を導き出す必要がある。そのため、港湾を管理する北海道開発局や地域のボランティアによって運営されている「稚内みなとまちづくり懇談会」と意見交換を行うために下記の通り会議を開催した。

会議の概要

今回の会議は、今年度の運営にかかる内容を議論する目的で、下記の通り行われた。

1. 日時 10月6日(月) 18:00～
2. 場所 本学役員室
3. 参加者
横澤(稚内みなとまちづくり懇談会)
工藤(明)、工藤(富)、油川(稚内みなとまちづくり懇談会、稚内開発建設部)
佐々木、小谷、黒木(稚内北星学園大学)
藤崎(稚内北星学園大学、稚内みなとまちづくり懇談会)
4. 内容
1) 大学と懇談会との協力関係の確認
2) プロジェクションマッピング事業の説明
3) 彩北わっぴきやないとの共催について確認
4) 学生への開発局出前講義開催について
5) その他



写真-1 北海道遺産「北防波堤ドーム」

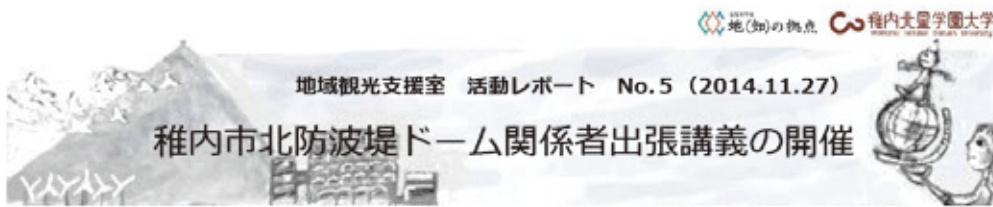


写真-2 会議開催の様子



写真-3 小谷准教授によるプロジェクションマッピングの説明

お問い合わせ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2014.10.8)
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)@wakhok.ac.jp
URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に交換してください



稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

去る11月27日本学1401教室において、国土交通省北海道開発局稚内開発建設部築港課港湾計画官の菅原慎也氏をお招きし講義を開催しました。

これまでの活動経緯と成果

本学COC事業において、本年度よりプロジェクトンマッピングによる観光振興支援を行うことを予定しております。また、観光協会との共同事業においてもまち歩きガイド事業を立ち上げるなど、産学連携での稚内観光の支援が本格化しているところです。

そのような中、稚内市の観光にとって重要な観光資源である「北防波堤ドーム」について改めてその価値を見つめ直す取り組みを行っています。今般、管理担当者の目線からのお話を伺うことにより、新たな面の発掘と、北海道開発局と学生との協力関係を構築する狙いで、出前講義を開催する運びとなりました。

この度はプロジェクトンマッピングの制作を進める広告制作論と、まち歩きガイド事業などを研究する北海道観光経済論の学生が講義を受け、現場の声を伺うことができ多に勉強になりました。



講座の概要

- | | |
|--------|---------------------------------|
| 1 講座名 | 「港湾の役割について」 |
| 2 実施日時 | 平成26年11月27日(木)
14時30分～16時00分 |
| 3 場所 | 稚内北星学園大学 1401教室 |
| 5 講師 | 稚内開発建設部 築港課
港湾計画官 菅原 慎也 氏 |

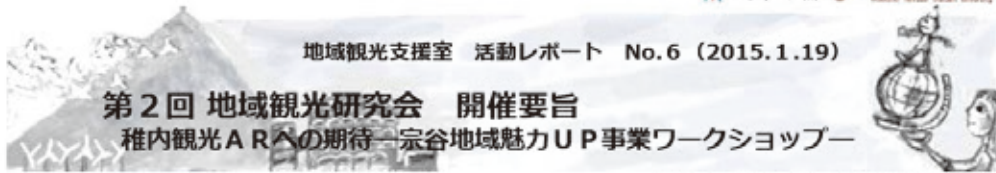


今後の展望

プロジェクトンマッピングは、隣まちづくり稚内と本学のコラボレーション企画「クリスマスエキシビション」(11月30日～12月25日の日程でキタカラにて開催)において「クリスマスプロジェクトン・アート」と題した本学学生制作のクリスマス・ビデオアートをアトリウム天井に投影するほか、稚内港まちづくり懇談会主催「彩北わっキャナイト2015」(2015年2月に北海道遺産・北防波堤ドームにて開催)において上映する予定です。

また、北防波堤ドームなどを案内するまち歩きガイド事業については、観光協会との共同事業として展開中。専属ガイド1名が視察対応などを行い、旅行会社等との商品化がなされています。

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 藤崎達也 (2014.12.3)
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E-mail info(フット)wakhok.ac.jp
URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に交換してください



稚内北星学園大学 地域観光支援室

はじめに

去る1月15日本学会議室において第2回 地域観光研究会を開催しました。テーマは「稚内観光ARへの期待」と題して、本学で観光学を担当している藤崎講師と、社会人学生3年の田端かがり氏による事例発表を行いました。その後、藤崎講師がアドバイザーをしている、地域の観光協会やガイドなどをメンバーとした「宗谷総合振興局宗谷地域魅力UP事業ワークショップ」のメンバーと意見交換を行い、大学が宗谷地方の観光振興に果たすべき役割などについて確認する時間となりました。

これまでの活動経緯と成果

本学は地元稚内市と包括連携に関する協定を結び、観光振興などについて協力体制をとっております。さらに、稚内観光協会と協働で「稚内ツーリズムラボ」を展開し、まち歩きガイドの育成やホームページの開設・運営に協力しています。より広域には、宗谷振興局の「宗谷地域魅力UP事業」に本学藤崎講師がアドバイザーを務め、宗谷管内の観光振興に取り組んでいるところです。

そのような経緯の中、情報メディア部門に強い本学のシーズを活かし観光振興に役立てられないかと研究を重ねているところですが、来年度よりカリキュラムとして「観光メディア論」を新設し、観光アプリの開発を行うこととなりました。情報技術を、現場の観光やマーケティングを駆使して、実際に市場投入を行うプロセスは学生にとって大きな学びとなるとともに、大学活動を通じた地域振興につながると思っています。

講座の概要

- 日時：2015年1月15日(木)18時30分～20時00分
- 場所：稚内北星学園大学 本館1階 会議室
- 報告者：稚内北星学園大学情報メディア学部 田端 かがり氏
- 報告者：稚内北星学園大学情報メディア学部講師 藤崎 達也 氏

報告者は宗谷総合振興局「宗谷地域魅力UP事業」を通して、稚内中央地区、南地区、さらに豊富温泉地区をワークショップ参加者や関係者らと実践し、その調査結果を元に研究を続けてきました。その成果を、大学内外と共有するとともに、振興局のワークショップメンバーなどとの議論を通して、大学の研究と地域振興の取り組みとをつなげる場となりました。

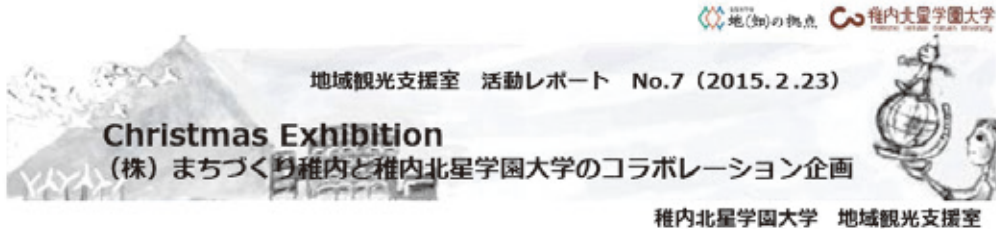


今後の展望

今回の研究会では大学内、ワークショップメンバーからさまざまな意見・感想を得ました。これらを、アプリの設計思想の原点とし、来年度の解説に向け準備を進めるものとします。なお、観光メディア論は観光ビジネスコースとメディア表現コースをまたいだ科目として設置され、2015年度から実施します。



お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2015.1.20)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E mail info(フット)@wakhok.ac.jp
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に変換してください



稚内北星学園大学 地域観光支援室

概要

(株)まちづくり稚内と稚内北星学園大学のコラボレーション企画「Christmas Exhibition」が、11月30日から12月25日の日程で、稚内駅キタカラにおいて開催された。このコラボレーション企画は、(株)まちづくり稚内が主催し、稚内北星学園大学協力、小谷彰宏（美術家、稚内北星学園大学准教授）の企画により行われた。

I. 造形ワークショップ「マスキングテープで飾るクリスマス・アートボックスを作ろう！」

コラージュやスクラップブックリングなどの技法を使い、クリスマス素材とマスキングテープやラッピング素材でデコる「クリスマス・アートボックス」を制作。完成作品は、キタカラで展示され、クリスマスの駅を彩った。

(希望者は当日に持ち帰り可能)

講師：小谷彰宏（美術家、稚内北星学園大学准教授）

日程：平成26年11月30日（日）10:00～13:00まで

会場：キタカラ2階 市民活動室



写真1 造形ワークショップの様子

II. 展覧会「クリスマス・アートボックス展」

ワークショップにて制作した「クリスマス・アートボックス」をキタカラに展示した。

展示期間：平成26年11月30日（日）～12月25日（木）

会場：キタカラ1階



写真2 展示準備作業

III. アートイベント「クリスマスプロジェクション・アート」

稚内北星学園大学の学生が制作したクリスマス・ビデオアートをアトリウム天井に投影した。

投影期間：平成26年12月1日（月）～12月25日（木）

会場：キタカラアトリウム（天井）



写真3 プロジェクション・アート①



写真4 プロジェクション・アート②



写真4 プロジェクション・アート③

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2015.2.23)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E mail info(フット)wakhok.ac.jp
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に変換してください

地域観光支援室 活動レポート No.8 (2015.2.23)

「彩北わっキャナイト2015」に参画
プロジェクション・メディアアート2作品他を制作・上映



稚内北星学園大学 地域観光支援室

概要

去る2月14日、「彩北わっキャナイト2015」(北海道遺産北防波堤ドーム)において、プロジェクション・メディアアート2作品の上映他、アイスキャンドルの制作を行った。このイベントは、稚内みなとまちづくり協議会主催、稚内開発建設部、稚内北星学園大学(小谷・藤崎)稚内北星学園大学地域観光支援室、Tourister BUZZ 倶楽部(札幌在住の学生×運輸局)が関わる形で開催された。

本学からは「広告制作論」にて制作のインタラクティブなプロジェクション・メディアアート2作品を上映するとともに、「北海道観光経済論」の学生がともに当該イベントに加わり、イベントにおける作品上映の意義や効果について合わせて学習し、企画実施力やコンテンツ制作力を高めた。



写真1 電源の確保



写真2 スノーキャンドルの制作



写真3 スノーキャンドルの配置



写真4 プロジェクション・メディアアートの準備①



写真5 プロジェクション・メディアアートの準備②



写真6 プロジェクション・メディアアートの準備③



写真7 プロジェクション・メディアアートの上映①

インタラクティブに反応する映像作品
 の前で楽しむ来場者

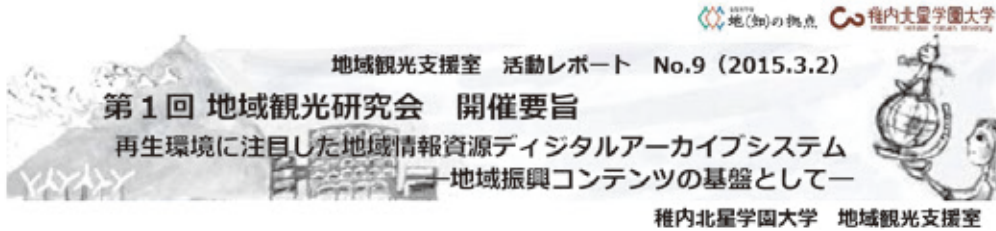


写真8 プロジェクション・メディアアートの上映②



写真9 プロジェクション・メディアアートの上映③

お問い合わせ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2015.2.23)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)@wakhok.ac.jp
 URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> ※(フット)は@に変換してください



概要

「地域観光研究会」開催の経緯と目的

地域観光支援室では、支援室担当教員で会議を行い、当支援室担当のCOC事業推進のため、必要に応じて地域観光やまちづくりに関係する学内外の実務者、研究者を講師に招き、活動・研究情報を共有し、議論する場として「地域観光研究会」を開催することにした。

第1回地域観光研究会の開催

去る、平成26(2014)年11月6日、当支援室が関わり進める観光ガイドアプリ開発に関わる研究報告をお聞きするため、本学講師 終 和佑先生を迎えて、第1回地域観光研究会の開催した。

報告要旨

終講師の講演内容は、本研究会終了後の11月11日「第46回 デジタル図書館ワークショップ (DLW) 情報処理学会 第116回 情報基礎とアクセス技術研究会 (IFAT) 合同研究会」において「再生環境に注目した地域情報資源デジタルアーカイブシステム—地域振興コンテンツの基盤として—」(DLW)と題して報告されるとともに発表論文として『デジタル図書館』No.46 (ISSN 1345-9198)に収録された。

このレポートでは、上記の発表論文に記載されている概要を引用し、その内容を紹介する。詳しくは、終[1]を参照されたい。

現在、様々な自治体で地域情報資源の収集・開発が行われている。収集された地域情報資源は地域振興のためのコンテンツとして利用されるほか、他のデジタルアーカイブと有機的にリンクされ、その利用方法が模索されている。本研究では、本大学の『地(知)の拠点整備事業(26年度COC)』で制作される、地域映像コンテンツの基盤となる地域情報資源デジタルアーカイブの構築を行っている。本稿では採択された事業の目的から、これまで収集した地域情報資源を利用した取り組みを紹介したうえで、今後、稚内市で利用される地域情報資源デジタルアーカイブシステムについて考察する。

引用・参考文献

[1] 終和佑 (2014) 「再生環境に注目した地域情報資源デジタルアーカイブシステム—地域振興コンテンツの基盤として—」 デジタル図書館編集委員会編『デジタル図書館』No.46
(http://www.dl.slis.tsukuba.ac.jp/DLjournal/No_46/1-hiiragi/1-hiiragi.pdf, 2015年2月25日アクセス)

参考資料

[1] デジタル図書館ワークショップ情報
(<http://www.dl.slis.tsukuba.ac.jp/DLworkshop/DLW-program.html>, 2015年2月25日アクセス)



図表 案内用フライヤー

お問合せ先 稚内北星学園大学 地域観光支援室 担当 黒木宏一 (2015.3.2)
〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E mail info(フット)@wakhok.ac.jp
URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> ※(フット)は@に変換してください



地(知)の拠点 稚内北星学園大学

第1回 地域観光研究会

再生環境に注目した地域情報資源デジタル アーカイブシステム

—地域振興コンテンツの基盤として—

2014年11月6日(木) 16時10分～17時10分

稚内北星学園大学 本館 302番教室

報告者 稚内北星学園大学講師

柁 和佑 氏

略 歴

2008年 筑波大学大学院博士課程単位取得退学
筑波大学図書館情報メディア研究科準研究員を経て、
2010年より現職
博士(情報学)



研究業績

- ・柁和佑,藤春都
"Amazon Kindle ダイレクト・パブリッシングの使い勝手を徹底
レポート Kindle 本を自力出版する冴えた(?)方法",角川書店
- ・柁和佑,泉志帆莉,安藤友晴
"地域情報資源としての地域内在型物語の発想・創作支援及び配信
手法",人工知能学会全国大会2014、他多数

問い合わせ先

稚内北星学園大学 C O C 推進委員会地域観光支援室 TEL : 0162-32-7511 (黒木)
※ 本研究会の様子は録音し、当該事業の推進のため使用いたします。あらかじめご了承
承願いたします。



第2回 地域観光研究会

稚内観光IRへの期待 —宗谷地域魅力UP事業ワークショップ—

2015年1月15日(木) 18時30分～20時00分

稚内北星学園大学 本館1階 会議室

報告者 稚内北星学園大学情報メディア学部

田端 かがり 氏

報告者 稚内北星学園大学情報メディア学部講師

藤崎 達也 氏

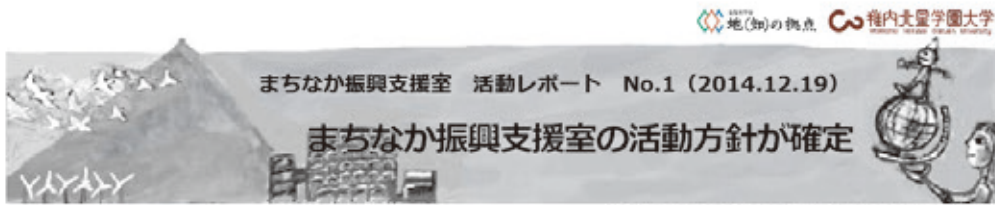
研究紹介・研究発表会のねらい

本学では地元の観光協会などと協力して、稚内市やその周辺の観光開発に力を入れている。特に、まち歩きガイドなどを通して、地域の「ちょっとした魅力」を観光資源につなげる手法や、マーケティング課題に実践的に取り組んでいる。そのような中、報告者は宗谷総合振興局「宗谷地域魅力UP事業」を通して、稚内中央地区、南地区、さらに豊富温泉地区をワークショップ参加者や関係者らと実践し、その調査結果を元に研究を続けている。
 今回の研究発表は、単なる講演にとどまらず、振興局のワークショップメンバーなども加わり、大学の研究と地域振興の取り組みとをつなげる場としたい。

問い合わせ先

稚内北星学園大学 C O C推進委員会地域観光支援室 TEL : 0162-32-7511 (黒木)
 ※ 本研究会の様子は録音し、当該事業の推進のため使用いたします。あらかじめご了承ください。

8-3. まちなか振興支援室活動レポート



稚内北星学園大学 まちなか振興支援室

はじめに

稚内北星学園大学の「地(知)の拠点(COC)」事業のうち、中心市街地活性化に取り組む「まちなか振興支援室」では、このほどその活動方針を確定した。

基本方針

基本方針は以下の2点である。

①学生の地域学習・地域活動の展開・支援

学生たちが地域のなかで地域の人びとから学ぶ機会をつくり、地域のために地域の人びとと共に活動することを支援していく。

②“まちなか”と“まちそと”の好循環を生み出すシステムの開発

“まちそと”空間(稚内市外・郊外のリアルまたはバーチャル空間)のニーズやイメージ、記憶、噂などの情報を収集し、“まちなか”空間(中心市街地)へ効果的に提供することにより、“まちなか”の変化・創造を促していくシステムを構築する。さらに、“まちそと”情報を受けた“まちなか”空間の変革・創造の成果を発信し、“まちそと”空間の情報を変革することにより、実体的な人の循環を創出するシステムを構築する。

活動内容

以上の基本方針を受けた具体的な活動内容は以下の5点である。

- ①“まちなか”住民と学生との協働活動の支援(学生主体の「まちゼミ」コーディネート支援など)
- ②“まちそと”空間の調査・情報収集
- ③“まちなか”空間(特に中央商店街)への情報提供のシステム化
- ④“まちなか”から“まちそと”への情報発信支援およびそのシステム化
- ⑤市民のメディア技術活用に関する相談・支援

成果指標(5年後に目指す姿)

5年後に文部科学省補助事業としてのCOC事業完了時に目指す姿は以下の5点である。

- ①学生たちが“まちなか”地域への意識を高め、主体的に活動を展開するようになっていること
- ②“まちなか”の人びとが協同し、主体的に地域づくり活動を展開するようになっていること
- ③学生と“まちなか”住民の協働活動が広く展開するようになっていること
- ④“まちなか”空間と“まちそと”空間の間の情報・人の循環が定着していること
- ⑤「まちなかメディアラボ」が本学の授業・主催事業以外にも、学生や市民の自発的な活動の場として日常的に使われるようになっていること

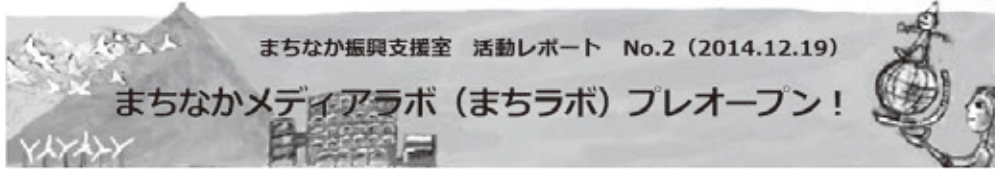
まちなかメディアラボの機能

最後に、まちなか振興支援室の活動拠点となる「まちなかメディアラボ(愛称:まちラボ)」の機能を以下の3点とし、そのイメージを下図に整理した。

- ①中心市街地における学生たちの活動拠点
- ②中心市街地に関する情報の受信・蓄積・発信の基地
- ③市民が集い、交流し、学びあう場



お問い合わせ先 稚内北星学園大学 まちなか振興支援室 担当 若原幸範 (2014.12.19)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500 E mail info(フット)wakhok.ac.jp
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に変換してください



稚内北星学園大学 まちなか振興支援室

はじめに

稚内北星学園大学の「地(知)の拠点(COC)」事業のうち、中心市街地活性化に関する取り組みの拠点施設となる「まちなかメディアラボ(愛称:まちらボ)」が、このほどプレオープンすることとなった。

まちらボとは

まちらボは、本学サテライトのひとつであり、①中心市街地における学生たちの活動拠点、②中心市街地に関する情報の受信・蓄積・発信の基地、③市民が集い、交流し、学びあう場、という3つの機能を備えた施設である。

場所は稚内市中央3丁目、中央商店街(アーケード街)のなかにある。メディア表現指導員が常駐し、学生の“まちなか”活動を支援するとともに、市民のメディア表現相談(画像・動画の加工・編集、チラシ・ポスターの作成など)を行うほか、本学の授業や市民講座、ギャラリーを開催することなどを予定している。

2014年度中に施設整備を行い、2015年4月より正式オープンする。日常的には大学案内や本学学生・教員の作品展示を行っており、簡易な休憩・ミーティングスペースとしても活用できる。下記の看板を見かけたら、ぜひ気軽に立ち寄っていただきたい。

プレオープン・イベント



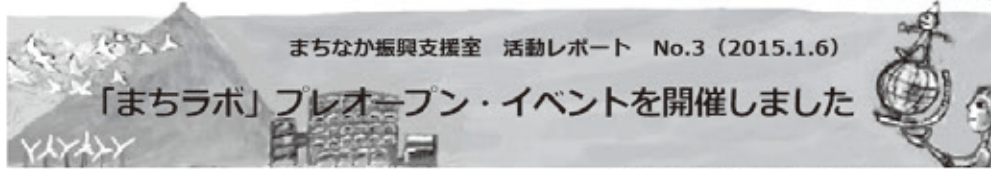
2014年12月20日～21日に、稚内中央商店街振興組合「学べる!健康商店街」とSOYA PARTYと連携させていただき、“まちらボ”プレオープン・イベントを開催する。

「想いをカタチに 地域の未来を創ろう」をコンセプトに、地域の未来を担う学生たちの作品(写真、映像、ゲームなど)や活動記録(学校・学習支援、地域活動など)の展示をメイン企画としている。また、特別企画として小谷准教授によるクリスマス・オーナメント制作講座、安東講師によるパズル講座や、大学図書館の細田司書による読み聞かせを予定している。さらに、中央商店街、SOYA PARTYとの連携企画としてスタンプラリーも実施する。

子どもからお年寄りまで、市民の皆様にも楽しみながら“まちらボ”や本学COC事業について知っていただく機会にしたいと願っている。



お問い合わせ先 稚内北星学園大学 まちなか振興支援室 担当 若原幸範 (2014.12.19)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)wakhok.ac.jp
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html ※(フット)は@に変換してください



稚内北星学園大学 まちなか振興支援室

「まちラボ」プレオープン・イベント

12月20日(土)～21日(日)に、「まちラボ」プレオープン・イベントを開催した。「想いをカタチに 地域の未来を創ろう」をコンセプトに、メイン企画として地域の未来を担う学生たちの作品(写真、映像、ゲームなど)や活動記録(学校・学習支援、地域活動など)を展示した。また、特別企画として小谷教授によるクリスマス・オーナメント制作講座、安東講師によるパズル講座、大学図書館の細田司書による読み聞かせを開催した。

両日ともあいにくの悪天候だったが、2日間で延べ95名もの来場者があり、多くの人びとに「まちラボ」を知っていただく機会となった。また、延べ23名の学生が運営サポートボランティアとして参加した。なお、「まちラボ」の正式オープンは2015年4月を予定している。



「まちラボ」の使い方へのアイデア

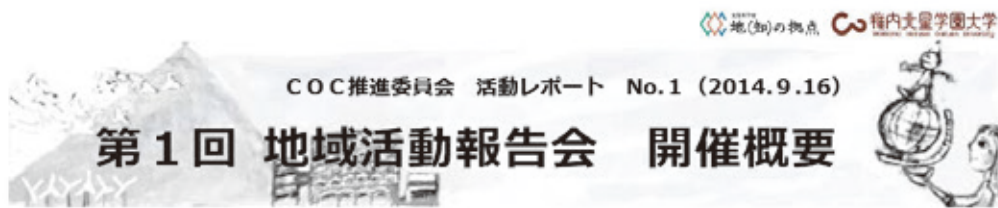
今回のプレオープン・イベントでは、来場者がそれぞれの「まちづくりアイデア」を書くことのできる掲示板を設置した。多くの意見が寄せられたが、ここではその内「まちラボ」の使い方についてのアイデアをいくつか紹介する。

地域のなんでも屋さん/子どもたちの勉強できるスペース/稚内の情報通/
 ゆっくりとできるカフェ/商店街の営業時間よりも長くいられるサロン/
 やっぱりたまり場!!/若者が集まる場所/相談相手がいる場所/
 誰でも楽しめる場所/ケーキ店とのコラボ/
 帰れなくなったときの宿泊場所(帰りたくないときでも可)/
 個人の特技を教えられようような場所がほしい



お問い合わせ先 稚内北星学園大学 まちなか振興支援室 担当 若原幸範 (2015.1.6)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)@wakhok.ac.jp
 URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> ※(フット)は@に変換してください

8-4. COC推進委員会活動レポート



開催の目的

本学は、文部科学省地(知)の拠点事業の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指している。

地域活動報告会は、当該事業の推進を図るため本学が定期的実施するもので、第1回である今回は、本学におけるこれまでの地域活動の成果を報告し、全学的な共通理解を図ることを目的として開催した。

開催の要項

- <日時> 平成26(2014)年9月16日(火)
午後14時30分～午後16時00分
- <場所> 稚内北星学園大学1401号教室
- <参加人数> 57名
- <プログラム>

第1回地域活動報告会にあたり、佐々本政憲本学学長よりご挨拶ののち、以下の5報告並びに総合討議を行った。

- 報告1 COC事業の概要 ～本学が目指す地(知)の拠点～
稚内北星学園大学情報メディア学部長 斎藤 吉成
- 報告2 「ぐんぐん塾」で学んでいること
稚内北星学園大学情報メディア学部3年 阿部 浩希
- 報告3 「ぐんぐん塾」との出会いから
稚内北星学園大学情報メディア学部3年 橋本 貴
- 報告4 「ぐんぐん塾」の体験を生かして
稚内北星学園大学情報メディア学部4年 湯井 達海
- 報告5 利尻の子供と先生に学ぶ
稚内北星学園大学情報メディア学部3年 木村 英之
総合討議(質疑・応答)

報告の要旨

斎藤学部長は、COC事業の概要、及び本学が目指す地(知)の拠点の将来像を、これまでの本学の地域活動の実績を紹介しながら説明し、合わせて今後の活動予定を説明した。

阿部さんは、担当校の子どもたちが積極的に学習に取り組んでいる姿を具体的に紹介したうえで、そうした子どもたちの姿勢から、自身の大学での学びへの刺激を受けていることを報告した。

橋本さんは、ぐんぐん塾の指導を担当する指導員(元教員)とのやりとりを紹介し、そこから教員としての力量を見につけるためのヒントや、子どもの捉える視点について学んだことを報告した。

湯井さんの報告は、ぐんぐん塾で一人一人の子どもの気持ちを汲み取り対応していく体験を、将来希望している社会教育主事の仕事と関連して、町づくりや地域振興の場で役立たせたいというものだった。

木村さんの報告は、利尻町の夏休み小中合同学習会での学びや発見とともに、ゼミ活動(教育活動)としての重要性にも触れていた。その上で、この学習会を稚内全体の取組として発展させられないか、という考えを発表した。

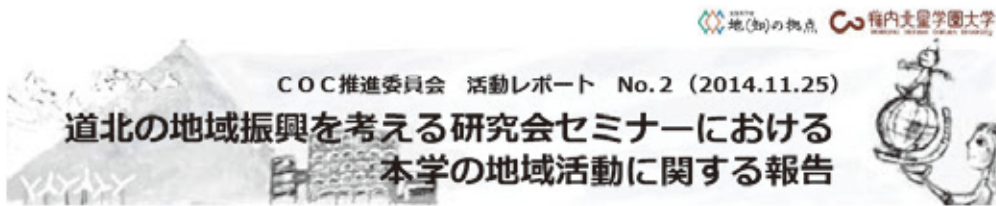
総合討議の要旨

総合討議に先立って、学生の取り組みに関して2名の担当教員より講評があった。坪内本学教授からは、学生が地域に貢献しながら自らの学びをしていることに大きな意味があること、米津本学講師からは、学生が実践的に学ぶことで教員としての力量を着実に高めていることが語られた。

フロアからは、学生が地域に出て活動することで、地域の中に若者がいて頑張っていることが見える、その姿に励まされる、という意見が出された。

総括

本報告会は、稚内北星学園大学COC事業の概要や本学におけるこれまでの地域活動の成果を関係者が一堂に会して共有する機会となった。総合討議では、今後の展開についても議論がおよぶなど、本学におけるこれからの地域活動について、その広がりが大いに期待できる結果を得た。



道北の地域振興を考える研究会セミナーの概要

本学の3名の教職員が会員として参加している、道北の地域振興を考える研究会（神沼公三郎会長）は、11月22日～23日に、「2014年度道北の地域振興を考える研究会セミナー」を稚内北星学園大学で開催した。

本セミナーは、「大学と地域はいかに連携すべきか」をテーマに、稚内北星学園大学と名寄市立大学の事例を中心として、大学が地域と連携して行う教育研究実践の実際・課題・展望に関する報告と議論を行い、持続可能な地域社会の確立に向けて望ましい大学と地域との連携の在り方が検討された。

今回のセミナーでは、文部科学省「地(知)の拠点推進事業」の採択を受けた本学の地(知)の拠点推進事業についても報告した。以下、斉藤学部長とゴータム准教授の行った報告の要旨を公表する。

報告要旨

地(知)の拠点整備事業の全体像と進捗状況

情報メディア学部長/COC事業推進責任者 斉藤 吉広

本学が採択されたCOC事業「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」では、①地域の教育力向上、②観光まちづくり、③中心市街地活性化を課題としている。①に関わる放課後学習支援の経験については、ディスカッションでも「なぜ稚内ではできるのか」と議論になったが、行政や関係団体との緊密な話し合いが重要である点を訴えた。

またCOC事業そのものではないが、地元社会人の生涯学習の場としての夜間主クラス、市報の編集、学生主体の「まちづくりサロン」の取り組みなども紹介し、地域との多様なつながりの中で今回の事業を進めていくという見通しを述べた。さらに、短大時代には旺盛に行われていた名寄市立大学との交流の経緯について資料を提示し、今後あらためて連携を進めていけるよう期待を表明した。



稚内北星学園大学の地域無線ネットワークへの取り組み

情報メディア学部准教授 B. P. ゴータム

本学は、これまで地域ネットワークの研究を重ねてきた。その技術は、2010年度から海を渡り、ネパール・ヒマラヤ地域での無線ネットワークの構築についての研究として、室蘭工業大学とともに進行している。2012年度から、交通、ネットワークインフラの整っていない地域における低コストの無線ネットワークの構築を研究している。

以上の研究成果は、特に当該地域の学校教育に貢献している。今後は、高齢化福祉等への関わりについて研究を進め、稚内、宗谷地域におけるネットワーク構築にフィードバックする予定である。

ヒマラヤ地域で実証実験を行っている地域には、再生可能エネルギーのポテンシャルが高いため、ネットワークインフラの構築を通じてスマートコミュニティを実現したい。

スマートコミュニティの実現において、省エネ技術が必須であり、ネットワークの監視と管理が必要である。そこで、現在、ネットワークの監視と管理を行う自律制御ロボットを開発中である。




お問合せ先 (2014.12.1)
 稚内北星学園大学COC推進委員会 担当:黒木
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28
 電話 0162 32 7511 FAX 0162 32 7500
 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp
 ※(ｱｯﾄ)は@に変換してください
 URL http://www.wakhok.ac.jp/coc.html

地(知)の拠点 Wakkanai Gakuin University

COC推進委員会 活動レポート No.3 (2015.2.25)

第2回 地域活動報告会 開催概要



開催の目的

本学は、文部科学省『地(知)の拠点整備事業』の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指している。

地域活動報告会は、当該事業の推進を図るため本学が定期的に行うもので、第2回である今回は、本学におけるこれまでの地域活動の成果と、今後の活動の予定や展望等について報告が行われた。

開催の概要

- <日時>平成27(2015)年2月12日(木)
15:00~17:00
- <場所>稚内北星学園大学 1301号教室
- <参加人数> 49名
- <プログラム>
- <第1報告>伊藤 亮 (3年)
「温泉街に、あかりをつけて。」
～「地方の時代」映像祭・優秀賞受賞報告～
- <第2報告>松尾 馨・江戸 勇介 (4年)
猿払遠隔授業で学んだこと
- <第3報告>武田 大貴 (2年)
まちづくりサロン in 稚内北星学園大学
～若者を変える! 楽しいマチ 稚内～
- <第4報告>若原 幸範 (情報メディア学部講師)
「まちなかメディアラボ(まらぼ)」の可能性
- <第5報告>安藤 友晴 (情報メディア学部教授)
アクティブ・ラーニングを支援する
『わくほくメディアラボ』
- 総合討議(質疑・応答)

稚内北星学園大学の公式Facebook
ページがオープンしました。

<http://facebook.com/wakhok>



報告の要旨

<第1報告>

伊藤さんからは、「地方の時代」映像祭、市民・学生・自治体部門で優秀賞を受賞した映像作品制作の経緯と過程についての報告と、受賞作品の上映があった。これは授業の一環として、学生3人で作成したもの。メンバーの一人が豊富町出身で縁があり、「豊富温泉雪あかり」の様子を撮ってほしいと声をかけられ、制作に至ったもの。映像では、豊富温泉街で、以前からの住民と湯治のための移住者などが、協力してお祭りをつくりあげるまでの過程を映像にした。映像はYouTubeにて視聴可能。



伊藤亮さん

<https://www.youtube.com/user/wakhok1987>



※ 本学のYouTubeサイトにアクセスされます。

江戸勇介さん



松尾馨さん

<第2報告>

松尾さん、江戸さんからは、猿払村浅茅野小学校の児童を対象とした、遠隔授業の取組について報告があった。

猿払村教育委員会からのご提案で、教員志望の学生が講師となつて、Skypeを活用し算数と国語の学習支援を4回行った。児童からは好評で、2015年度は2校の小学校に6回の授業を予定している。

報告の要旨



武田大貴さん

<第3報告>

武田さんは、自身がファシリテーターを務めた「まちづくりサロンin稚内北星学園大学」について報告した。これは、高校生や大学生を含む若者が主体となったサロンで、稚内が元気になる楽しいアイデアを考えようというもの。当日は多くの提案が出され、若者のまちづくりへの意欲が見られた。今後は、「商店街活性化」に向けて関わりたいとのこと。サロン当日のアイデア集は、本学webサイトから閲覧可能。



http://www.wakohk.ac.jp/image2011/news/2014saron_net.pdf

※ PDFファイルが開きます。

<第4報告>

若原講師からは、「まちなかメディアラボ(愛称:まちラボ)」が紹介された。まちラボは稚内市中央商店街の空き店舗に設置された本学のサテライト施設で、学生たちの活動拠点、観光やまちづくりに関する情報収集・発信拠点としての役割を持つ。

また「メディア表現指導員」が常駐し、パソコンの使い方やデジカメの写真加工、動画の編集、チラシやポスター作成等の相談をすることもできる。他にも、子どもの学習スペースとして、ミーティング・休憩場所として、それ自身がまちづくりの拠点になるような場として位置づけられている。



若原幸範講師

手前は
中野恵香
メディア表現指導員



安藤友晴教授

<第5報告>

安藤教授からは、「わくほくメディアラボ」が紹介された。これは学生が「アクティブ・ラーニング」を行うための協働学習をサポートするための施設で、4~5人の学生が作業できる机と椅子、コンピュータ・プロジェクタ・ホワイトボードといった機材を設置している。

さらに「わくほくメディアラボ」での学習を支援するために「学習コンシェルジュ」を配置し、指導や助言を行う。2015年の4月から本格運用を開始する。

出席者へのアンケートから

当日参加された方の約半数(26名)から回答が寄せられ、報告会に来て「よかった」(16名)「大変良かった」(8名)との評価をいただいた。その理由として「活動内容の理解ができた」「地域活動の相互交流の場になって面白い」などの声が寄せられた。

また、今後への期待として、「知識意欲を刺激される場所。より多くの参加者から何かが“生まれる”場になってほしい」「学生としてもモチベーションが上がる。多くの学生が参加してほしい」などの意見があった。個別の報告についても、多くの激励の言葉、お褒めの言葉、新たなアイデア等をいただいた。

このアンケートは活動改善のため今後も継続予定。

総括

第2回の地域活動報告会は、本学の取り組みと、今後の展開について報告する場となったが、多くの参加者から貴重なアドバイスや激励の言葉をいただく場となり、大変充実した機会となった。

アンケートにもあったように、報告会は大学からの発信の場というだけでなく、参加者が改めて地域の活動を知り、相互に交流をする場所としての機能も期待される場となりつつある。

今後、さらなる地域の相互交流や、新たなアイデアの発見の場となるような取り組みを行う必要があることを、改めて感じさせる報告会となった。

レポート執筆担当：米津直希(本学講師)

お問合せ先 稚内北星学園大学COC推進委員会 担当 黒木宏一・中野恵香 (2015.2.25)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(フット)wakohk.ac.jp
 URL <http://www.wakohk.ac.jp/coc.html> ※(フット)は@に変更してください



報告要旨

稚内北星学園大学は本年4月から、学生のアクティブ・ラーニングを支える施設である「わくほくメディアラボ」を開設するとともに、わくほくメディアラボの専属教員である「学習コンシェルジュ」による個別指導を開始する。

多くの大学では、「わくほくメディアラボ」のような施設は大学図書館を拡張した「ラーニング・コモンズ」として運営している。そのため、本学では先進的なラーニング・コモンズの運営を行っている大学への視察を計画した。本活動レポートは、2015年2月27日、本学の安藤友晴、柘和佑、鏡山樹の3名が筑波大学中央図書館ラーニング・スクエアを訪問した記録である。

(注) ラーニング・コモンズ: 複数の学生が集まって、電子情報も印刷物も含めた様々な情報資源から得られる情報を用いて議論を進めていく学習スタイルを可能にする「場」を提供するもの。その際、コンピュータ設備や印刷物を提供するだけでなく、それらを使った学生の自学自習を支援する図書館職員によるサービスも提供する。(文部科学省の下記Webページから引用。2015年3月20日確認)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/toushin/attach/1301655.htm

筑波大学中央図書館ラーニング・スクエアについて

筑波大学中央図書館ラーニング・スクエアは、平成23年9月から稼働している学生の学習支援を目的としたラーニング・コモンズ施設である。ラーニング・スクエアは筑波大学中央図書館本館2階に設置されており、以下の機能を有している。

- ・ ラーニング・アドバイザーによる学生サポート
- ・ 企画・展示
- ・ 授業との連携
- ・ ライティング支援連続セミナー



ラーニング・スクエアの入口



「クリエイティブエリア」に設置されているPC付きの個別ブース。多くの学生で賑わっていた。

ラーニング・アドバイザーによる学習支援


 地(知)の拠点
 
 稚内北星学園大学
 COC推進委員会 活動レポート
 No.4 (2015.3.20)
 2/2

ラーニング・スクエアには、大学院生が担当する「ラーニング・アドバイザー」による個別指導のための「学生サポートデスク」が設置されている(学期中ではないため、この日は担当者不在であった)。ここでは、PC関連の質問、レポート・卒論の書きかた、資料の探し方、あるいは学生生活に関するサポートなど、さまざまな個別指導をおこなっている。本年度の実績では、PC関連の質問がいちばん多く、次にライティングに関する質問、続いて文献検索に関する質問が多いとのことである。



サポートデスク。本日はお休み。



どのような支援を受けられるか、簡潔にまとめられている。

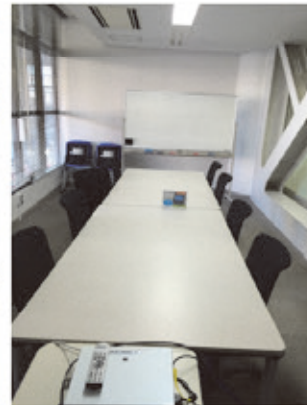
ライティングのサポートおよび施設による学習支援

ラーニング・スクエアでは、ライティング支援連続セミナー『言葉と知識をめぐる冒険』を開催している。附属図書館研究開発室教員との連携企画となっており、「読むこと」「考えること」「伝えること」など、大学での学びに必要なスキルをテーマごとに学習できるセミナーとなっている。

また、「プレゼンテーションエリア」では、学習成果のポスター展示や図書館の蔵書を使った展示企画などが実施されている。



「アカデミックスキルズ図書」コーナーではPC・執筆・調査に関する書籍が充実している。



2時間単位での貸出を行っているセミナー室。

訪問を終えて

筑波大学中央図書館ラーニング・スクエアは、すばらしい施設に加えて、担当者の方がサービス面でのさまざまな工夫を行っており、本学としても大いに参考になった。今後の課題としては本学と同様に「教育組織との連携強化」とのことである。今回の本学「わく

なくメディアラボ」でも今回の視察で得たことを取り入れていくとともに、新しいアイデアを実行していきたいと考えている。最後に、ご多忙にも関わらず対応してくださった筑波大学中央図書館のみなさまに心より御礼申し上げます。

お問い合わせ先 稚内北星学園大学COC推進委員会 担当 安藤 友晴 (9015.3.20)
 〒097-0013 稚内市若葉台1丁目2290-28 電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info(アット)wakhok.ac.jp
 URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> ※(アット)は@に変換してください

9. 地域活動報告会

9-1. 第1回地域活動報告会

開催日時：2014年9月16日(火)14時30分～16時00分

場 所：稚内北星学園大学 1401号教室(新館4階)

次 第：主催者あいさつ 稚内北星学園大学長 佐々木政憲

報告1 COC事業の概要 ～本学が目指す地(知)の拠点～

情報メディア学部長 齊藤 吉広

報告2 「ぐんぐん塾」で学んでいること

情報メディア学部3年 阿部 浩幸

報告3 「ぐんぐん塾」との出会いから

情報メディア学部3年 橋本 薫

報告4 「ぐんぐん塾」の体験を生かして

情報メディア学部4年 湯井 達海

報告5 利尻の子供と先生に学ぶ

情報メディア学部3年 木村 英之

総合討議(質疑・応答)





Center of Community
地域の教育力向上とまちづくりで協働する
地(知)の拠点整備

第1回 地域活動報告会

本学は、文部科学省地(知)の拠点事業の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指します。

地域活動報告会は、当該事業の推進を図るため本学が定期的を実施するものです。第1回である今回は、本学におけるこれまでの地域活動の成果を報告し、全学的な共通理解を図ることを目的として開催します。多数のご参加をお待ちいたします。

開催日時 2014年 **9月16日(火)** **14時30分**～

会場 稚内北星学園大学 1401号教室 (新館4階)

参加 無料 (直接、会場へお入りください)

※ 地域の皆様の参加をお待ちしております。

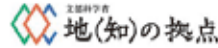
プログラム

14:30～	主催者あいさつ 稚内北星学園大学長 佐々木政憲
14:40～	報告1 COC事業の概要 ～本学が目指す地(知)の拠点～ 稚内北星学園大学情報メディア学部 齊藤 占広
15:00～	報告2 「ぐんぐん塾」で学んでいること 稚内北星学園大学情報メディア学部3年 阿部 浩幸
15:10～	報告3 「ぐんぐん塾」との出会いから 稚内北星学園大学情報メディア学部3年 橋本 薫
15:20～	報告4 「ぐんぐん塾」の体験を生かして 稚内北星学園大学情報メディア学部4年 湯井 達海
15:30～	報告5 利尻の了解と先住民族 稚内北星学園大学情報メディア学部3年 木村 英之
15:40～16:00	総合討議 (質疑・応答)

お問合せ先

稚内北星学園大学 COC推進委員会 担当 黒木宏一・長根弘司
〒097-0013 稚内市石葉台1丁目2290-28
電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500 E-mail info@wakhok.ac.jp
URL <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html> ※(mailto:)は@に交換してください
※ 報告会の様子は録画・録音し、当該事業の推進のため使用いたします。あらかじめご了承ください。

Press Release



報道関係者各位

平成 26 年 9 月 8 日

本学で 第 1 回地域活動報告会 を開催します ～文部科学省「地（知）の拠点整備事業」が始動～

稚内北星学園大学（学長 佐々木政憲）では、9月16日（火曜日）午後2時30分より1時間30分の予定で、文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された本学の取り組みを本格始動するため、本学新館 1401 号教室で「第 1 回地域活動報告会」を開催します。

- 本学では文部科学省地（知）の拠点事業の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指していくこととなりました。
- 当該事業の推進を図るため「地域活動報告会」を定期的を実施する予定としており、その第 1 回を開催します。
- 本学は地域に根差した大学を理念に掲げ、すでに様々な地域活動を展開してきたところです。そこで、第 1 回地域活動報告会は、すでに取り組みが進んでいる稚内市教育委員会「放課後グングン塾」と利尻町「夏休み小中合同学習会」を題材に活動の内容を発表します。
- 全学的取り組みとして地（知）の拠点事業を推進することとしており、これまで以上に地域との連携を図っていく計画です。
- 本学が採択を受けた地（知）の拠点事業「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備」の全体像も説明します。
- この機会に、地域の皆様との連携が加速することを期待しています。
- 稚内北星学園大学とともに「地域の教育力向上を図りたい」「観光まちづくりを考えたい」「地域を活性化したい」という皆様、「稚内北星学園大学について知りたい・興味がある」という皆様方に、ぜひ出席いただければと思います。今回リリースさせていただきました。

お問い合わせ先
稚内北星学園大学 COC 推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目 2290-28
電話 0162-32-7511 FAX0162-32-7500
E-mail : info@wakkhok.ac.jp ※@は@に変換してください

担当：黒木 ・ 長根

詳しい内容をホームページでも紹介しています。ご覧いただければ幸いです。
<http://www.wakhok.ac.jp/coc.html>

9-2. 第2回地域活動報告会

開催日時：2015年2月12日（木）15時00分～17時00分

場 所：稚内北星学園大学 1301号教室（新館3階）

次 第：

報告1 「温泉街に、あかりをつけて。」

～「地方の時代」映像祭・優秀賞受賞報告～

情報メディア学部3年 伊藤 亮

報告2 猿払遠隔授業で学んだこと

情報メディア学部4年 松尾 響

情報メディア学部4年 江戸 勇介

報告3 まちづくりサロン in 稚内北星学園大学

～若者が変える！楽しいマチ 稚内～

情報メディア学部2年 武田 大貴

報告4 「まちなかメディアラボ（まちラボ）」の可能性

情報メディア学部講師 若原 幸範

報告5 アクティブ・ラーニングを支援する『わくほくメディアラボ』

情報メディア学部教授 安藤 友晴





Date
2015.
2.12(Thu)
15:00 ~ 17:00
稚内北星学園大学
1301 教室 (新館 3 階)
参加無料

Contents

「温泉街に、あかりをつけて。」
～「地方の時代」映像祭・優秀賞受賞報告～
伊藤亮 (3 年)

猿払遠隔授業で学んだこと
松尾響 / 江戸勇介 (4 年)

まちづくりサロン in 稚内北星学園大学
～若者が変える! 楽しいマチ 稚内～
武田大貴 (2 年)

「まちなかメディアラボ」の可能性
情報メディア学部 講師 若原幸範

アクティブ・ラーニングを支援する
『わくほくメディアラボ』を開設します
情報メディア学部 教授 安藤友晴

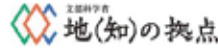


Info

稚内北星学園大学
COC推進委員会 (黒木・中野)
電話 0162-32-7511
E-mail info@wakhok.ac.jp
※@は半角に変換してください
HP <http://www.wakhok.ac.jp/coc.html>
※報告会の様子は録画・録音・撮影し、
当該事業の推進のため使用いたします。
あらかじめご了承ください。

第二回 地域活動報告会

Press Release



報道関係者各位

平成27年2月4日

本学で 第2回地域活動報告会 を開催します

稚内北星学園大学(学長 佐々木政憲)では、2月12日(木)15時より2時間の予定で、文部科学省「地(知)の拠点整備事業」に採択された本学の取り組みについて、本年度の成果、課題を報告し、今後の方向性を検討するため、本学新館1301号教室で「第2回地域活動報告会」を開催します。

- 本学では文部科学省地(知)の拠点事業の採択を受け、宗谷地域、とりわけ稚内市及び利尻町との連携を深め、地域の教育力向上とまちづくりで協働する地の拠点を目指していくこととなりました。
- 当該事業の推進を図るため「地域活動報告会」を定期的を実施する予定としており、その第2回を開催します。
- 本学は地域に根差した大学を理念に掲げ、すでに様々な地域活動を展開してきたところです。そこで、第2回地域活動報告会は、平成26年度に実施した、猿払遠隔学習支援や11月に稚内市役所市民共同課と開催したまちづくりサロン、12月にプレオープンしたまらうポなどを題材に活動の内容を報告します。また、「地方の時代」映像祭表彰式にて優秀賞を受賞した「温泉街に、あかりをつけて。」の上映や、来年度から本格始動するわくほくメディアラボの今後の活動について報告します。
- 全学的取り組みとして地(知)の拠点事業を推進することとしており、これまで以上に地域との連携を図っていく計画です。
- この機会に、地域の皆様との連携が加速することを期待しています。
- 稚内北星学園大学とともに「地域の教育力向上を図りたい」「観光まちづくりを考えたい」「地域を活性化したい」という皆様、「稚内北星学園大学について知りたい・興味がある」という皆様方に、ぜひ出席いただければと思い、今回リリースさせていただきました。

お問い合わせ先

稚内北星学園大学 COC 推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28
電話 0162-32-7511 FAX 0162-32-7500
E-mail: info@iw.wakhok.ac.jp ※@は@に変換してください

担当: 黒木・中野

詳しい内容をホームページでも紹介しています。ご覧いただければ幸いです。
<http://www.wakhok.ac.jp/coc.html>

アンケート調査結果

平成 27 年 2 月 25 日 稚内北星学園大学 C O C 推進委員会

第 2 回地域活動報告会出席者アンケート調査結果

<調査の概要>

実施年月日	平成 27 年 2 月 12 日
出席者数	49 名
調査票回収数	26 枚 (出席者数に対する回収数の割合 53.1%)

<調査結果の概要> ※ 自由記述を除く

① 回答者の構成 (設問 1)

- 一般参加が 7 人 (26.9%)、学生が 12 人 (46.2%) および本学教職員が 7 人 (26.9%) である。
- 学生 12 人の内訳は、1 年生から 4 年生まで各 3 人 (25.0%) である。

② 報告会の長さ、開催時間 (設問 2)

- 「適当な長さと思う」という回答者が 19 人 (86.4%) で最も多かったが、「長いと思う」という回答も 3 人 (13.6%) あった。
- 「午後の早い時間がよい」と「午後の遅い時間がよい」という回答者がそれぞれ 7 人 (41.2%) で最も多かった。

③ 報告会を何で知ったか (設問 3)

- 「チラシ」という回答者が 11 人 (44.0%) と最も多く、次いで「メール」「案内状」「その他」がそれぞれ 6 人 (24.0%) となっている。

④ 報告会に来てよかったと思うか (設問 4)

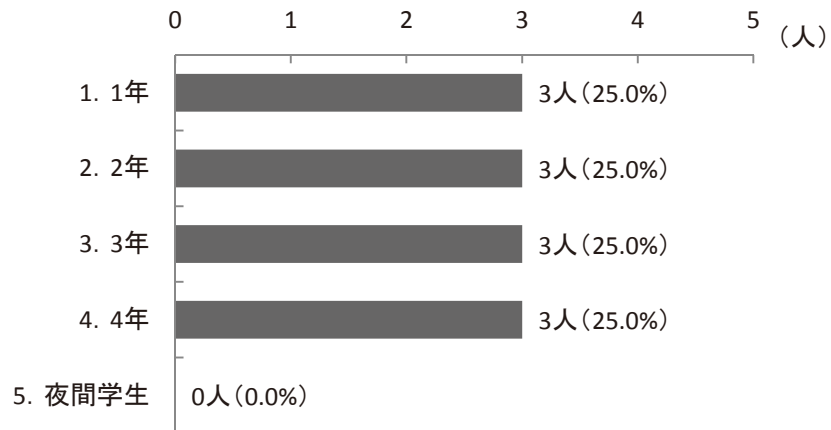
- 「よかった」16 人 (66.7%)、「大変良かった」8 人 (33.3%) となっている。

<凡例>

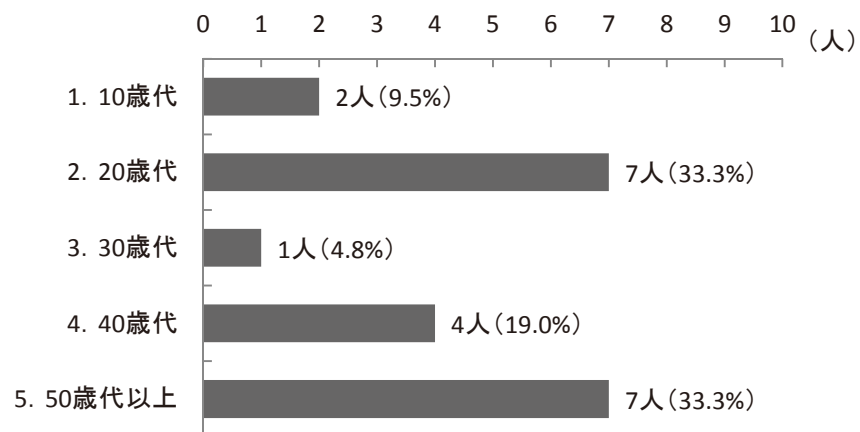
- 1) 当該設問に対する回答数を「n=」で表記した。
- 2) 自由記述については、回答者の意図を損なわぬよう、原則として原文の形で取りまとめた。

(1) はじめにあなたの学年(学生のみ回答)、世代、所属をお聞きします。(各1つに○)

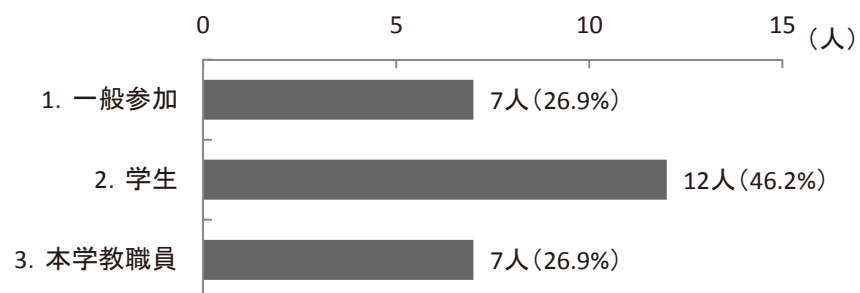
① 学年(学生のみ回答)(n=12)



② 年齢(n=21)

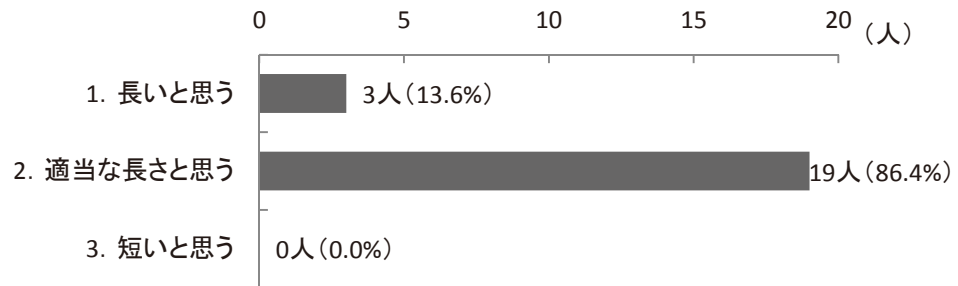


③ 所属(n=26)

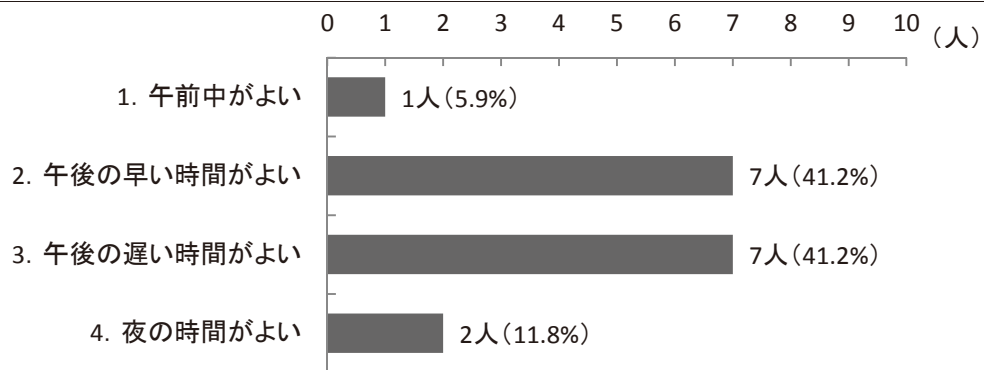


(2) 報告会の長さ、開催時間についてお聞きします。(各1つに○)

① 報告会の長さ (n=22)

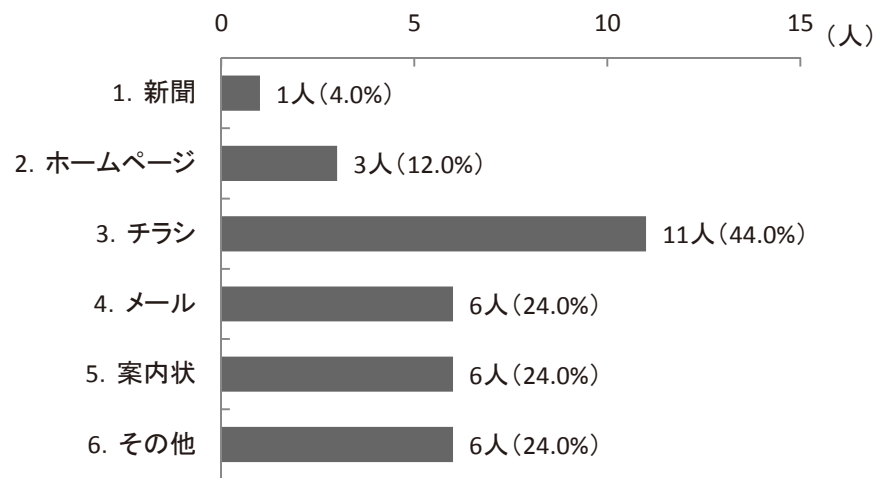


② 報告会の開催時間 (n=17)



(3) 今日の報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

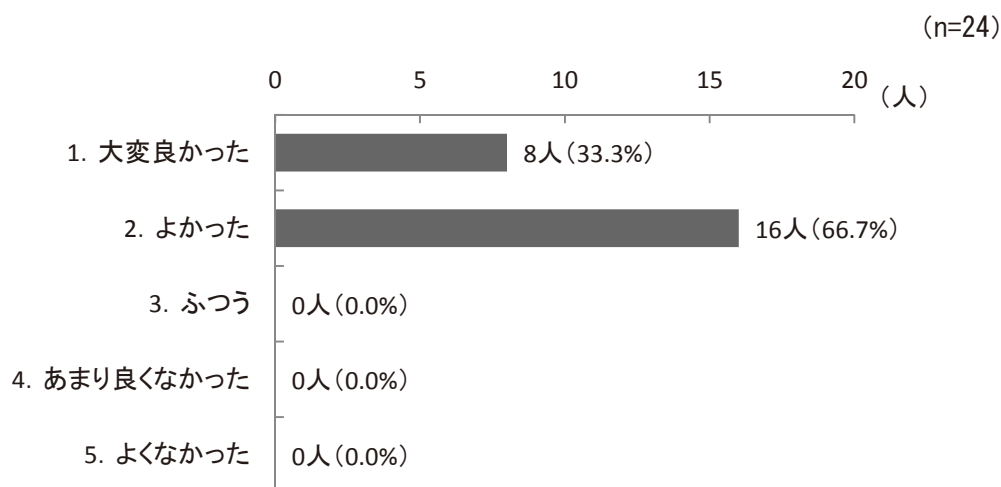
(n=33)



<その他の記述>

- ・ゼミのLINEでの案内
- ・教員
- ・坪内晃先生

(4) 報告会に来てよかったと思いますか。(1つに○)



「1. 大変良かった」を選択した理由 (自由記述)

- ・学生の活動や取組みなどが、具体的に理解でき、ただ単に勉強するだけでなく、地域の中へ入り込んだりすることをもっともってほしいと思います。(所属：一般参加)
- ・今後、私も報告する立場になるかもしれないので、参考になった。(所属：学生)
- ・実際に自分たちが行ってきた企画について発表し、共有、大学のPRなどにもつながることによってさらなる発展が期待できる。(所属：学生)
- ・まちラボやわくほくメディアラボの利用法が聞けたから。(所属：学生)
- ・学生の活動とそれに期待しあと押しする大学や関係機関のあたたかい支援・後援がすばらしい。(所属：本学教職員)

「2. よかった」を選択した理由 (自由記述)

- ・活動内容が理解できました。(所属：一般参加)
- ・活動の広がりやたしかめ合い力合わせの場になりうる。(所属：一般参加)
- ・地(知)の拠点として本学がどういう取組をしているかがわかった。(所属：一般参加)
- ・活動の報告によって自主的な活動の発信のきっかけになりそう。(所属：学生)
- ・大学が行った情報をまとめて聞けたから。(所属：学生)
- ・他の人が何をやっているのか分かったから。(所属：学生)
- ・地域の色々なことがわかりました。(所属：学生)
- ・本学の様々な取り組みを知ることができたため。(所属：学生)

(5) 今後、このような会でも取り扱ってほしい内容や話題（学生、本学教職員は行いたい内容や話題）をお聞かせください。

- ・色々な知的意欲を刺激される場なので、より多くの方（市民、学生）が参加でき、何か”生まれる”場になってほしい。（所属：一般参加）
- ・他の地域活動の相互交流の場になってもおもしろいね。（所属：一般参加）
- ・ぐんぐん塾など。（所属：学生）
- ・授業の一環としてみんな（学生）で参加する必要があると感じました。モチベーションがあがる会だと私は感じたので、そのように参加してほしいです。（所属：学生）
- ・大学と地域の学校との間で取り組んでほしいこと。（所属：学生）
- ・プレゼン形式の場合、すべての資料を用意するようお願いします。（所属：学生）
- ・ひきつづき学生たちの地域活動を報告、発信してほしい。（所属：本学教職員）
- ・メディアラボへのブレストツールの導入、Internet 接続、まちなか[※]わくほく間ライブ配信。
（所属：本学教職員）

(6) さいごに、各報告についてご感想や激励のメッセージがありましたらお聞かせください。

「温泉街に、あかりをつけて。」(自由記述)

- ・人と人が交わる場面を「きずな」として切りとられたすてきな内容でした。(所属：一般参加)
- ・元温泉小学校の教員であの頃にあった子供達の笑顔を伝えてもらってうれしかった。伝えることの大切さを感じられた。多くの心を伝えて下さい。(所属：一般参加)
- ・映像すばらしかったです。今後も宗谷のPRになる作品をお願いします。(所属：一般参加)
- ・地域の方々の取り組み、苦勞、表情が非常によくまとめられ伝わる映像でした。あとは、こういう映像をどう活用していけるか、うまく活用してほしい。(所属：一般参加)
- ・きちんとストーリーが出来ていて見やすい映像でした!!次回の作品が楽しみです!!(所属：一般参加)
- ・もっと市民の方にも報告できるような企画があればいいですね。(所属：一般参加)
- ・見てて飽きなかった。(所属：学生)
- ・素晴らしい動画でした。(所属：学生)
- ・すごく感動しました。本当に賞を受賞したのを確信しました(笑)(所属：学生)
- ・現段階では問題点などはあるが新しい学習支援の形だと感じた。(所属：学生)
- ・“みんなで!”というコンセプトが見事に貫かれていた。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)
- ・地域再生の活動を伝えるには最も効果的であると思った。(所属：本学教職員)
- ・音響の調整を事前におこなないとね。／新聞資料を用意しておけばよかった。(所属：本学教職員)

「猿払村学習支援(松尾さん)」(自由記述)

- ・感情は想いを伝える調味料。「やったー」「大丈夫か？」という起伏があれば、もっと伝わったかな。いい内容だから。(所属：一般参加)
- ・ぐんぐんでもがんばっていた成果出たかな。人と人がつながりの中で豊かに心も頭もなっていくことが大切だね。がんばりましょう。(所属：一般参加)
- ・こうした遠隔授業により学力向上につながるとすばらしいと思います。今後のご活躍をご期待しております。(所属：一般参加)

- ・宗谷管内の教育水準を向上させる素晴らしい可能性を秘めた取組だと感じた。それぞれの子どもたちの進度、理解度、性格に応じたきめ細かい対応はきっと課題のひとつであろうが、全体の底上げとなるよう、がんばってほしい。(所属：一般参加)
- ・教育長のお話のとおり、子供達が目を輝かせていたのが目にうかびました。次につながる企画ですね。(所属：一般参加)
- ・学習支援から更には高齢者向けの”〇〇教室”などにも取組んでみてほしい(所属：一般参加)
- ・私たち後輩に今度アドバイスください。(所属：学生)
- ・おつかれさまでした。(所属：学生)
- ・とてもわかりやすい構成で理解しやすかったです。発表が堂々としていて流石と感じました。自己紹介をしっかりしてほしかったです！(所属：学生)
- ・活動も大変充実していたものでしたが報告もポイントをおさえていてわかりやすかった。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)
- ・最後のサプライズの際の子供たちの表情が見たかった。(所属：本学教職員)

「猿払村学習支援(江戸さん)」(自由記述)

- ・感情は想いを伝える調味料。「やったー」「大丈夫か？」という起伏があれば、もっと伝わったかな。いい内容だから。(所属：一般参加)
- ・ぐんぐんでもがんばっていた成果出たかな。人と人がつながりの中で豊かに心も頭もなっていくことが大切だね。がんばりましょう。(所属：一般参加)
- ・こうした遠隔授業により学力向上につながるとすばらしいと思います。今後のご活躍をご期待しております。(所属：一般参加)
- ・宗谷管内の教育水準を向上させる素晴らしい可能性を秘めた取組だと感じた。それぞれの子どもたちの進度、理解度、性格に応じたきめ細かい対応はきっと課題のひとつであろうが、全体の底上げとなるよう、がんばってほしい。(所属：一般参加)
- ・教育長のお話のとおり、子供達が目を輝かせていたのが目にうかびました。次につながる企画ですね。(所属：一般参加)
- ・学習支援から更には高齢者向けの”〇〇教室”などにも取組んでみてほしい(所属：一般参加)
- ・私たち後輩に今度アドバイスください。(所属：学生)
- ・おつかれさまでした。(所属：学生)

- ・とてもわかりやすい構成で理解しやすかったです。発表が堂々としていて流石と感じました。
自己紹介をしっかりしてほしかったです！(所属：学生)
- ・活動も大変充実していたものでしたが報告もポイントをおさえていてわかりやすかった。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)
- ・最後のサプライズの際の子供たちの表情が見たかった。(所属：本学教職員)

「まちづくりサロン」(自由記述)

- ・「ケンキョ」って発表する時には、相手に受け入れやすくするエッセンス。サロンがどんどん広がってくると有用感もてますね。(所属：一般参加)
- ・今後の展開をご期待しております。(所属：一般参加)
- ・サロン自体も入口としてとても意義があると思う。でもどうせなら、サロンを終えてこれをここまで実現したというところをゴールとしてやってほしい。(所属：一般参加)
- ・武田くん、やっぱり早口だったなあ～おつかれ様～(所属：一般参加)
- ・今後、さまざまなサロンの実施を行い、市や地域に反映できればとても良いと思います。(所属：一般参加)
- ・丁寧で良かった。(所属：学生)
- ・今後も期待しています。(所属：学生)
- ・稚内のまちおこしということで、若者が主体ということだが、稚内のまちづくりに足りない部分を補う取り組みだと感じた。(所属：学生)
- ・せっかくのアイデアが実行、実現できるように頑張してほしい。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)
- ・URL がカーソル、コメントにかくれて全部見えなかった。(所属：本学教職員)

「まちなかメディアラボ」(自由記述)

- ・なんでもできる可能性があります。やりたいことをもっている人が増えるといいですね。(所属：一般参加)
- ・期待しつつ活用をみんなで創り上げたいですね。(所属：一般参加)
- ・地域の活性化に連携・協働出来たらと思います。(所属：一般参加)

- ・コンセプトがしっかりしていて、やれることはある意味無限かと思います。学生がぜひ”継続的に”自主的に、例えばサロンで出たアイデアを使うなど、もっと広げてほしい。(所属：一般参加)
- ・商店街との連携楽しみです。商店街の店主さん達をまきこめると良いですネ。(所属：一般参加)
- ・協力できることがあればドンドン連携しましょう。(所属：一般参加)
- ・まちラボについて理解することができました。(所属：学生)
- ・利活用に関して、学生の自主性の構築を目指して下さい。(所属：学生)
- ・誰もがふらっと立ち寄り、集いあうフリースペースとして期待している。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)

「わくほくメディアラボ」(自由記述)

- ・ラーニング・コモンズは、自治体の課題を取り扱う内容も興味わきます。(所属：一般参加)
- ・学校のフリーオープンスペース的なものかな。(所属：一般参加)
- ・他の取組ともうまく連けいしていけばとてもおもしろいと思う。稚内のラボ、皆が集うわっか(○)のラボ、という意味で「わっか(○)ラボ」とかいかがでしょうか。(所属：一般参加)
- ・使い次第でいろいろできそうですね！自宅からはこちらが近いので土、日等はこちらを利用してみたいです。平日は、まちなかメディアラボを利用してみたいです。(所属：一般参加)
- ・わくほくメディアラボの利用方法や愛称を考えてきます。(所属：学生)
- ・頑張ってください。万が一の事が何も伝わらなかった。期待していないのか。(所属：学生)
- ・「うちラボ」という愛称はいかがでしょう。学生全体を「家族」とするならば大学は「わが家」なので+「まちラボ」は大学外なので。(所属：学生)
- ・学習コンシェルジュとして適任者が配置されるよう願っています。(所属：本学教職員)
- ・全部良かったです。第1回目と比べてのびのびした奮闘気でした。また、出席者の方々の意見、感想が多くあり聞きごたえがありました。(所属：本学教職員)

資料 (アンケート調査票)

ア ン ケ ー ト

< お 願 い >

- このアンケートは、COC推進事業の推進と地域活動報告会の充実を図る目的で、参加者の皆様の感想やご意見をお伺いするものです。
- このアンケート調査の結果は、集計して利用され、個人を特定することはありません。
- このアンケートにより得た情報の管理は、個人情報保護規程等に則り、COC推進委員会が適切に行います。ご協力のほど、よろしくお願い申し上げます。

以下、6点お伺いします。該当する番号に○を付け、自由記述に感想をお書きください。

(1) はじめにあなたの学年(学生のみ回答)、世代、所属をお聞きます。(各1つに○)

- ① 学年(学生のみ回答) 1. 1年 2. 2年 3. 3年 4. 4年 5. 夜間学生
- ② 世代 1. 10歳代 2. 20歳代 3. 30歳代 4. 40歳代 5. 50歳代以上
- ③ 所属 1. 一般参加 2. 学生 3. 本学教職員

(2) 報告会の長さ、開催時間についてお聞きます。(各1つに○)

- ① 報告会の長さ 1. 長いと思う 2. 適当な長さと思う 3. 短いと思う
- ② 会の開催時間 1. 午前中がよい 2. 午後の早い時間がよい 3. 午後の遅い時間がよい
4. 夜の時間がよい

(3) 今日の報告会を何で知りましたか。(複数回答可)

1. 新聞 2. ホームページ 3. チラシ 4. メール 5. 案内状 6. その他 ()

(4) 報告会に来てよかったと思いますか。(1つに○)

1. 大変良かった 2. よかった 3. ふつう 4. あまり良くなかった 5. よくなかった

理由をお聞かせください： _____

(5) 今後、このような会で取り扱ってほしい内容や話題(学生、本学教職員は行いたい内容や話題)をお聞かせください。

(6) さいごに、各報告についてご感想や激励のメッセージがありましたらお聞かせください。

温泉街に、あかりをつけて。： _____

猿払村学習支援(松尾さん)： _____

猿払村学習支援(江戸さん)： _____

まちづくりサロン： _____

まちなかメディアラボ： _____

わくほくメディアラボ： _____

<ご協力いただきましてありがとうございました>

10. COC推進連絡会議

実施概要

第1回稚内北星学園大学COC推進連絡会議

日 時 平成27年3月23日(月) 15:00～17:00

場 所 稚内北星学園大学本館1階会議室

議事次第

1. 開 会
2. 開会挨拶(学長 佐々木政憲)
3. 出席者紹介(委員名簿・会議規程添付)
4. 議長選出(学長 佐々木政憲を選出)
5. 議事開始(進行説明)
6. 事業報告
 - (1) 全 体
 - (2) 地域教育支援室
 - (3) 地域観光支援室
 - (4) まちなか振興支援室
 - (5) 学生COC支援室
 - (6) わくほくメディアラボ
7. 感想・意見交換(外部委員から)
8. 当面のスケジュール
9. その他
10. 閉会挨拶(学長 佐々木政憲)

委員名簿

委員名称	所属・役職	規程第3条	氏名
議長	学長「事業推進代表者」	1号委員	佐々木政憲
委員	学部長「事業推進責任者」	1号委員	斉藤 吉広
委員	地域教育支援室長	3号委員	坪内 晃
委員	地域教育支援室副室長	3号委員	米津 直希
委員	地域教育支援室副室長	3号委員	安藤 友晴
委員	まちなか振興支援室長	4号委員	若原 幸範
委員	まちなか振興支援室副室長	4号委員	遠藤 孝夫
委員	まちなか振興支援室副室長	4号委員	柗 和佑
委員	地域観光支援室長	5号委員	黒木 宏一
委員	地域観光支援室副室長	5号委員	藤崎 達也
委員	地域観光支援室副室長	5号委員	小谷 彰宏
委員	学生COC支援室長	6号委員	侘美 俊輔
委員	学生COC支援室副室長	6号委員	若原 幸範
委員	学生COC支援室副室長	6号委員	米津 直希
委員	図書館長「わくほくメディアラボ室長」	7号委員	安藤 友晴
委員	COCプログラムオフィサー	8号委員	手島 孝通
委員	メディア表現指導員「まちなかメディアラボ所属」	9号委員	中野 窓香
委員	稚内市政策調整部参事	2号委員	柘田 紀行
委員	稚内市教育委員会学校教育課長	2号委員	遠藤 直仁
委員	稚内市経済部観光交流課長	2号委員	渡辺 直人
委員	稚内市経済部水産商工課長	2号委員	中村 清司
委員	利尻町教育委員会教育長	2号委員	川端 一輝
委員	稚内中央商店街振興組合関係者	2号委員	尾崎 篤志
委員	(株)まちづくり稚内常務取締役	2号委員	吉川 利明
委員	(財)稚内観光協会専務理事	2号委員	東 政史
委員	稚内市教育研究所所長	2号委員	高井 徳廣
委員	稚内市教育研究所所員	2号委員	江川 善次
委員	猿払村教育委員会教育長	10号委員	大石 真
委員	豊富町教育委員会教育長	10号委員	小野寺英治
委員	稚内商工会議所専務理事	10号委員	小川 勝美

議事要旨

紙面の都合上、感想（外部委員から）のみ抜粋して掲載する。

○稚内市（梶田様）

ことしの取り組み状況についてお話を伺いましたので、どういったことをやっているのかというのは大体内容は分かった。

特に期待しているのは、やはり中心市街地の活性化というところで、これは市としても大変重要な位置づけで取り組んでいる。そちらのほうを頑張ってもらいたいというのが一つ。それと、せっかく文科省の採択を受けているCOC事業なので、もっと全国的にアピールし、稚内北星学園大学のイメージを上げてほしいと思っている。

○稚内市（遠藤様）

グングン塾について、子どもたちはもちろんのこと、本当に学生にとってもよい経験になったのだろうなと思っている。11月と1月に、大学とも懇談をさせていただいた。27年度も引き続きグングン塾を実施しますので協力をお願いしたいと思っている。今、現5年生、新6年生対象の春休みグングン塾という新たな試みも大学の協力を得ながらやろうとしているところ。会場の借用も含めて、本当に大変お世話になっている。

グングン塾自体の事業成果としては、保護者アンケートを取った結果、分からないことが分かるようになったというお子さんの声や、グングン塾に期待する保護者の声もたくさん寄せられている。

先だって、標準学力調査が終わって、今、結果を研究所で分析をしていただいているが、3年生の部分について言うと、前年より学力が少し上がっている、改善されているという結果も出ている。4月に学力調査も控えており、学力の数字が全てとは言いませんが、子どもたちの学習の機会がいろいろな場面で増えるというのは非常にいいことだと思う。今後ともよろしくお願ひしたい。

○稚内市（江川様）

研究所の方としてグングン塾で大学COCと関わっているが、それだけではなくて、ICT利用教育に関して市内で頑張っている先生方が、大学の支援で協働して力をつけていくということが非常に大事だということで、研究所としても全面的に一緒に活動させていただいている。

何よりもまちづくりは人づくり、人づくりとまちづくりとがセットになっているところがキーになっていると思う。グングン塾で学生さんに入っていただいて、学習の支援をしていただくというだけではなくて、人と人との関わり方だとか、子どもの居場所だとかいうことがどんどん大きくなってきて、それが保護者の方から、期待が広がっている。

安心で安全で、そして笑顔で子どもを育てられる、そんなまち。その中でやっていただけることで、それをみんなで取り組んでくれているということに対する信頼関係は大きい。ぜひ今後ともお互いが成長していくということをキーにしながら続けていく必要があると思っている。

その間、学生さんとも色々関わらせていただいたり、ラインで繋がってみたり、ノートで繋がってみたりしながらやっているが、生き生きとしている学生さんたちが、この地域や、稚内だけでなく色々な地域にも元気を与えてくれているということで、COCの事業は非常に重要な活動だと認識している。

○稚内市 (中村様)

私の担当とすれば、やっぱり中心市街地の活性化です。私も担当して結構長くなるが、行政だけでは出来ないということを悩んでいて、長年のテーマです。先日も報道などで見ると、地価公示価格が出て、「キタカラ」ができたが、商店街に波及していないという見出しでドーンと出た。波及が簡単に出来るかという、なかなか出来ないと思う。とにかくにも、やっぱりその場所に魅力がなければ、なかなか人は来てくれないだろうし、特に商店街と言ってしまうと、やはり必要なものがなければなかなか人は集まってこないのだろうと思う。しかし、簡単に出来るかという、まずそれは難しい。

折角、「まちラボ」という、ある意味、商店街の中に一つ拠点ができたので、その中でさまざまな活動がこれから行われると思うが、そういったときに、やはり商店街の、本当にそこにいる人たちの連携や、私たち行政がどういった部分で一緒にできるかが大事なことだと思っている。この度「まちラボ」というのが出来て、4月から本格的に活動するという話を伺ったので、本日来られている商店街の理事長さんとも協力しながら、我々のできることを一緒に協働してやれば良いなと思っている。

○稚内中央商店街組合 (尾崎様)

私たち商店街の役割というものは相当大きいのではないかとあって、ずっと心して参加させていただいているが、先ほど侘美先生より話があった、例えば学生コンペなどには、次年度、商店街の予算、こちらで使える予算を少し取りたいと思っている。商店街の事業になるかもしれない

が、まちラボと共同で何かやるという事業の予算づけをして、その中でできることに対応出来るのではないかと考えている。

「まちゼミ」も、なかなか業種によって難しかったりするかも知れないが、できる範囲で、できる中身をやっていくこと、これはそんなにお金がかかる話ではないので、協力していただけるお店を探すということであれば、すぐにでも出来ることと考えている。

学生がどれぐらいやる気でやってくれるかというのと、そのサポートは結構大事なのではないかと、2月の「かまくらカフェ」で感じた。やる気がある学生が頑張ろうとしたときに、何を頑張っているのかが分からない、そんな感じを私は受けたが、その中で、色々とアドバイスをすると、ますます迷ったりすることもある。そこはやはり頻度よくアプローチをかけていくような形をとると、きっと学生はどんどんやってみたいという気持ちが大きくなっていくのではないかとと思う。そういう機会がたくさんあるといいなと思う。

○まちづくり稚内（吉川様）

まちラボの名前と場所と、何となく何かやっているという雰囲気は出ていると思うが、商店街の中でどんなことを実際の活動としてやるのかがなかなか現実的には伝わっていないのが現状で、実際、これから色々な活動をしながらか、それがだんだん認知されていくのだろうと思う。拠点として、少なくとも商店街の中に構えたので、どんなことができるか、どんなことを発信してくれるか、それが一般の市民の方に伝わって、実際にやる側の意欲だけでなく、現実的に一定程度の具体的な成果、そういうものに出てくる必要があると思う。

そういう意味で、これからきっと一般的に商店街で言われている「まちゼミ」をやっていくのだと思うが、どれだけ上手に認知してもらい、それに関わる人たちが増えるか、そういうところがすごく大事なのではないかと。そのときに、どんなとらえ方をして、学生たちはそれをどうやって実践するか、それがすごく大事ではないかと思う。ですから、開設すること自体は、皆さん自由に使える広場みたいな空間ができたと理解してくれると思うが、そこでどういうことを実動するのかというのは、逆にこれから求められる。

市民から見たときに、生活実感に繋がるとか、観光客の誘致に繋がるとか、現実的に使えるものとか、そういうものを持っていないと、単なる学習活動の一環みたいな形になってしまうのは、実際のまちなかでやる活動としては、最終的な成果が、なかなか捉えにくいのではないかと思う。

実践するときに、テーマのとらえ方とか、伝え方が非常に大事になると思う。我々としてもぜひそういう活動はやっていただきたいし、また、そういう場所の提供に関しては非常に期待している。協力できるものは協力していきたいと思う。

○稚内市（渡辺様）

今いろいろと各支援室のほうから御報告いただいた。

最初にお話があった観光の部分だけでいうと、観光の入り込みの停滞があったり、情報発信の不足があったりと、課題が見えやすくなっている分野でもあると感じている。

私どもも色々なことを取り組んでいることもあり、貴学の取り組まれているCOC事業も、振興局さんでやられていて尾崎さんが関わっているSOYA PARTYの観光に関わる情報発信事業などが、今、稚内の中で輻輳して動いているのが実態ではないのかという感想を個人的には持っている。それがうまく連携するのが一番効果的であり、また、それが観光客に向かっての発信力にもなり、当然、地元に対しての貢献度にも繋がるのだと思っている。個々の部分に関して、協力させていただける部分は是非協力させていただきたいと思っている。情報共有の部分に関しては、皆様のほうに出せるものはしっかり出していかなければならないと思っている。

COC事業は文科省の補助で動いていらっしゃるし、振興局さんの方と繋がるのかどうかまだはつきりお聞きしていないが、その辺が、うまく連携ができるようなことをやっていただけるのがいいのかなと思う。行政側も、せっかく皆さんがおやりになられているのを、足を引っ張るような動きをするわけにもいきませんし、みんなうまく連携して行って寄り添っていけるのか、前を走るのか、横にいるのかは別にして、進めていければいいと思う。

地域観光支援室の事業で、ガイドアプリの開発が今年度から進められるとのことだが、私どもも情報発信を色々と考えており、国で今進められているインバウンドに向けた情報発信で、アプリの話というのが随分と出てきていることから、大学側がどんな形で情報発信をお考えなのか、デモでも構わないので見せていただければ、私たちも勉強をさせていただきながら、連携させてもらえると助かると感じている。

○稚内観光協会（東様）

私ども、渡辺課長とも一緒に連携をとりながら、色々な関係者で観光振興ということで動いている。そんな中で、貴学の皆さん、それから学生の皆さんが地域に出て関わっていただけるということで、非常に心強く思っている。

実際、今年度も、何回か関係者と学生さんたちの接点があり、具体的には今後の振興策を考えていただくため、ボランティアガイドさんと一緒になってウォーキングをし、実際に体験してもらうなど、徐々に連携がとれていくものと思っている。

基本的に、若い人たちの知恵やアイデア、感性をぜひ活用させていただきたい。実際、授業で習得した技術や、知識等を、ぜひ地域に具体的に使っていただきたい。観光客用のマップの作成や、ホームページの有効な使い方等々も一緒にやっていただければと思う。ぜひ続けて連携をとっていききたい。

○稚内商工会議所 (小川様)

今、先生方にいろいろ御説明を聞いて、従来から新聞報道などでうっすら分かっていたところもあったが、なかなか一生懸命やっている感じがした。結局、この事業の目的は、北星大学の学生さんがこういう活動をされた、その結果、地元の企業が稚内北星大学の学生が欲しいなという流れになるのが一番大事なことだと思って聞いていた。

観光は非常に取り組みやすいテーマなので、それなりに具体的な取り組みが見えているが、本来であれば、地域で暮らしている人間がどの産業に従事して、この街で生きているのかというところに視点を動かしていかなければ、テーマパーク的な観光になってしまうのではないだろうかと思う。稚内という街は水産と酪農で成り立っている街なので、その辺も視点に入れた事業の展開が必要なのではないかと考えている。

学んでいく中で、この実証実験にトライしているわけだが、その中で、当然、有償で出来る分野をどれだけ作っていくのかということが大事だと思う。こういう田舎の街ですから、学生さんたちがアルバイトをやる機会はかなり制約されてくると思う。こういう取り組みを通してきちんと経済活動に繋がる、そういう仕組みが必要だと思う。そういう中で、どうやって地域の経済団体が関わっていくのかというところを、私たちとしても考えていかなければならない。町村のほうには商工会もありますし、やはり先生方が考えた段階で、一度御相談をいただければという感触はある。

ネーミングは素晴らしいが、私は結構年くっているので、「まちラボ」と言われても、何言っているのよという感覚になると思うが、今一番お金を持って自由に旅行をしている、買い物している世代というのは、やっぱり団塊の世代。その方たちが「まちラボ」という看板を見て、中で何があるのか、怖くてドアを開けないのではないかと。研究機関の事業名称ではいい。でも、誰に対してそのサービスをやっているのか、サービスの受け手がわかるようなネーミングなり情報発信をしなければ、それこそ学問の世界での学問で終わってしまうのではないかなと思う。消費者の目線でやっていただければ素晴らしいと思う。この中で一番成功している事例は、多分グングン塾だと思う。これは単純に子どもさんの学習能力がぐんぐん伸びますよと、イメージとし

てもわかる。そういうところをちょっと工夫していただければ、これだけ全学挙げて頑張っている事業なので、私たちとしても積極的に仲間に入れていただきたいと思って聞いていた。

○猿払村（大石様）

私は教育の立場でお話しさせていただく。

短期的なものではなく、長期的な形の中で見ていったときには、本当にありがたかったという印象を持っている。何がということは、私のいる猿払村では塾とかそういうものはない。その中で、学びたいときに学べるという環境がある、それを提供してもらえるということ。大学という知の拠点がいい形で働いて、力を貸していただけたことを感謝している。

もっと将来的に進めば、教育のへき地性を克服できるのではないかと考えている。自分が分からないときに、メディアを通して、テレビを通して、先生がいて、そこで聞いて、そこで学んで、こんないい学校なかったよという、故郷の良さを実感できる、そんなシステムができ上がったらいいなと思っている。その力を貸していただいた。大学の専門性を活かしてくれたのではないかと考えている。来てくれた大学生が子どもたちと触れ合う中で、学校でやっているピザの窯で焼いたピザを一緒に食べ、子どもが多くの人と出会う、人と行き交うという大きな成長、学びの場を与えてもらっているのではないかなという気がしている。

今、子どもたちは、これから宗谷管内で生きていくときに、人と交わる術を学ぶことが一番大事だと思いますし、まちづくりの一番大きな根本になるのは、やはり人と交わる能力が大切だと思う。そういう意味でも、これからは是非そういう可能性を広げていただければと思う。

11. 活動記録一覧

活動記録一覧表

7月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
28日 第1回 COC 推進委員会会議	28日 第1回 ICT 機器活用研究会	28日 ICT 利用レクチャーでの紹介 31日 採択のプレスリリース

8月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
4日 広報委員会で COC 広報につき議論		1日 「日刊宗谷」「読売新聞」COC 採択 全学生に採択報告メール
8日 文科省の「補助金説明会」に参加		3日 「稚内プレス」COC 採択
11日 稚内市と包括連携協定締結		4日 「ICT 技術と自然環境ワークショップ」で紹介
12日 文科省に補助金調書を送信		5日 「北海道新聞」COC 採択 教員免許更新講習にて採択紹介
26日 第2回 COC 推進委員会会議		13日 「わっぴー」COC 採択 20日 「日刊宗谷」猿払村遠隔学習支援予告

9月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
2日 教授会で事業実施の報告と提起(1)	11日 市役所、観光協会、中央商店街と協議	11日 「日刊宗谷」「稚内プレス」地域活動報告会予告
10日 第3回 COC 推進委員会会議	13日 猿払村遠隔学習支援(1/4)	16日 COC 推進委員会活動レポート no.1
16日 第1回 地域活動報告会	20日 猿払村遠隔学習支援(2/4)	17日 「稚内プレス」地域活動報告会報告
29日 第4回 COC 推進委員会会議	25日 稚内大谷高校生への ICT 利用授業 27日 猿払村遠隔学習支援(3/4)	18日 「日刊宗谷」地域活動報告会報告 19日 地域観光支援室活動レポート no.1 地域観光支援室活動レポート no.2
		26日 「日刊宗谷」「稚内プレス」ICT 利用授業報告

10月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
20日 経費内定	4日 猿払村遠隔学習支援 (1/4)	1日 地域観光支援室活動レポート no. 3
23日 第5回 COC 推進委員会会議	8日 「稚内学」で「地域における地の拠点」	8日 地域観光支援室活動レポート no. 4
28日 教授会で事業実施の報告と提起 (2)	18日 まちづくりサロン in 稚内北星学園大学	10日 「北海道新聞」「日刊宗谷」猿払村遠隔学習支援報告記事
	31日 第2回 ICT 機器活用研修会	14日 地域教育支援室活動レポート no. 1
		17日 「北海道通信」猿払遠隔学習支援報告
		26日 「日刊宗谷」事業全体

11月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
4日 第6回 COC 推進委員会会議	6日 第1回 地域観光研究会 学習コンシェルジュ・メディア表現指導員の公募	3日 北海道新聞にチラシ折込
25日 第7回 COC 推進委員会会議	12日 グングン塾総括会議	11日 日刊宗谷にチラシ折込
	18日 稚内市市民共同課長と協議	19日 「日刊宗谷」まちラボ紹介 「日刊宗谷」高大連携授業予告
	19日 猿払村遠隔学習支援総括会議	21日 「日刊宗谷」豊富映像作品受賞
	22日 道北研究会セミナーでCOC 事業報告	25日 COC 推進委員会活動レポート no. 2
	27日 学生移動用ワゴン配置	27日 「日刊宗谷」豊富、高橋さん映像作品受賞
	30日 まちづくり稚内ワークショップに参画	29日 「日刊宗谷」まちづくりサロン報告

12月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
2日 教授会で事業実施の報告と提起 (3)	1日 メディア表現指導員就任	3日 地域観光支援室活動レポート no. 5
第8回 COC 推進委員会会議		
9日 第9回 COC 推進委員会会議	1~25日 キタカラでプロジェクト・アート	4日 「北海道新聞」豊富映像作品受賞
15日 文科省より交付請求書の提出指示	20・21日 まちラボプレオープン	10日 「北海道新聞」まちラボプレオープン

16日 第10回 COC 推進委員会会議		19日 まちなか振興支援室活動レポート no. 1 まちなか振興支援室活動レポート no. 2 20日 「稚内プレス」移住者映像作品紹介 「日刊宗谷」まちラボプレオープン予告 21日 「稚内プレス」まちラボプレオープン関連 「日刊宗谷」まちラボプレオープン報告 22日 「読売新聞」まちラボプレオープン報告
----------------------	--	---

平成 27 年 1 月

全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
6日 第11回 COC 推進委員会会議 20日 第12回 COC 推進委員会会議 23日 理事会・評議員会で進捗状況を報告 27日 第13回 COC 推進委員会会議 地域志向教育研究経費の公募開始 30日 COC+事業等説明会に参加	15日 稚内市教育部と協議 第2回 地域観光研究会 29日 稚内ロータリークラブで事業説明 30日 まちラボ1階に移転	6日 まちなか振興支援室活動レポート no. 3 9日 「北海道通信」猿払遠隔学習支援特集 13日 「NHK テレビ道内ニュース」まちラボプレオープン 16日 「北海道新聞」移住者映像作品 19日 地域観光支援室活動レポート no. 6 21日 地域教育支援室活動レポート no. 2 22日 「日刊宗谷」南中坂映像作品受賞 24日 「朝日新聞」本学 COC 事業 25日 「北海道新聞」南中坂映像作品受賞 28日 「稚内プレス」観光セミナー 「わっぴー」まちラボ 30日 「稚内プレス」豊富映像作品受賞

2月

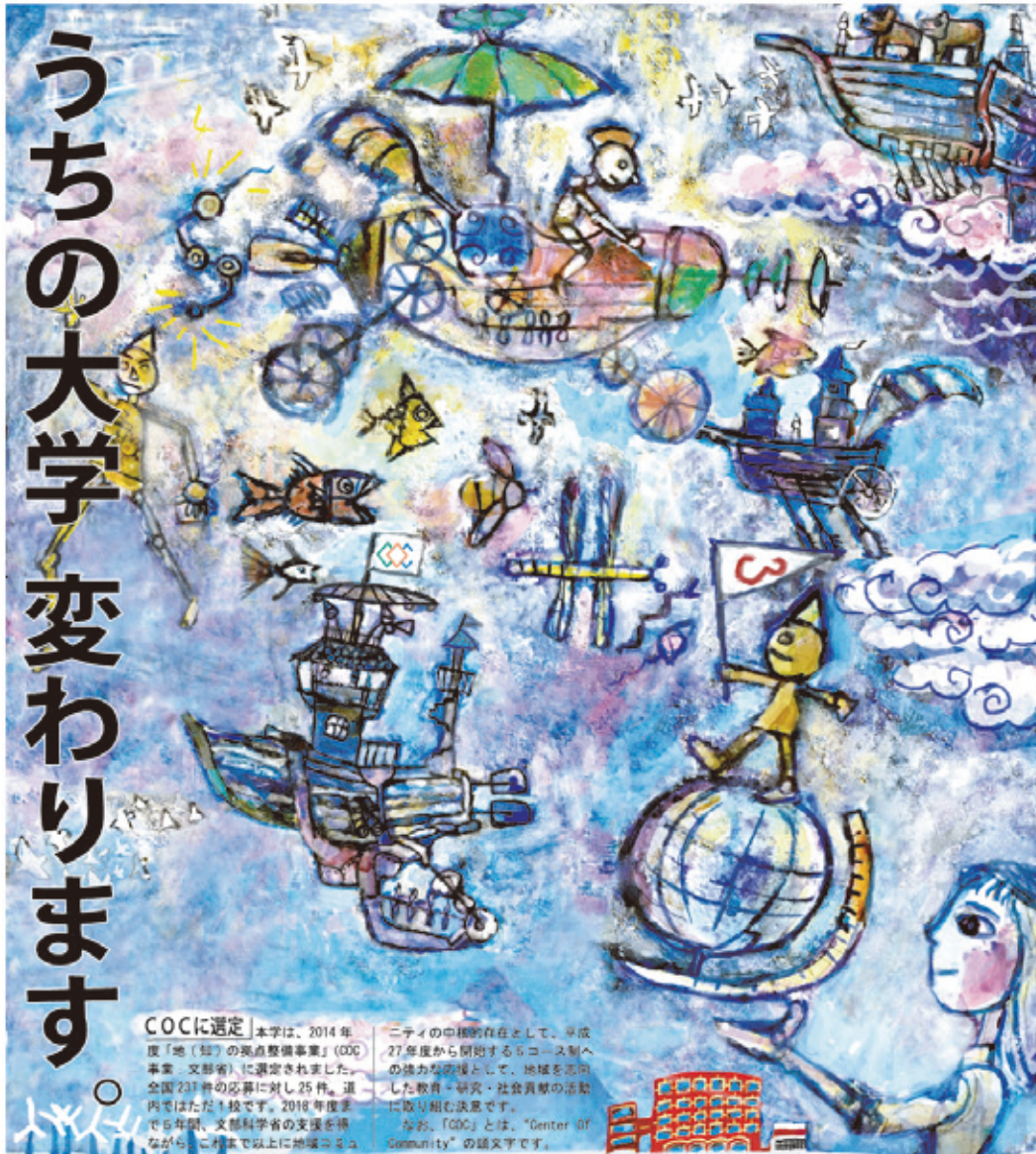
全体	連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道
1日 プログラムオフィサー就任	9日 稚内南ロータリークラブで事業説明	3日 「日刊宗谷」まちラボ移転

12日	第2回 地域活動報告会	11日	「まちラボ」プチオープン開始	13日	「北海道新聞」まちラボ
17日	第14回 COC 推進委員会	13日	子育て運動交流会で教育事業説明	14日	「日刊宗谷」地域活動報告会
20日	プログラムオフィサーが文科省と会談	14日	彩北わっきゃナイトにスノーキャンドル、プロジェクション・アートで参加	18日	公式 facebook ページ公開
24日	教授会で事業実施の報告と提起 (4)	27日	ラーニング・コモンズ先進地視察	19日	「北海道新聞」メディア表現指導員
27日	地域志向教育研究経費に8件応募	27・28日	高知大学 COC シンポジウムに参加	21日	「稚内プレス」まちラボ
				23日	地域観光支援室活動レポート no. 7 地域観光支援室活動レポート no. 8
				25日	COC 推進委員会活動レポート no. 3

3月

全体		連携活動、各課題・各支援室の活動	広報・関連報道		
2日	第15回 COC 推進委員会	15～18日	「まちゼミ」先進地視察	2日	地域観光支援室活動レポート no. 9
10日	第16回 COC 推進委員会 全体会議でプログラムオフィサーが訴え	19日	道北研究会で学長が講演	6日	「日刊宗谷」地域志向教育研究経費
12日	27年度調書提出	26日	「SOYA 地域資源ネットワーク」に出席	17日	「わっぴー」まちラボ
17日	第17回 COC 推進委員会 地域志向教育研究経費プレゼン①	26・28日	本学で実施の潮小春休み学習会に学生が支援	19日	「日刊宗谷」まちラボオープン予告
23日	第1回 COC 推進連絡会議	28・29日	自然の家学習に学生会が支援	28日	「日刊宗谷」潮小春休み学習会
24日	地域志向教育研究経費プレゼン②			29日	「日刊宗谷」自然の家学習会
25日	第18回 COC 推進委員会				
30日	第19回 COC 推進委員会				

広報資料



うちの大学 変わります。

COCに選定 本学は、2014年度「地(知)の拠点整備事業」(COC事業、文部省)に選定されました。全国237件の応募に対し25件。道内ではただ1校です。2016年度まで5年間、文部科学省の支援を得ながら、これまで以上に地域コミュニ

ニティの中核的存在として、平成27年度から開始する5コース制への強力な原動力として、地域を志向した教育・研究・社会貢献の活動に取り組む決意です。

なお、「COC」とは、「Center Of Community」の略文字です。

【数学教育】

道内初となる「数学」の専攻を開設し、数学科を創設。数学科の設置は、道内初となる。数学科の設置は、道内初となる。

【ビジネス観光】

観光とビジネスを結び、観光産業の発展に貢献。観光とビジネスを結び、観光産業の発展に貢献。

【メディア表現】

メディア表現の分野で、地域社会に貢献。メディア表現の分野で、地域社会に貢献。

【地域デザイン】

地域デザインを推進し、地域社会の発展に貢献。地域デザインを推進し、地域社会の発展に貢献。

【情報テクノロジー】

ITエンジニアリングの分野で、地域社会に貢献。ITエンジニアリングの分野で、地域社会に貢献。

2015年度

情報メディアを共通基盤に、何をどう学び、どんな力をつけるのか、よくわかる。〈1学科5コース制〉スタート。

地域の教育力向上とまちづくりで 協働する地(知)の拠点整備

1. 地域の教育力向上

① 放課後学習支援

稚内市内の4つの小学校で継続的に実施されている放課後学習支援「グングン塾」や、利尻町で夏休みに行われている「小中合同学習会」に、本学の教職課程で学ぶ学生が指導助手として参加しています。学生にとっては、教育実践経験を積む貴重な機会となっています。

また猿払村との連携で、インターネットを用いた双方向の遠隔学習支援も行っています。

② ICT(情報通信技術)利用教育

本学の教員が研修などでの講師を務めるほか、今後「調べ学習」と連動させたICT利用のデザインを提案し、ICT利用教育を支援していく予定です。

中央商店街に設置する「まちなかメディアラボ」を活用し、放課後学習支援のほかプログラミング講座などによって、本学が子どもたちへの教育を直接行う計画もあります。



稚内北星学園大学の活動は、
文部科学省
「地(知)の拠点整備事業」
に選定されました。

2. 観光まちづくり

① 観光情報発信

本学ではこれまで、豊富町観光協会と連携し、学生が授業の一環として豊富町の観光に関するWebページの制作に協力し、さらに別の授業では温泉街の復興を図る人々を描いた映像作品「温泉街に、あかりをつけて。」を制作しました。

② 北防波堤ドームで プロジェクションマッピング

北海道遺産に登録されている歴史的建造物・北防波堤ドームに投影する映像作品を制作し、新たな観光資源を提供する予定です。



イメージ図

3. 中心市街地活性化

① 中央商店街にサテライト

稚内中央商店街の空き店舗を活用して設置するまちなかメディアラボには、カメラやビデオの操作、ビジネスソフトやアート系ソフトのオペレーションを身につけた「メディア表現指導員」を配置し、「きれいなポスターを作りたい」「撮ったビデオを編集したい」などの専門的な知識を必要とするニーズに応えます。

この施設は、中心市街地活性化のために学生が集う拠点でもあります。中央地区で若い力が発揮できるよう環境整備を行います。

教員や学生による作品の展示・上映など情報発信の拠点とします。またそれだけでなく、メディア表現を通じて、子どもから高齢者までが気軽に交流できるスペースに育てていきたいと考えています。



ホタカラでの学生作品展示風景

② 「まちなか」コーディネーター

「得する街のゼミナール」略して「まちなか」という活動が全国の商店街に広がっています。

これは、例えば化粧品店が「初心者のためのメイク」、衣料品店が「暮らし活用術」、銀行が「相続税の仕組み」、ペットショップが「その行動には訳がある!」、Barが「家庭でできるカクテル」等々、それぞれのお店がプロとしての知識やスキルを一定期間、無償で提供して多くの人に街に来ていただく試みです。

まちなかメディアラボを起点にして、立案から募集、広告、実施、報告会に至るプロジェクトの全体を、学生がコーディネートして行うことを計画しています。

お問い合わせ先
稚内北星学園大学
フリーダイヤル 0120-311014
E-mail info@wakhok.ac.jp
URL http://www.wakhok.ac.jp
〒097-0013 稚内市豊楽台1丁目2290-28

報道用資料

平成26年12月17日
発信元 稚内北星学園大学

<p>標題 (行事名)</p>	<p>COO事業「地(知)の拠点整備事業」 まちなかメディアラボ(中心市街地活性化)開設のプレオープンイベントについて</p>
	<p>この度、稚内北星学園大学が文科省の採択を受けて実施する、COO事業「地(知)の拠点整備事業」での一部事業として、中心市街地活性化に地域貢献する「まちなかメディアラボ」の拠点を開設するにあたり、プレオープンイベントを開催しますので、お知らせいたします。</p> <p>また、中央商店街で同日開催される「冬のありがとうまつり」の中で、稚内中央商店街振興組合、SOYA PARTY、稚内北星学園大学の連携企画として、先着100名様に素敵なオリジナルグッズをプレゼントする「商店街スタンプラリー」を開催(20日・21日)いたします。</p> <p>市民の皆様のご来場をお待ちしております。</p> <p>○「まちなかメディアラボ」プレオープンイベント 1日目：平成26年12月20日(土) 11:00～19:00(開場時間) 催し物：『すうがく』テクニクでパズルマスターになろう！ ※イベント時間は15:00～16:00</p> <p>2日目：平成26年12月21日(日) 11:00～18:00(開場時間) 催し物：マスキングテープでデコる！手作りクリスマス・オーナメント ※イベント時間は、13:00～14:00 クリスマス絵本の世界へ！(読み聞かせ) ※イベント時間は、14:00～15:00 『すうがく』テクニクでパズルマスターになろう！ ※イベント時間は15:00～16:00</p> <p>場 所：中央商店街「DEPT Kida」2F</p> <p>○「商店街スタンプラリー」(20日・21日両日開催：先着100名様) 実施店舗：ノーザンノース、カナリヤ、国際元気堂、まちなかメディアラボ(北星学園大学)、ギャラリーCHEP(景品引換所)</p> <p>【添付資料】 まちなかメディアラボ、冬のありがとうまつり</p>
<p>問合せ先</p>	<p>担当者：稚内北星学園大学 講師 若原 幸範(携帯090-9528-7107) ” メディア指導員 中野 悠香(携帯090-5221-0467)</p>



Pre Open!
 稚内北星学園大学
Machi Labo
 まちなかメディアラボ
 2014.12.20 sat 11:00 ~ 19:00
 21 sun 11:00 ~ 18:00
 稚内市中央3丁目中央商店街 DEPT Kids さん 2F



先着 100名! プレゼントあり!
連携企画
SOYA 学べる! 健康 PARTY 商店街
 稚内北星学園大学
スタンプラリー

写真や映像もど
 大学生の作品展示中!
大学って
こんなところ!
 大人も子どもも
 気軽にどうぞ!

21日(日)13:00~
 大学の先生が、クリスマスツリーを彩る
 オープメントの作り方を教えます。
 100円ショップの素材が、ちょっとした工夫で
 素敵な手作りオープンメントに変わります。
 子どもも大人も、誰でも簡単にできちゃいます!
マスキングテープでデコる!
手作りクリスマス・オーナメント

21日(日)14:00~
 大学図書館の司書さんが
 クリスマス絵本の「読み聞かせ」
 をします。子どもたちばかりじゃ
 大人の皆さんも一緒に絵本の世界で
 クリスマスを過ごしてみませんか?
クリスマス絵本の世界へ!

地(知)の拠点事業
ってなに?
 これから大学がやろうとしていること

20.21日 15:00~
 大学の先生が、難しいパズルも解ける
 “するがく” テクニクを教えます。
 これとあわせて「パズルマスター」に
 になれるかも? 簡単なコカデモエも
 数学がキライもアタマも、本当は楽しい
 “するがく” の世界をのぞいてみてください!
“するがく” テクニクで
パズル・マスターになろう!

想いをカタチに
 地球の未来を創ろう

まちラボ
稚内北星学園大学
 2015.2.5 vol.1

ぷちオープン
まちなかメディアラボ

なにがどきむの？

- * 宿題しゅくどいしたり * お話お話ししたり
- * 本ほんを読よんだり * のんびりのんびりしたり
- * 職員しやくいんさんや大学生だいがくせいがいつもいるので、相談さうだんだってできる！

保護者の皆様へ
 このチラシは稚内市教育委員会のご協力により、学校を通じて配布させていただきます。

どこにあるの？

稚内駅「キタカラ」から歩いて5分！中央アーケード街「香花堂」さんのむかい側！





地(知)の拠点 稚内北星学園大学

まちラボカレンダー

イベント

2015年2月

14日 12:00-20:00 わくわく☆ほくほく in スノーハウス
 大学のおにいさん、おねえさんがつくったかまくらであそぼう！

21日 10:30-11:00- えほんよみきかせ
 大きなえほんや紙しばいもあるよー！

Sunday	Monday	Tuesday	Wednesday	Thursday	Friday	Saturday
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11 10:00-17:00	12	13 12:00-19:00	14 10:00-17:00
15	16	17	18 12:00-19:00	19	20 12:00-19:00	21 10:00-17:00
22	23	24	25 12:00-19:00	26	27 12:00-19:00	28

あいてる日
じかん
 (あいてる時間)

あいてる日
じかん
 (あいてる時間)

問い合わせ
 稚内北星学園大学(函原・中野)
 電話(0162)32-7511 / Mail info@wakhok.ac.jp



まちラボ
 〓 稚内北星学園大学
 2015.2.5 Vol.1

How to Use?
 自習スペースとして / ミーティングに
 読書したり / 休憩したり
 おしゃべりしたり / コーキングとして

Service
 Wifi 設備
 ポスター・チラシ作成受託
 デザインのお手伝いします。

**ぷちオープン
 まちなかメディアラボ**

Access

稚内駅から徒歩5分!
 中央3丁目9-13
 (※夜間定入庫34%)

地(知)の拠点 〓 稚内北星学園大学

02 まちラボカレンダー

FEBRUARY 2015

SUN	MON	TUE	WED	THU	FRI	SAT
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11 10:00-17:00	12	13 12:00-19:00	14 10:00-17:00
15	16	17	18 12:00-19:00	19	20 12:00-19:00	21 10:00-17:00
22	23	24	25 12:00-19:00	26	27 12:00-19:00	28

問い合わせ
 稚内北星学園大学 (若原・中野)
 Tel.(0162)32-7511 / Mail info@wakhok.ac.jp



14日 12:00~20:00
**わくわく☆ほくほく
 in Snow House**
スノーハウス
 大学生がかまくらを製作!
 かまくら入って、
 いっぱい遊んで、
 まちラボであたたまろう!

21日 10:30~/11:00~
絵本読み聞かせ
 大学生のお姉さんが
 読み聞かせをします。
 大型絵本や紙芝居もあるよ!

地(知)の拠点
2015.3.31 vol.1

COC新聞

稚内北星学園大学



23日 3月

COC事業の成果と課題を確かめ、実り多い次年度を目指す「COC連絡推進会議」を開催▼大学側から6つの報告後、貴重な感想と意見の交換が活発に▼平成26年度は7月に事業選定が行われ最初の一手を打ったところ。平成27年度は本格的な活動が大いに期待されています。



「大学と一緒に地域を明るく元気にするのをとても期待していますよ。」

第1回COC連絡推進会議



稚内の自治体、教育、観光、農工関係者の方々、市民と福祉の教育者さんにも出席いただいた。

上は本事業推進代表の佐々木政康学長。左下は事業推進の責任者、奇勲若広学部長。中央は事業の副総括「プログラムオフィサー」手島孝彦専任教授。右は事業報告する何美優輔学生。COC支援部長。

意見

●大学と地域の関係がよくなったが「教育の僻地性」を克服できる可能性を感じた。●活動がわかりやすい。

教育支援

「子ども育て運動の街」を実践的に学習中。

教師をめざす学生が、年間を通じて「放課後学力アップ」(小中学生)「夏休み学習会」(利用)「テレビ遠隔学習」(狭小)で、子どもたちを支援。

学生COC

●事業の主役は学生。地元企業から「この大学の学生が欲しい」という声を出させて欲しい。稚内の基幹産業を押し上げた活動を期待したい。

観光支援

●稚内の観光の課題は見えてきている。各分野の努力を結び効果を上げるために大学生の参加はとてもし心強い。●若い感性で大いに貢献して欲しい。

まちなか

●とても期待している。大学のイメージを高めたい。●「まちなかラボ」で何かを●商し●民にわかれ●店街を上げて欲しい。

意見

●中心市街地の活性化を支援する「まちなかラボ」(まちなかメディアアラボ)を中央商店街の空き店舗に設け整備を開始した。市民と学生がメディア表現を学んだり、「まちなか」や小中学生対象の「無料塾」の拠点を市民と一緒に育てたい。

意見

●稚内観光の情報発信の研究、観光ガイドアプリの開発、プロジェクトの試行を行った。冬のイベントで学生作品の表現機会が生まれたことが成果。本支援室として研究会と外部講師の連携も行った。

街が変わるよ



「地(知)の拠点整備事業」(大学COC事業)とは、地域を志向した教育・研究・地域貢献を進める大学を文部科学省が5年間支援し、地域コミュニティの中で「地(知)の拠点」的存在の機能強化を目的としています。昨年は全国237件の応募があり25件、道内では本学1校が選定されました。「COC」とは、「Center Of Community」の頭文字です。

まちなかラボ
4月18日(土) 10:00～
中央3丁目9-12 (中央アーケード街 香花堂さん向い)

COC新聞 今の創刊号から、今後4年間、年間3回の発行です。本事業については大学ニュース(「広報わっかない」に折り込み)にも随時掲載。

新聞記事

平成 26 年度の本学 COC 事業については、多数新聞やテレビにおいて報道された。以下では、その中から一部を転載し紹介する。

2014 年 7 月 11 日 日刊宗谷

利尻で夏休み講師

稚内北星大学 教員目指す学生 8 人

稚内北星大学で、将来教職員を目指す学生 8 人が、25 日から利尻町教委が実施する「夏休み小中合同学習会」に講師ボランティアとして参加。頼れる「お兄さん・お姉さん先生」として、島の子ども達に勉強を教える。

参加するのは、2 年濱田百代。3 年岡部浩幸、石田裕哉、木村英之、橋本薫、渡辺千尋。4 年江戸勇介、松尾響さんの 8 人。それぞれ現在、教職課程を履修している。

日程は 25 日からの 3 日間。利尻町内 2 小学校から約 100 人が集まる予定。学習会は各日とも 2 時間。自主学習や基礎学力問題集を配く内容が主となる。大学生が地域に足を運び、子ども達の学力向上を支援する新しい試み。同大学でも、将来に向けた現地実習として役立てていなど、効果に期待。地元根ざした同大学ならではの取り組みとして、今後は他の市町村などでも行う。(横山淳也)

2014 年 8 月 1 日 読売新聞 (道北 12 版 25 面、地域)

稚内北星学園大(稚内市)が、文部科学省の「知(知)の拠点整備事業」の今年度の利尻校に選ばれた。

この事業は、地域コミュニティの中核的な存在としての大学の機能強化を図るもの。同大は「地域の教育力向上とまちづくりを協働する地(知)の拠点整備」をテーマに掲げ、①稚内市、利尻町の放課後学習支援など地域の教育力向上を図る。②観光や観光情報発信の中心市街地活性化——などの事業を進める計画だ。

活動には教員と学生が全員参加し、市内と稚内市の中心市街地に一つの活動拠点を設ける。活動を授業科目に織り込んで単位の認定することも検討している。

拠点整備事業には今年度、全国から 6 団体が選定された。道内では 12 校(16 校)の志願があり、同大だけが選ばれた。昨々本校専攻長は「地域の元気に貢献したい」と話している。

2014年8月1日 日刊宗谷

市街地活性化など3本柱

地(知)の拠点整備事業

道内で唯一採択

稚内北星学園大学 責任持って取組む

稚内北星学園大学が、道内唯一の責任を持って採択された「地(知)の拠点整備事業(入学COO事業)」が採択された。

同事業は、今年度から5か年で大学の教育・向上・観光まちづくり・中心市街地活性化を3本柱とする「地域の教育力向上とまちづくりで活躍する地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。

「地(知)の拠点整備」は、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。

「地(知)の拠点整備」は、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。

「地(知)の拠点整備」は、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。具体的には、道内各地に「地(知)の拠点整備」を進める。

「これから取組む事業は、向は準備を進めるが、市街地活性化は、学生や市民も積極的に参加し、実現を目指す」と期待している。

(責任者 採択)

2014年9月9日 日刊宗谷

稚内市と稚内北星学園大学

包括連携協定を締結

人材育成に貢献

教育、観光など全6項目

稚内市と稚内北星学園大学では、まちづくりや観光振興、教育面の推進、飛躍に向けた連携を図るため「包括連携協定」を締結した。期間は3年間（延長あり）とし、大学生ボランティア派遣事業の継続実施や中心市街地活性化など、各分野の取組みを充実させていく。

（横山 尊也）

協定は全6項目。この中で、同大学が東京に持っているのが「教育・観光・まちづくり」の3点。教育では、これまで教職員を志す学生らが取組む児童生徒への学習支援等の推進や、同大学の専門性・技術力を活用したICT機器の実践的活用への教育。また、高齢者向けのIT学習講座など盛り込んでいく。

観光面では、スマートフォン向けの「稚内観光ガイドアプリ」の開発や、歴史の建造物に映像投影するプロジェクションマッピングの推進。また、稚内市の観光交流課のフェイスブックを通じて情報発信など。

まちづくり面では、今後国の補助を得て中央地区に建設する「まちなかメッセアトラポリ」の運営、若者目標を定めた各種計画策定への参加などを主な内容に挙げている。

このほか環境保全や防災対策、学生と高齢者の手際の場を創出する促進福祉などの項目もあり、同大学では「専門分野など新しい点もあるが、出来る限り協力したい」と意欲を見せる。

今後は、これらをも円滑に推進するための組織作りにも着手。両者が持続的に連携を深めることで、地域の未来を担う人材の育成、文化活動の推進を含めた地域貢献に努むっていく。

（活動の推進を含めた地域貢献に努むっていく）

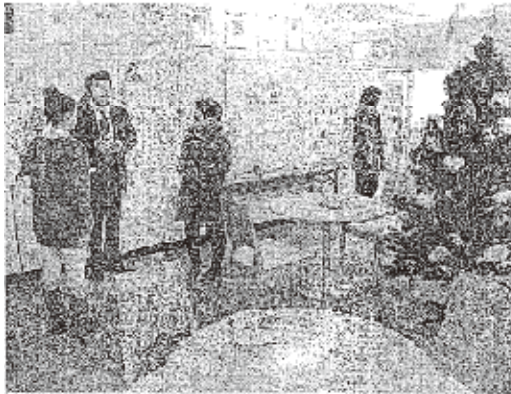
2014年12月21日 日刊宗谷

稚内北星学園大学 地(知)の拠点 事業

期待抱かずオープン

まちなかメデイアラボ 新年度に本格始動

稚内北星学園大学が「まちなかメデイアラボ」の特定用途複合事業のなかで取組む「まちなかメデイアラボ」が、20日から2月16日、中央アークドームでプレオープンした。内装などの全体像は概ね見えており、市民が気軽に足を運べるスペースになっている。



プレオープンしたラボ内

子ども達の学習場所にも使える多目的スペースが併設してあり、幅広い年代が使用できる工夫を凝らしている。プレオープン期間中は、市民へのお披露目として多くの催しを用意。きょう21日は、午後1時から手作りオーナメント作り。同日、絵本読み聞かせ。同時、数学講座を予定。メディア表現指導員として

常駐する中野悠香さんは「これから同ラボがまちの力になれるよう多くの富貴を誇りたい」とPR。アーケード内で同時開催する「冬の

ありがとうまつり」と共に、多くの来場を呼びかけている。百大学によると、正式オープンは来年度の予定。今後は映像編集や画像処理などの専門技術を教える講座のほか、学生らが中央地区で活動するための拠点

子どもから高齢者までが気軽に交流できるスペースとして、重要な役割を担っていく。

(本山学誌)

2015年1月9日 北海道通信

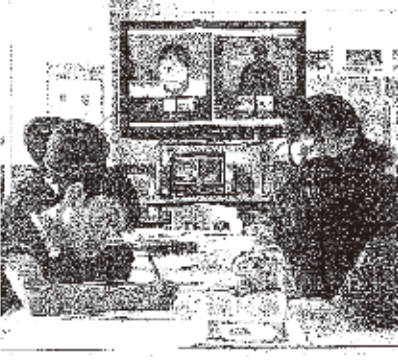
遠隔授業で広がる可能性 地域の教育格差是正へ

【道の国】道民の生活、人口減少に伴う学校の統廃合、塾の減少など、はた国内でも主要な都市圏を除き、道内が小規模な自治体が多い中、道民の文化向上、学生第一校としての文藝活動の振興を促す、併せてIT技術の活用による遠隔授業の推進に教育関係者は注目を集めている。稚内北星学園大学は、道内各地に設置した遠隔授業センターを拠点として、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

意欲向上に手応え―稚払村教委

学びのネットワーク構築へ

稚払村教委は、昨年度より、遠隔授業の導入を推進している。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。



画面越しながら、大学生の先生と積極的、主体的な学習を促している。

取組を進め、この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

楽しみながら学べるように

楽しみながら学べるように、この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

地域の教育格差是正へ、この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

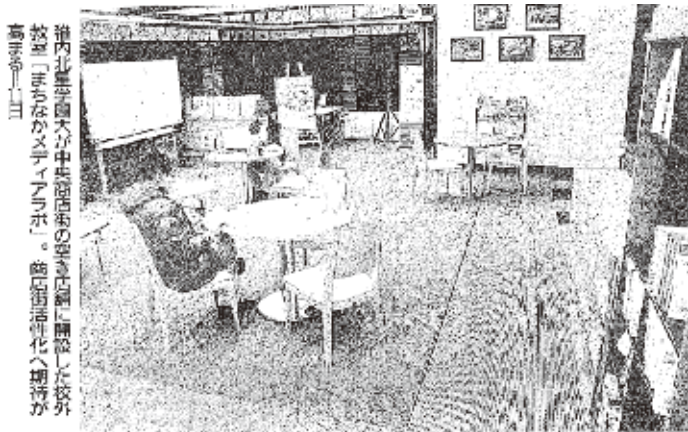
宗谷のためにあるもの

宗谷のためにあるもの、この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

大学に聞く「遠隔授業」

大学に聞く「遠隔授業」、この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。この取り組みは、道民の文化向上と教育の振興に努めている。

2015年2月13日 北海道新聞



稚内北星学園大が中央商店街の空き店舗を借り、開設した校外教室「まちなかメディアラボ」。施設活用活性化へ期待が寄せられている。(13日)

パソコン指導、子供の教育支援

空き店舗に校外教室

中央商店街活性化に道

稚内北星大

【稚内】稚内中央商店街の空き店舗を活用し、稚内北星学園大が市民に学習の場を無料で提供する取り組みが始まった。「教室」がオープンした11日は、市保らが同大職員からパソコン技術を学び、読書したりして過ごした。今年7月、2店舗が完全に閉店するなど、入居りの少なさを悩む中央商店街で、新たな盛り上げの核として期待される。

開設したのは校外教室「まちなかメディアラボ」。1月まで子供服専門店が営業していた空き店舗で、130平方メートルの開放的な空間に電子やテーブルを複数用意した。同大職員の中野悠香(ゆうか)さんが責任者を務める。香る(か)23が兼任し、希望者にワードやエクセルなどパソコンの基本操作を教える。現在は1台だけだが、4月に以降、新たに3台設置する。

図書情報誌も備え、市立図書館から借りた約200冊の書籍やマンガを置き、2カ月に1度入れ替える。中野さんは「予約もいらないので、学校帰りの自習や読書、買い物帰りに休憩するなか、気軽に利用してほしい」と話す。

4月からは同大の学生が定期的に教室を訪れ、子供の習字指導など教育支援も行う。将来的には、小中学生を対象にした無料の塾と「まちなか」も計画している。

教室は教室の持ち込みも自由。向かいで営業する菓子店「西匠(さいしゅう)」の斎藤良夫社長は「教室を訪れる市民が、周辺の店も利用してくれるとありがたい」と波及効果を期待する。

2、3月は試験期間として毎週末、命日の正午〜午後7時まで開けるほか、土曜日はイベントを開催する日もある。4月以降は週1回の休日を確保し、早朝から夜まで順次開放する予定だ。同大が昨年、市保に空き店舗を借り、活用を進めた事例は、文科省が推進する大卒を支援する「文科科

(利用番号 11005)

2015年2月14日 日刊宗谷

地(知)の拠点整備事業

今年度の成果を発表

人材育成第一に

稚内北星学園大学 まちクラブや学習支援

稚内北星学園大学の「地(知)の拠点整備事業」第2回地域活動報告会は12日、同大学で管内7町村や教育関係者など約50人が出席して開き、中央アーケードに開設した「まちなかメディアラボ」をはじめ、これまで実施した各種取り組みを紹介した。

同大学1年松尾啓、2年美介潤君は、昨年9月に浅茅野小(磯弘市)と入学をネットで行って実施した、ICT技術を活用した遠隔学習支援をプレゼン形式で紹介。「テレビ画面を共有して乗った」、

「一歩かいて、勉強を教える」をテーマにした「まち(知)の拠点整備事業」第2回地域活動報告会は12日、同大学で管内7町村や教育関係者など約50人が出席して開き、中央アーケードに開設した「まちなかメディアラボ」をはじめ、これまで実施した各種取り組みを紹介した。

また、中央アーケードで開設の「まちなかメディアラボ」について、若原幸嗣同大学講師が、中心市街地における学生達の活動拠点や情報発信基地とする趣旨を説明。今後は、子ども達の自習部図やそれに伴う学習支援、更に、市民講座やキャリアリースペースとしての活用など、誰でも使える交流の場にしてゆきたいとした。

このほか、地域に根ざした活動として、昨年10月に実施した「まちなかサロンの開催」や、「北星学園大学」や、「公立の伊藤亮、工藤佑平、白石拓也各々が制作し、全国規模の映像コンテストでの受賞歴を持つ、星岡町のマチおこしを紹介する作品」の発表等に、あかりをつけて「紹介が行われた。

昨年7月に採択された事業は、地域に根ざした教育、研究などを進める大学を、国が5か年におよび支援。来年度からの各種取り組み



地(知)の拠点整備事業第2回報告会

が本格化するまで、佐々木敬輔学長は「学生の自主性を重んじ、

地域を支える人材育成を第一としている。温かく見守らなければならない」と、地域連携の重要性を強調する。

(横山淳也)

2015年2月21日 稚内プレス

まちなかラボ開設 北星大 アーケード街一角に

中央アーケード街のまちなかラボを併用し開設された「まちなかメディアラボ」(仮称「まちなかラボ」という)施設に地域住民が学習したり情報交換の場として活用されている。

このまちなかラボは、稚内北星大が文科省の認定を受け、地(知)の拠点整備事業の取り組みとして中心市街地の活性化を目的と開設したもので、

に哲子やティールを備え、子どもや若者に学習したり、ここで自由に学習したり、図書館から借りた本を自由に読書などが楽しめる。本館には4月オープン



ンするが、試験期間として3月末まで再遊水・金曜日正午～午後7時まで、土曜日は午前10時～午後5時まで休んでいる。

21日午前中に本の読み聞かせがあり、若者がパソコンを使ったり読書したり遊んでいる。

4月以降、学生による小中学生対象の無料の学習の場、パソコン講座などを開く計画で、箕輪スタジオの中野悠希さん(23

「人は人が集まるといい」と勉強したり、情報交換の場を確保したい。積極的にしてほしい」と話し、月々入金が自由にできている。

2015年3月23日 北海道新聞

「地域貢献する大学に」

稚内北星大学長が講演 名



【名寄】名寄市立大で昨「まへ」学長が先頭に立つて
 かれた道北の地域振興を考 津めた。地域に必要とされ
 える研究会（神奈川三郎会 する大学改革）の取り組みを
 長）十位の研究会、地風 解九、地域教育委員、職業
 社会界の教育機関の役割を テーマに、稚内北星大の位
 々大政学長と、おといね 化に関する支援室の開設
 った。佐々木学長は、おといね なし学生と教員が進める事
 百感千折の佐佐木学長が 助である人材の育成をし
 同校の歩みを取り組みを紹 述べた。
 介した。

19日に開催。佐々木学長
 は1987年の短大設立時
 から、定員割れの現状が大
 学に対する市民の厳しい目
 があったことへの反省を語
 った。佐々木学長は、

「一方、佐佐木学長は、道内
 で唯一の村立高校につい
 て、当初は進学者が多く、
 伴員の評価が低い時代があ
 ったことなども、美術・
 工業の特色ある教育
 を得た結果、生徒
 の100%が村外が
 地域に定着した大
 改革を語る。佐々木
 大の誇る本校は、

「まへ」学長が先頭に立つて
 津めた。地域に必要とされ
 る大学改革の一の取り組みを
 解九、地域教育委員、職業
 社会界の教育機関の役割を
 テーマに、稚内北星大の位
 々大政学長と、おといね
 なし学生と教員が進める事
 助である人材の育成をし
 述べた。

(利用番号 11005)

2015年3月28日 稚内プレス

5年生が試験的に実施

市教委の春休みグングン塾



算数の復習に取り組む5年生

百教委主催の「ステップ
 アップ春休み学力グン
 グン塾」が27日から中央
 小、潮見が丘小5年生を
 対象に始まった。
 グングンは、成26年
 度から小学3、4年生を
 対象に基礎学力向上を目
 標に実施しており、保護

者から申し込みが上がって
 純けてほしいとの要望
 もあり2年前にグングン
 塾を初めて受けた現在の
 5年生が試験的に参加す
 ることになった。
 潮見が丘小5年生55人
 は北星大学の教室を借り
 教育研究所の江川先生所
 長と同大学で教職課程を
 専攻する学生3人から算
 数の計算、図形など判ら

受け取り進んでいた。
 塾は31日と4月14日
 あり算数の復習を行う。

12. 規 程 集 (平成 27 年 3 月 31 日現在)

稚内北星学園大学 COC 推進委員会規程

平成 26 年 12 月 1 日 制定

(目的及び設置)

第 1 条 文部科学省「地（知）の拠点整備事業」に採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地（知）の拠点整備（以下「事業」という。）を全学あげて強力で推進するため、稚内北星学園大学に COC 推進委員会（以下「推進委員会」という。）を設置する。

(業務)

第 2 条 推進委員会は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業の実施に関すること
- (2) 事業の予算及び決算に関すること
- (3) 地域志向の教育・研究・社会貢献に関すること
- (4) 地域との連携に関すること
- (5) 学生参画に関わる業務組織間の調整及び学生生活動の監督・助言ならびに情報の発信に関すること
- (6) 文部科学省への報告等に関すること
- (7) COC 外部評価委員会への諮問に関すること
- (8) その他事業の推進に関すること

2 前項の業務について、本学が定める他の規程と重複する場合は、この規程を優先とする。

(組織)

第 3 条 推進委員会の委員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長「事業推進代表者」
- (2) 学部長「事業推進責任者」
- (3) 地域教育支援室長
- (4) 地域観光支援室長
- (5) まちなか振興支援室長
- (6) 学生 COC 支援室長
- (7) 学内理事
- (8) 図書館長
- (9) プログラムオフィサー

- (10) 学習コンシェルジュ
- (11) 事務局長
- (12) 事務局次長
- (13) 総務課長
- (14) メディア表現指導員
- (15) その他、学長「事業推進代表者」が必要と認めた者
(委員長)

第4条 推進委員会に委員長を置き、学長「事業推進代表者」をもって充てる。

- 2 委員長は、推進委員会の業務を総理する。
(副委員長)

第5条 推進委員会に副委員長を置き、学部長「事業推進責任者」をもって充てる。

- 2 副委員長は、委員長を補佐し、委員長に事故があるときはその職務を代行する。
(プログラムオフィサー)

第6条 推進委員会にプログラムオフィサーを置き、次に掲げる任務を遂行するものとし、学長「事業推進代表者」が委嘱する。

- (1) 事業全体の進捗状況等に関すること
- (2) 自治体・企業・機関・団体等との連携協力への支援に関すること
- (3) 評価システムの整備に関すること
- (4) その他事業を推進するための助言・提起・参画に関すること

- 2 プログラムオフィサーの業務の詳細な内容については、学長「事業推進代表者」が別に定める。
(推進委員会議)

第7条 推進委員会議は、副委員長「事業推進責任者」が招集し、その議長となる。

- 2 推進委員会議は、月1回開催する。但し、必要ある場合は、随時開催することができる。
(業務推進)

第8条 推進委員会が決定した本事業の実施にかかる第2条に規定する業務について、具体的に内容を検討し推進するための業務推進の組織を、次の表に掲げるとおりとする。

業務名	業務推進組織
地域志向の教育に関する業務	学長「事業推進代表者」が指名する教職員の組織
地域志向の研究に関する業務	学長「事業推進代表者」が指名する教職員の組織
地域志向の社会貢献に関する業務	地域教育支援室（地域の教育力向上）

学生参画に係る業務組織間の調整及び学生生活動の監督・助言並びに情報の発信に関する業務	地域観光支援室（観光まちづくり） まちなか振興支援室（中心市街地活性化） 学生COC支援室
--	---

2 各業務推進組織は、審議内容等について、随時、推進委員会へ報告するものとする。

（わくほくメディアラボ）

第9条 推進委員会は、本学の教育並びに研究等を支援するため、学内にラーニング・コモنزの拠点として「わくほくメディアラボ」（以下「わくラボ」という。）を設置する。

(1) 「わくラボ」は教授会に置き、管理は図書館をもって充てる。

2 「わくラボ」には、学生の能動的・共同的な学習を支援するため、学習コンシェルジュを配置する。

3 「わくラボ」の管理規定等については、図書館長が別に定める。

（まちなかメディアラボ）

第10条 推進委員会は、地域を志向した地域課題への取り組みを支援するため、学外にアクティブ・ラーニングの拠点として「まちなかメディアラボ」（以下「まちラボ」という。）を設置する。

(1) 「まちラボ」の管理は、まちなか振興支援室をもって充てる。

2 「まちラボ」には、学生の地域活動や学習支援、ICTを活用したサテライト教室等の取り組みを支援するため、メディア表現指導員を配置する。

3 「まちラボ」の管理規定等については、まちなか振興支援室が別に定める。

（関係組織等の協力）

第11条 推進委員会は、業務の遂行上必要があるときは、関係組織等に対し、教職員の出席や資料の提出など必要な協力を要請することができる。

2 前項の要請があった場合、関係組織等は推進委員会に積極的に協力しなければならない。

（事務）

第12条 推進委員会の事務は、大学事務局において行うものとする。

（補則）

第13条 この規程に定めるもののほか、推進委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 この規程は、平成26年12月1日から施行する。

稚内北星学園大学 COC 推進連絡会議規程

平成 27 年 3 月 23 日 制定

(目的及び設置)

第 1 条 文部科学省より採択された「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備事業」(以下「事業」という。)における大学と地域との連携を円滑に推進するため、稚内北星学園大学に COC 推進連絡会議(以下「推進連絡会議」という。)を設置する。

(業務)

第 2 条 推進連絡会議は、次の各号の業務を行う。

- (1) 事業の推進にかかる成果の確認及び課題の整理並びに翌年への改善・提言に関すること
- (2) 大学と連携した自治体関係部署及び関係機関・団体との協力・連絡調整等に関すること
- (3) COC 推進委員会(以下「推進委員会」という。)への要望や意見の集約に関すること
- (4) その他、大学と地域との連携を円滑に推進するために必要なこと

(組織)

第 3 条 推進連絡会議の委員は、次に掲げる者をもって組織する。

- (1) 学長「事業推進代表者」並びに学部長「事業推進責任者」
- (2) 本事業の連携及び協力・連絡調整等に関わる自治体及び関連機関・団体の関係者
- (3) 地域教育支援室長並びに副室長
- (4) まちなか振興支援室長並びに副室長
- (5) 地域観光支援室長並びに副室長
- (6) 学生 COC 支援室長並びに副室長
- (7) 図書館長「わくほくメディアラボ室長」
- (8) COC プログラムオフィサー
- (9) 学習コンシェルジュ並びにメディア表現指導員
- (10) その他、学長「事業推進代表者」が必要と認めた者

(議長)

第 4 条 推進連絡会議に議長を置き、学長「事業推進代表者」をもって充てる。

- 2 議長は、推進連絡会議の業務を総理する。
- 3 議長に事故があるときは、あらかじめ議長の指名する委員がその職務を代行する。

(会議)

第 5 条 推進連絡会議は、議長が招集し、必要に応じて開催する。

(事務)

第6条 推進連絡会議の事務は、大学事務局において行うものとする。

(補則)

第7条 この規程に定めるもののほか、推進連絡会議の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則 この規定は、平成27年3月23日から施行する。

稚内北星学園大学地(知)の拠点整備事業外部評価に関する要綱

平成27年4月6日制定

(趣旨)

第1条 この要綱は、地(知)の拠点事業に関する「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備事業(以下「大学COC事業」という。)」の実施について、外部における事業評価に関して必要な事項を定めるものとする。

(設置)

第2条 外部の事業評価機関として「地(知)の拠点整備外部事業評価委員会(以下「評価委員会」という。)」を設置する。

(任務)

第3条 評価委員会は、稚内北星学園大学の実施する大学COC事業における事業実績について学長の諮問に応じ、別に定める評価の実施要領に基づいて評価及び評価に際して必要な事項を行う。

(組織)

第4条 評価委員会は、次の委員をもって組織する。

- 一 他大学の地域志向教育や研究等に精通する研究者 1名
- 二 連携自治体以外の地域振興関係行政機関の職員 1名
- 三 一般の有識者 若干名

2 前項各号の委員は学長が委嘱する。

3 第1項各号の委員の任期は2年とし再任を妨げない。ただし、委員に欠員が生じた場合の補欠の委員の任期は、前任者の残任期間とする。

(運営)

第5条 評価委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

第6条 評価委員会の招集は、必要に応じ学長が行う。

第7条 評価委員会は、必要に応じ委員以外の者の出席を求め、意見を聞くことができる。

(報告)

第8条 評価委員会は、評価結果について学長に報告しなければならない。

(庶務)

第9条 評価委員会に関する庶務は、大学事務局総務課において処理する。

(雑則)

第10条 この要綱に定めるもののほか、評価委員会の運営に関し必要な事項は、別に定める。

附 則

1 この要綱は、平成27年4月20日から施行する。

2 この要綱施行後、最初に選出された第4条第1項各号の委員の任期は、同条第3項の規定にかかわらず、平成29年3月31日までとする。

稚内北星学園大学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」におけるプログラムオフィサーの任務(通達)

平成27年2月1日 制定

稚内北星学園大学COC推進委員会規程(平成26年12月1日)第6条第2項に規定する「プログラムオフィサーの業務の詳細な内容」について、以下のとおりとする。

この通達は、平成27年2月1日から施行する。

稚内北星学園大学「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」における
プログラムオフィサーの任務

本学COC事業「地域の教育力向上とまちづくりで協働する地(知)の拠点整備」におけるプログラムオフィサーは、事業全体の進捗状況を把握しながら、学外との円滑な連携協力を図るとともに、適切な評価システムを整備することを任務とする。COC推進委員会は、プログラムオフィサーから計画の改善・見直し等の提言があった場合には、すみやかに検討を行い、改善・見直し計画案等を策定するものとする。

(1) 進捗状況の把握

・「COC推進委員会」や「地域活動報告会」への出席ならびに当該委員会からの情報提供により、事業全体の進捗状況を把握する。

- ・①地域の教育力向上 ②観光まちづくり ③中心市街地活性化という本学 COC 事業の掲げた課題それぞれについて議論や取り組み、実施環境、地域連携、人的配置、広報などが適切であるかを点検するとともに、全体のバランスにも配慮して必要な助言を行う。
- ・各「支援室」の社会貢献活動等、地域と連携する活動について、適宜現場への視察を行う。
- ・実施計画の内容およびスケジュール設定などについて、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して、必要な変更・調整について提起する。
- ・状況に応じた事業全体の方向性の改善ならびに新たな活動内容について、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して提起を行う。

(2) 連携協力への支援

- ・稚内市ならびに宗谷地域の自治体・企業・機関・団体との連携協力を強化するために、仲介・調整・視察・広報など必要な活動を行う。
- ・「COC 推進連絡会議」の構成員選定につき COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言するとともに、当該会議の企画立案に参画する。
- ・連携対象の追加および当該対象との連携課題設定について提起・調整する。
- ・「COC 地域シンポジウム」「COC 全国シンポジウム」の企画立案に関して、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言を行う。

(3) 評価システムの整備

- ・「COC 外部評価委員会」の構成員選定につき、COC 推進委員会または事業推進責任者に対して助言するとともに、評価基準・方法について提起する。
- ・「地域志向教育研究経費」の採択基準の策定および採択につき必要な助言を行うとともに、研究成果に対する評価に参画する。
- ・経費使用の適切性について、COC 推進委員会に対して必要な意見を述べる。

問い合わせ先

稚内北星学園大学

COC推進委員会事業推進室（事務局総務課）

〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28

T E L 0162-32-7511

F A X 0162-32-7500

E-mail info@wakhok.ac.jp

わくほくCOCホームページ

<http://coc.wakhok.ac.jp/>

COC推進委員会平成26年度事業実施報告書編集小委員会 委員一覧

- 齊藤 吉広（学長／教授／事業推進代表者）
- 手島 孝通（客員教授／プログラムオフィサー）
- 小谷 彰宏（准教授／COCデザイン堂）
- 黒木 宏一（講師／事業推進室長）
- 高 澍（特任助教／学習コンシェルジュ）
- 中野 窓香（メディア表現指導員）
- 向 光宏（事務局総務課／事業推進室）

平成26年度地（知）の拠点整備事業
事業実施報告書

2015（平成27）年12月15日発行

編 集 COC推進委員会平成26年度事業実施報告書編集小委員会

装 幀 小谷 彰宏

発 行 稚内北星学園大学 COC推進委員会
〒097-0013 北海道稚内市若葉台1丁目2290-28
電 話:0162-32-7511（代表）
メー ル:info@wakhok.ac.jp

無断転載を禁じます。

